

東京立正女子短期大学紀要

第 12 号

目 次

日本の英語教員養成を考える

——ロンドン大学教育研究所・ソ連研修旅行に参加して——…田 島 富美江 (1)

英訳『開目抄』(日蓮) ……………堀 教 通 (21)

Begin + 後統動詞群の深層構造……………清 水 純 子 (46)

幼児・学童期における安全能力に関する一考察 —その2— ……杉 江 つ ま (64)

幸田露伴の文学と仏教……………石 川 教 張 (121)

キリシタンの神話的世界(一)

——「天地始之事」における天狗の意義——……………紙 谷 威 廣 (144)

1984

東京立正女子短期大学

日本の英語教員養成を考える

— ロンドン大学教育研究所・ソ連研修旅行に参加して —

田 島 富美江

I

私は、1982年10月より約9ヶ月にわたり、ロンドンで生活する機会を得ることができた。生活の場となったロンドン大学教育研究所の寮は、各国からの留学生が多く、まさに世界の英語が一堂に集まったといっても過言ではない。そこでは、日本の学校（中・高・大学）で使用されているテープなどから流れてくるような純粋な英語は、僅かなイギリス人を除いては、全く聞かれない。奇妙な発音やイントネーション、間違いの多い文、それに加えてスピードの速さ、そのような話し手とのコミュニケーションは、非常に苦しいものである。そして、毎日彼等の英語に接しつつ、時々日本に目を向けると、現在の日本における英語教育（学習）の効率の悪さが、あらためて浮き彫りにされるのである。

日本の教育の中に埋没していると、いわゆる木を見て森を見ぬ生活に追われてしまうのであるが、ロンドン滞在中は特に時間を設けて、イギリス内外の多くの学校や教育施設を見学する計画をたて、あたかも、宇宙から地球を眺める如く、日本の教育、特に英語教育について熟考することができたのは、非常に幸運であった。

本稿は、1983年4月、当教育研究所内の Department of Comparative Education の企画になる“Academic Tour to the USSR”に参加して得られたソ連の教育事情のうち、特に、英語教育の部分を中心に紹介し、それにより、日本の英語教育を再考し、その改善への道を探ろうとするものである。本題に入る前に、今回の Academic Tour の内容とソ連の教育事情について、見たまま、聞いたままを述べさせていただくのも意味あることと思われる。

II

今回の研修旅行の参加者は、イギリス人15名をはじめとして、各国からの留学生を含めて40人から成るもので、そのほとんどが教職に携わる者であり、専門は音楽・美術から、生物学・心理学等に至るまで多様であった。9日間(1983年4月9日から16日まで)という短かいものであったが、教育施設の見学、大学や特別英語学校訪問、ソ連の教育者達との質疑応答やディスカッション、絵画・彫刻にオペラやダンス観賞、それにモスクワ、レニングラードの観光、とスケジュールはハードで密度の濃いものであった。参加するに当って、ソ連の事情を理解するために、十数冊の本がリストアップされていたが、すべての参加者は、それぞれ専門分野が異なるので、各自の疑問をも解消するため受け入れ側にも十分準備してくれるよう要求が出されてあったようである。私も、レニングラード大学の英語教育の専門教官である Ms. T. Kuzmicheva と面談の機会を得られるなど充実した企画であった。

私達はまず、4月11日10時にモスクワの The Academy of Pedagogical Sciences(APS)を訪れた。APS とは、教育政策や教育刷新のための“Brain Center”とも言われる重要な位置を占めるものであり、13の institutes がこれに所属しているという。文部省を代表して Prof. Gafonova をはじめ、いくつかの instituteの中から数名が加わって私達を出迎えてくれた。Prof. Gafonova はソ連の教育システムをはじめ、テキスト編集や15のソヴィエト共和国との関連などを説明されたが、その中で、7歳から始まる10年制の ordinary school (普通教育学校)と並行して、specialized school (特別学校)が存在することをのべられた。これは、ある特定の分野に興味や才能のある生徒たちのための学校で、1つのものへの興味や才能を効率的に伸ばそうというのが、その存在理由であるらしい。英語をはじめ、フランス語、ドイツ語、化学、生物、物理の7つのタイプの特別学校の他、美術、芸術、スポーツなどの特殊学校(パイオニアパレスなど)が設けられているようである。ソ連には言語の特別学校だけでも約1000校あり、英・独・仏などのヨーロッパ言語に加えて中国語とヒンディ語も教えられているという。そのうち41校がレニングラードにあり、さらにその中の27校が英語、6校がフランス語、4校がドイツ語ということからも、ソ連においても英

語学習人口がいかにか多いか明瞭である。

私達が訪問した中で、英語教育に関係する施設としては、特別英語学校 No.4（モスクワ）とNo.61（レニングラード）であって、そこでは教職員のみならず、全生徒による歓迎を受けた。いずれの学校においても、教師は十分な英語力を備えていたが、歓迎の挨拶や学校の沿革などの説明はロシア語で行い、高学年の生徒に通訳させたり、校内の museum の説明を生徒に任せるなど、生徒の speaking の力のすばらしさに大きな自信をもっていたようであった。生徒の英語は、同行のイギリス人やアメリカ人も驚くほど、発音やイントネーションは正確であり、しかも訪問者の質問に対しても、正しい英語で自信をもって答えている点などは、ソ連の英語教育の成功を物語るものといえよう。確かに、特別英語学校の生徒だけあって、彼等は才能があり敏感で、しかも一生懸命勉強に励んでいるようであった。教師と生徒の接触のしかたなど、情意面の教育に対する基本的方針においては、この2つの学校には大きな違いがみられたが、学校教育のカリキュラムは全国的に統一されているということであった。特別英語学校においては、英語を除く科目は普通教育学校におけると同一時間数であるが、それに加えてかなりの時間が英語に当てられていることは、下に示した表で明らかである。

ソ連の学校における週当りの英語学習時間数の比較

学 年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
学 校										
普通教育学校				4	3	3	2	2	1	1
特別英語学校		3	4	6	6	6	5	5	5	4

1 授業時間は普通45分、1クラスの生徒数は、他学科においては30～42名であるが、英語のクラスのためにそれらは $\frac{1}{2}$ または $\frac{1}{3}$ に分けられ、事実上12～20名であった。教室内の机はLL式で、各ブースはフルラボ（TVを除く）式の設備がなされている。教室後部にリモコン式フィルム・スライドプロジェクターが、教室前部に黒板、その前にスクリーンが自由に上下可能であり、真中の教師の机に向って左側にLL用のコンソールとプロジェクターのリモコン装置が設置されている。壁にはポスターや英語で書

かれた標語等が所せましと貼られている。

指導法に関しては大部分の学校が、国の推奨する1つの方法にしたがっているということであり、先の Ms. Kuzmicheva は次のようにのべている。

“入門期として定められた期間は普通教育学校で6週間、特別英語学校で2ヶ月半であり、この間は、いわゆる Oral Method で行い、本の使用や知識としての文法指導は避け、もっぱら実物や絵、それにテープ使用により、口頭で身近かな物の名前や簡単な文型（例えば This is……. That is…….）などを覚えさせる方法をとる。教材には簡単な詩を多く取り入れるなど工夫している。

入門期が終ると本を使用しながら、次第に文法事項を扱うようになるが、視聴覚教具をフルに使い、特にテープによる hearing と、教材の徹底的な暗記。そしてそれを基にした Questions and Answers(以下 Q&A) が、ソ連の英語教育の柱となっている。宿題は課するが、高学年になっても新教材の予習は不要である。”

生徒にとって興味のない学習は最低限度に留め、反対に興味や才能のあるものに対しては、それを有効に伸ばすよう効果的な指導法を徹底的に研究し、時には教師がチームを組み、また時には学校が一体となってその指導法を推進する姿勢が非常によくうかがえる。これがソ連の体質であり、ロシア人の国民性に由来するものであろうが、実際にソ連の教師達と接し、教育施設を訪問することにより、日本やヨーロッパでは経験出来ない何か特異な気迫がひしひしと感じられたものであった。

III

日本の英語教育の成果については、各方面からさまざまな意見が出されている。大学を出ても英語が使えない、という財界の意見をはじめとして、特に話す能力の欠けていることが指摘されている。渡部昇一氏と平泉渉氏との「英語教育大論争」も、話せない英語教育に対する外部からのいらだちがその発端であろう。これらの意見は、私のように英語を教える立場にある人間にとって、一方では、非常に痛いところをついた意見として拝聴すべきことであると思うが、一方では、日本という環境の下での英語教育がいかなるものかをよく知らない人達の勝手な意見であるとも考えてい

る。というのは、日本の学校における英語教育は、財界や商社のために、あるいは、観光旅行のためにのみあるのではないからである。

英語を専攻しても、英語を生かす職種の少ない日本の社会、そして、大部分の日本人にとって英語を実際に使用する機会のほとんどない日常生活等を考えると、中学・高校の段階において、主として日常会話のような英語を学習させることは、さらに進んだ読み書きの能力養成という点から考慮して、無駄なことであると思われる。しかしまた、「英文を正確に読むという知的訓練にこそ意義がある」と唱える渡部昇一氏の意見も、それだけでは口頭発表への応用が不可能ではないにしても、きわめて困難であることは否定できない。それでは、日本の中学・高校における英語教育の目標はどこにおけばよいのであろうか。

文部省指導要領・外国語編の「目標」のうち、技術面を要約すると、中学校においては、「初歩的な英語を用いて、聞き話し読み書くの4技能の学習を行う」、と述べられている。高校においては、その3年間を通じて、それら「4つの基礎的な能力を養うとともに、英語を理解し、(積極的に)表現しようとする態度を育てる」ことを基調とし、さらに高校2・3年においては、「(1)聞き話す基礎的能力、(2)読む基礎的能力、(3)書く基礎的能力、に分けて、それらを選択履習させ、それぞれの能力を一層伸ばすよう積極的態度を育てる」ことが望ましいと述べられている。この目標を見る限り、中学・高校の6年間に一貫して強調されているのは hearing (以下H), speaking (S), reading (R), writing (W) のバランスのとれた基礎的能力の養成であり、さほどの困難を伴わずに、oral communication と written communication が可能な域にまで到達させることであると解釈してよいであろう。しかも、文法的基礎が一応終了した高校2年からは、生徒各自の興味にしたがって、それぞれ得意とする技能の養成を選択学習させるなど、細かい配慮が表れている。

今日の日本の社会においては、外国人と接して英語を駆使する必要のある人間の数よりは、仕事のため、教養のために専門書や教養書を読み、かつ、書く人間の方が、はるかに多いことは事実である。したがって、基礎とは、その上に建てるものの使用目的により、その範囲や強度が決められるものであるから、英語学習の場合、特に将来H・Sを必要としない、あるいは、望まない学習者に対してH・Sを基礎的学習の中にも含めることは

どうであろうかという疑問が当然起るであろう。しかし、次の節でのべるように日本の英語教育において、H・Sを軽視することは、学習の非効率化を招くものであるということが出来る。したがって、文部省が、4技能のいずれかに偏ることなく、それらを平均的に伸ばすことを英語学習の基礎と定めたことは、言語学習の本質と、日本の学習環境を考慮した適切なガイドラインであるということが出来る。

母国語学習からも明らかのように、外国語の学習も音声面、すなわちH・Sという聴覚的方法から始めるのが合理的であるというのが一般論であり、単なるコミュニケーションとしての英語学習であれば、少々乱暴な言い方ではあるが、聴覚的方法のみで可能である。しかし、日本の英語教育を考える場合には、日本の学習環境と学習者のニーズとが十分に考慮されねばならないであろう。それまで書物による勉強に馴れて来た日本の中学生にとっては、瞬時に消滅する音声面のみの学習は、かなり不安感を抱かせるものである。その不安感の解消のため聴覚的学習を、RおよびW、すなわち視覚的学習により確認し、強化する作業は欠かせないものであろうし、文字を媒体とした学習の方が、はるかに受け入れ易いのである。日本の学習者の大多数が最終目標とするのは、読み書く力の向上であることを考慮するならば、視覚的方法も比較的早期から採用することが重要である。

英語学習の基礎的能力というのは、文科・理科をはじめとするさまざまな学問分野から、翻訳・通訳あるいは単なる教養や実用会話等に至るまで、将来いかなる道に進むとしても、その道の能力を養成するに足る基盤を築くことである。例えば、R・Wをその最終目標とする学習者であっても、基礎的能力養成段階において、重要な文法事項や主要な文構造等を、くり返し口頭作業によって蓄積し、応用する訓練ができていれば、それは、後のR・Wの能力養成の段階で能率的に作用するものである。また逆に、H・Sを目標とするものであっても、R・Wの基礎的文法の力がついていればあとはH・Sの訓練をすることにより、より正確なH・Sの能力を能率的に養成していくことが出来る。要するに、両者は相補的に英語学習の基礎を築く重要な技能であり、この4技能がバランスよく学習されて、はじめて英語学習の堅固な基礎が形成されるのである。

英語の基礎的能力養成段階とは、基本的言語材料の扱われている中学1

年から高校1年までを指してよいと思う。先にも述べたように、日本の教育現場では、学習者の安心感と受け入れ易さが1つの原因となり、どうしてもR・Wに偏りがちであるが、バランスのとれた4技能の養成の必要性を考える時、この間はH・Sの訓練、すなわち、基本的な言語材料の口頭練習に、より多くの時間を費やし、英語の運用能力の習熟を目指すことが、今後の大きな課題であるといえよう。ここに述べた口頭練習とは、いわゆる日常会話の練習とは全く異なるものであって、それはH. E. Palmerがその特性を明確に規定したConventional Conversationを基本とする練習であると考えてるのが適切である。

IV

日本の英語学習のうち、HおよびSの養成を阻む1つの原因として、しばしば大学入試があげられる。実際、それも1つの原因であることは確かであろうが、それでは、中学・高校の教師達は、入試を改善しさえすれば、H・Sの能力が向上するよう指導できるだろうか。私には、そうは思えないのである。結論から言えば、中学・高校の教師達の英語力の不足と指導力の不足が、大きく影響を及ぼしているように思われる。

現在、英語のクラスの中で、どの程度の口頭練習が行われているかについての実態は明確ではない。が、中学の入門期からしばらくの間は、口頭で行っている学校の数は増加しつつあることは確かである。これは教師の英語力が、次第に向上してきたことを示すものであろうが、まだまだ不十分である。昭和57年4月19日の朝日新聞は、関東7都県の中学2年から高校1年までの約960名を対象に、中学での英語の授業に対するアンケート調査を行った(英語不得意者同盟による)。そのうち「英語が話せるようになるといいな。」と思う生徒が87%にものぼったという。生徒の側にこれだけのreadinessがあるにもかかわらず、それをうまく利用できずに4技能のバランスがくずれてしまうのは何故だろうか。私は、日本の英語学習のバランスを失わせるものが何であるかを、ソ連の英語教育見学中に見出すことができたように思うのである。

H・Sの面で、ソ連の英語教育を成功に導く特色は数多くあげることができる。例えば、学習開始年齢が低いこと、時間数が多いこと、1クラスの生徒数が少ないこと、教育機器の設備が充実していること、等々であ

る。しかし、私の考えによれば、それらは英語教育を成功させる絶対的条件とはなり得ないものである。何故ならば、それらはすべて「適切な指導法」を伴って、はじめて効果を発揮し得るものだからである。

では、ソ連の英語教育、特に聞き話す能力の養成に非常な成果をあげているその原動力は何であろうか。それは

A. 授業中の豊富な口頭作業

B. 教師のすぐれた英語駆使能力と指導力

である、ということが出来る。以下、私が、レニングラードで参観した英語のクラスを基に、上の2つの特色について述べてみたい。

A. 授業中の豊富な口頭作業

(i) 徹底的暗記

Ms. Kuzmicheva によれば、ソ連では指導法に関しては、国が推奨する1つの method があり、普通教育学校であると特別英語学校であるとを問わず、その method が一般的に実施されている、ということであった。中でも出来るだけ多くの学習材料を徹底的に暗記させることが、その特徴であることを特に強調されていた。そのことばの通り、教室での暗記の指導はきびしいものであった。教材は歴史で Review の部分は、レーニンの少年時代から革命に至るまでの彼をとりまくさまざまな内容を盛り込んだかなりの長文であった。宿題として課した部分であったため、すぐに数名の生徒が次々と指名されたが、途中でつまずくと教師は助けるが、暗記が完全にできるまで行わせるという徹底ぶりであった。

(ii) Questions and Answers

暗記のあとは、その内容やその他のことについての英問英答が執拗に行われる。内容に関する質問が次々と出され、生徒の反応も活発にすすめられていく。ここでの特徴は、内容理解のみに留まらず、何をどう思うか、のように、答となる文をできるだけ生徒自身に構成させる方向に指導していたこと、そして同時に、文法的誤りや発音・イントネーションにも1つ1つ即時訂正を与えていたことである。

(iii) 口頭英作文の重視

ソ連の生徒達にとって新教材の予習は不必要であり、すべてがゼロから始められる。新教材の提示は教師のリモートコントロールによる

フィルムプロジェクターの映写によりすすめられた。一連の絵の横にはロシア語の説明が付され、それを英語で言わせる方法がとられていた。その中で新語、新文型を教え、発音、イントネーションまでが扱われるのである。プロジェクターを使用する授業であるため、スクリーン以外は見えないことと、次々と指名されることとで、生徒は高度の緊張と注意集中力を要求され、また、教師の側にもかなりの量の口頭作業が強えられる。

(vi) Pupil-pupil dialogues とその応用

新教材導入後のLL学習で、教師は教室内のコンソールを通して指導に当る。約10分の練習のあと、2名ずつ組ませて、これまでの学習内容について、discussionをさせる。この段階で、生徒の時間の使い方無駄が無かったかどうかをチェックするため、2～3組の生徒を前に出してdemonstrationをさせ、教師はそれを聞きながら、内容や英文のチェックをしたりdiscussionのすすめ方や会話の技術まで指導する。

B. 教師のすぐれた英語駆使能力と指導力

ソ連の教師のすぐれた点として先づ第一にあげられるものは、何と云っても堪能な英語力といえることができる。その英語は、いわゆる日常会話の技術ではなく、英語教師として、クラスでのいかなる種類の口頭作業をも停滞することなく指導できる程の実力である。

教授法に関しては、定められた方法にしたがっているということであるが、その中に各種の教授法の長所がうまく取り入れられ、しかもそれらを何の抵抗もなくスムーズに駆使できるということは、教師自身が各教授法を十分に研究し尽くしていることの証拠である。例えば、2人の生徒を前に出してレーニンの生涯についてディスカッションをさせていた時のこと、たまたま一人の生徒の発言が長々と続いたため、相手の生徒は、ただ聞いているだけであったが、その時教師はすかさず、「そんなに長く話させては議論にならないから、途中で上手に口をはさみ自分の意見を言うように」と、相手の話の途中への入り方を指導していた。これはCommunicative Approachにもとづいて書かれたテキストの中にも含まれているものであって、これによりNotional-Functional Approachも、ソ連ではすでに十分研究され、授業での活

用の段階に至っていることを物語っている。

学習理論の研究の度合いも、質問の仕方や指名のしかたを観察しているとよく判るし、視聴覚教具の使用に関しても、単にあるから使うというのではなく、意味ある使用の仕方を十分わきまえた上での利用であった。

最後に、授業のきびしさも印象深いものであった。私は、ロンドン滞在中に、ロンドン周辺の comprehensive school や private school を数校、訪問する機会を得ることができた。それは、日本の英語教育と類似の学習環境にあるイギリスの modern languages の教授法を見学したかったためである。が、そこに共通してみられたものは、楽しみながら学習をすすめていこうとする教師達の配慮であって、机こそきちんと並んでいるが、教師も生徒も非常に自由で、余裕のある雰囲気であった。その理由として、ある教師は次のように話してくれた。

1. 今や英語は世界語となり、イギリス人にとって外国語ができなくても不自由しないこと
2. イギリスの中学生にとって、かなりフランスやドイツとの交流があること（例えば、夏休みなどを利用して数週間の語学研修やホームステイが可能である）
3. 英語と、フランス語・ドイツ語の関係が、英語と日本語ほどの相違がないために、比較的簡単に話せるようになること

外国語教育に対しては、教師自身がこのように気楽な考えであるために、本当に真剣な態度がみられたのは、僅かに A level examination（大学進学のための試験）の受験生のクラス位のものであった。

これに反し、ソ連のクラスでは、授業の最初から最後まで生徒が真剣に学習していたことに、私達訪問者は驚異の眼を見はったものであった。生徒側にみられるこの真剣さは、ソ連の社会的、教育的事情を調べていくにつれ、必ずしも生徒自身の自律的学習意欲から生じたものではなく、多分に他律的な学習意欲によるものであることが次第に明らかになって来る。その点、日本やヨーロッパの教師達にとっては疑問ではあるが、自律的にせよ他律的にせよ、生徒の抱く学習意欲を最後まで保持させることができるのは、教師のすぐれた指導技術の 1

つといてよいであろう。例えば、新教材の理解のあとのLL作業において、教師の熱心な monitoring やその後の pupil-pupil dialogues のチェックの仕方などは、どうしても真剣にやらざるを得ないように生徒を仕向けているようである。

全体として教室内での雰囲気は、教師が生徒の能力に合わせて授業を展開するというよりはむしろ、教師が中心となって生徒をぐんぐん引っ張っていく意気込みに溢れたものであった。

以上、ソ連における英語教授法の長所と、教師のすぐれた資質について述べたものである。そして、日本の中学・高校の英語教育においてH・Sの能力養成を阻むものは、大学入試ではなく、実に、教室における上述の2つの要素の不足にある、と私は考えるのである。

V

日本の中学における英語の授業では、宿題として学習事項の暗記が課され、授業の最初に行う Review の際に、暗記のチェックやその内容についての Q & A を扱う教師が多いと思われる。暗記、すなわち、学習事項の脳への蓄積は、それを転移させ応用へと導く言語学習上もっとも重要な作業の1つではあるが、われわれ日本人が最も不得手とし、かつ、教室以外では練習の機会を十分得られないH・Sの養成をも含めて、4技能を平均的に学習させるためには、暗記の段階に留まらず、ソ連のクラスで見られたように、それに基づいた広範な Q & A の訓練が必要なのである。したがって、中学の教師は、暗記や各種の Q & A を自由に行い、生徒達の話したいという希望を十分に叶えられる程度の英語力を、そして、高校の教師は、生徒の多様な発話にも難なくその誤りを即時訂正しつつ、授業をすすめられる程度の英語駆使能力を備えることを、最低の条件としなければならない。

教師の英語駆使能力をいかに向上させるかは、非常に大きな問題であるが、次の2つの方法が考えられる。

- (1) 現在、教職にある者の再訓練
- (2) 教員養成大学のシステムやカリキュラムの改善

このうち(1)に関しては、国や都道府県において、不十分ながら種々の研修の機会は図られていると思うので、ここでは触れないことにする。また、

(2)の教員養成大学以外の一般大学や短期大学の教員免許状取得希望者に言及することは、問題が余りにも大きくなりすぎるので、今回は扱わないこととする。

日本の英語教員養成を考える場合、ソ連の教育大学のカリキュラムは非常に参考になると思われる。1977年4月より15回にわたって英語教育誌上に掲載された、黒川泰男氏の「ソ連英語科教育」は、ソ連の教育大学のカリキュラムおよび学習内容を、克明に調査研究されたものであるが、それによると大学5年間のカリキュラムは普通教育学校で学習したことの大部分が、新しい教材で繰り返されていて、ことば（英語）の教育が最後まで貫かれているようである（1978・2）。教育大学で使用されるテキストに扱われている内容も、微に入り細に亘るものであり、練習問題の量も、日本では考えられない程膨大であるという。以下、黒川氏が記載された、ソ連の10年制普通教育学校の英語教員としての資格を取得するための必修教科をそのまま紹介させていただくと次の通りである（括弧内は時間数を示す）。

Introduction to linguistics (80), Latin (60), Methods of teaching foreign language(120), Phonetics of foreign language(438), Grammar of foreign language(578), Practice training in spoken foreign language (854), Analysis of texts and written practice(476), Translation(70), Lexicology (64), History of language(72), Literature in the foreign language studied(96), Second foreign language(800), Recent history of countries of language studied (36), Special training (48), Practical training in audiovisual techniques (76), Teaching practice (16 weeks)

「英語教育」1977年4月号 p. 81

英語の specialist 養成がその第一の目標であるため、必修科目には practical な英語力養成の科目が多いが、文学や教授法などもロシア語による講義ではなく、英語による連続的問題解決形式で、膨大な量をこなすことにより、英語ということばの理解と運用へと導く方法がとられているようである。黒川氏はさらに「…ソ連の大学用英語教科書は、その課業量が執拗きわまりないものであるが、その苦勞に耐えさえすれば一定の学力が保障されるように作られている」と述べている。

このようなソ連の教育大学の方法が最良であるかどうかについては、さまざまな意見があることと思われるが、とにかく、ソ連の英語教師の英語駆使能力は、実にこのような道を通って得られた賜であり、普通教育学校や特別英語学校の教壇に立つ前に、英語のクラスでの口頭作業が、自由に行える程度の実力がつけられているのである。

一方、日本の教員養成大学においては、4年間で英語そのものの all round な訓練に当てる時間は比較的少なく、主として英文学・英語学を研究するかたわら practical な英語を学ぶというやり方をとっている点、ソ連とは大いに異なるところである。教員免許法に規定された日本の中学・高校の英語教員免許状取得のための必修単位数は次の表のようにになっている。なお、上の数字は単位数を示し、括弧内は、単位数を、教室内および教室外の学習時間数に換算したものである。

専 門 科 目

免許状の種類	英語学	英文学	英 会 話 文 学	大学により追加されたその他の関連科目	合 計
中学校 1 級 普通免許状	6 (270)	6 (270)	4 (180)	16 (720)	32 (1440)
高等学校 2 級 普通免許状	6 (270)	6 (270)	4 (180)	16 (720)	32 (1440)

教 職 科 目

免許状の種類	教育原理	教育心理 青年心理	英語科 教育法	道徳教育 の 研 究	教育 実 習	大学により追加されたその他の関連科目	合 計
中学校 1 級 普通免許状	3 (135)	3 (135)	3 (135)	2 (90)	2 (90)	1 (45)	14 (550)
高等学校 2 級 普通免許状	3 (135)	3 (135)	3 (135)		2 (90)	3 (135)	14 (550)

以上のように、英語そのものの習得に当てる時間数を単純に比較しただけでも大きな相違がみられるのである。しかも日本では、担当者によっても異なるが、理論よりは実際の訓練が必要である科目においても、しばしば、日本語による理論の講義で終ることがあり、また、英作文にしても和文英訳が多く採用される傾向がみられ、いわゆる口頭英作文、自由英作文

を常時実施している大学はいくつあるだろうか。一部の大学を除いては、どの科目をみても、口頭による *practice* が行われていないのが現状である。そして教員養成大学の大部分の卒業生がH・Sの能力がつかないまま、教壇に立つことになり、中学・高校においては、どうしても訳読中心の授業にならざるを得ない仕組みになっているのである。

日本とソ連とでは国情が異なり、したがって、教育に対する姿勢も、国民性も異なるのは当然のことである。教授であれ、学習であれ、1つの目標を定め(られ)たら、わき目もふらず一致団結して目標に到達すべく努力することの出来るソ連の国民性が作り上げたものは、指導法に個性が重んじられ、一致協力やチームティーチングの余りうまくいかない日本の教育には、そのまま当てはまる筈はないし、日本には日本独自の教育方針が有ってよい筈である。

1978年7月、朝日新聞の連載記事「アメリカ人のソ連観」で、ハリソン・ソールズベリー氏の「ロシア人は自由を知らないし、そんなものは、もともとロシアの伝統に存在しないし、一部のロシア人のインテリが求める自由は、決してあの国にルーツを持つものではない。」ということばは、そのままロシアの教育にも適合するものであった。例えば、テキストや視聴覚機器などが充分設備された中で、それらをフルに使いこなせる実力をもった教師と、自律的であれ、他律的であれ、意欲的な生徒達とが一体となって、英語教育、英語学習に没頭する姿は、やはりソ連ならではの悲愴感のようなものがただよっていたことはたしかである。

したがって、私は、英語に堪能な教師の育成を望むあまり、日本の教員養成大学・英語科も、ソ連の如く、その大部分を *practical* な英語教育に徹するべきであるとは考えていない。それどころか、日本では、円満な人間形成のために、多様な一般教養科目の履習を必要としており、また、学生個人の興味にしたがって、文学・言語学・心理学等々の学問の研究にすすむことも重要であるとみなしている。しかしながら、将来英語の教師となるための準備としては、高校の授業においても、各種の口頭作業が苦勞なく出来る程度を目標に、教員養成大学での1時期を、徹底的な英語習得に当てるべきであるというのが私の考えである。教員養成大学の学生が、教壇に立つ前に真の英語力を身につけるために、抜本的な改革の手を加えると同時に、教員養成大学としての特殊性をうちだすべき時がきていると

考えるのである。そこで次に、私の持ついくつかの改善案よりその1つを述べてみたい。

日本とソ連の教育大学におけるカリキュラムの比較からもわかるように、日本の英語教師の英語力の不足は、practicalな英語を習得する科目や時間数が非常に少ないことが大きな原因であることは明らかである。したがって、この点から改善の手を加える必要があると思われる。そのためには、逆に英語そのものの習得を目標とする科目や時間数を大幅に増加し、それらを大学入学当初の1年間に集中的に実施することにより、1年の終りには高校英語のH・Sの指導が十分可能な域にまで、英語力を向上させることを条件としたい。科目は必ずしも口頭練習の手法によるものばかりでなく、日本人学生には精読による読解力の養成や、速読の訓練も、必要不可欠のものであろう。書くことに関しては、和文英訳はもちろん悪いことではないが、最終的には日本語の助けを借りずに、内容も英文も、学習者自身の構成になる英作文を目標とし、そして、そこに至るまでは、口頭英作文の手法を大いに取り入れるなど工夫すべきである。とにかく第一学年は、文学論、語学論などの理論はpracticalな英語習得に役立つもの以外は扱わず、終始practicalな英語学習に徹することを義務とし、大学側はその習熟度をきびしくチェックして、一定の基準に達しない学生には、容赦なく再履習を課するなどの、大学側、学生側の両者に真のきびしさがほしいものである。2年以降はpracticalな語学学習を漸次減少させ、教科教育法を含む教育学や心理学をはじめ、各学生の希望する研究へと進めるようカリキュラムを改善していくよう提案するものである。

以上のように、中学・高校の教師として必要な英語力を早期に集中的に獲得することは、学生自身にとっても、その後の原書講読や英語による講義の聴きとりやdiscussion、さらには英文のレポートや論文作成にも抵抗なく取り組むことを可能にするものであり、その後の学生の英語力はさらに加速度的に進歩するものと思われる。第一学年にpracticalな英語学習を設置している大学は、国際基督教大学にその例がみられ、成果をあげているが、ほとんどの教員養成大学においては未だ実現されていない。

教員養成大学においても現在の英語教育を憂い、その改善方法を模索する教官達は数多く、上に示した私の提案と同様の意見も、すでに大分前から出されてきたかも知れない。しかしながら、それが実現されないのは何

故であろうか。少なくとも3つの理由があげられよう。

- (1) 大学教官の中にも practical な英語学習を軽蔑する教官がいまだに存在すること

これは、現在の教員養成がほとんど英文学科の傘の下で行われていることに原因があると考えられる。純粋な英文学研究にはH・Sは不必要であるのかも知れない。しかし、それでは教職科目を何単位履習しても、中学・高校の英語教師としては不適當である。英語教育は英文学が不必要であるというのではないが、英文学研究と英語教育研究とは全く別のものである。しかも、後者は、他の学問に比べて学際的度合いが大きいことは事実であるが、1つの学問として成立するだけの内容を十分そなえているので、英文科から独立させ、英語教育を十分研究した人達を中心にカリキュラムを改善していく努力が必要である。そして、独立しない限り H・S・R・W の効果的学習のためのカリキュラムは組めないであろう。

また、文学出身であれ、語学出身であれ、現在英語教育に携わる教官達は practical な英語学習は日常会話の訓練ではないということを認識してほしいものである。

- (2) 教官自身に学生を指導できるだけの英語力がないこと

教官自身の英語力の不足は、現在のところ致し方ないが、若い教官などの自己研修を兼ねて担当させ、practical な力をつけさせるのも1つの方法である。また私は、LLなどの教育機器を安易に使用することは好ましいとは思わないが、うまく利用できれば教官自身の英語力の不足をある程度カバーできると考えている。

- (3) 教官数の大幅な増加に伴い費用がかかること

これまで、かなりの改革案のために、多額の費用がかけられて来たが、そのほとんどが小手先のものであったため、効果がみられないところに外部からのいらだちが集中しているというのが、英語教育の現状である。よりよい結果を得ようとするには根本的な問題にメスを入れることが、何よりも解決の早道であり、枝葉末節の事柄にふり廻されることなく、日本の現状と英語教育のおかれている立場や社会的要求などを正しく見きわめなければならない。教員養成大学のカリキュラムを変えるだけでもさらに多額の費用を要するものである。従来より行われて来た多くの無駄を早急に整理すると同時に、慎重審議の結果提出された改善案に対して費用を惜しむ

ことは却ってマイナスである。教育に関心を寄せるならば、次代の指導者となるべき人達の教育のために、多額の出費は覚悟せねばならないであろう。

現在の教員養成大学のカリキュラム改善について、その大筋を考えて来たのであるが、若しこれまで述べて来たように改善されるならば、毎年僅かずつではあるが、中学・高校の教室の中で口頭練習をうまく指導することのできる教師が増えていくことになるであろう。数ある教授法の中からいずれを採用するか、また、どの部分を自分の授業に取り入れるかは、教師個人の研究に委ねるべきであるが、教師自身英語を駆使する能力を持っていれば、Oral Method の Introduction of the New Material の段階もそれほど負担にならないであろうし、やり方によっては真に生徒の興味をひくものとなろう。また、Oral Approach をとるならば、Twaddell のいう言語学習の5段階の最後のものである Selection をも難なくこなし、英語学習を単なる mindless pattern practice に終らせることはないであろう。さらに、1970年以来次第に広まって来た Communicative Approach の手法も随時授業に活用することができると思われる。要するに、教師がいかなる教授法を構成するにしても、教師の英語力が豊かであればあるほど、授業中の言語活動は多くなり、授業を活発にし、生徒の抱いている「話したい」という希望を少しでも満足させる方向にもっていくことは確実であり、H・Sの学習を促進させることになろうと思われる。それにより、R・Wのみに偏しない4技能のバランスのとれた基礎英語力を身につけた生徒の数も次第に増加していくであろう。しかし、これは非常に時間のかかる問題である。英語教育に直接携わる人間はもちろんのこと、一般の人々にも満足のいくような英語教育が実現するには、恐らくこの先何年何十年かを費やすのではないだろうか。

1983年10月、中央教育審議会は、教員養成制度の改正を発表した。それによると、教員免許状を細分化し、大学院修士課程を修了した学生に、特修という免許を与え、高校の教師として配属させる方針であるらしい。しかし、高校の英語教師に関しては、現行の英文学や英語学の大学院に、教職科目や口頭英語の時間が果してどれだけ設けられるのであろうか。とにかく、基本的には英語の4技能に堪能であることをきびしく義務づけてほしいものである。従来通りの大学院のカリキュラムで、申し訳け程度の教

職科目を履習しただけでは、高校生に4技能のバランスのとれた語学力をつけることは望むべくもない。こと、英語教師に関する限り、特修を設けても英語教育全体の問題が解決するとは思われない。

VI

ソ連で見聞した英語教育を基に、日本の英語教育を考え、改善のための1つの提案を行った。差し当り、教員養成大学についてのみ言及したが、やがてこれが一般大学の英語教員免許状取得希望者にも波及することを願っている。

私は、ソ連の英語教育を100パーセント認めているわけではない。何故なら、日本には日本の事情があり、日本の英語教育の観点に立つと、ソ連のそれはいくつかの欠点をもっているからである。例えば、教室での指導法をみる限り、RとWの指導が、おろそかにされているきらいがあるのもその1つである。しかしながら、非常に長くなってしまったが、ソ連の教室英語をやや詳しく述べたのは、基本的に重要である口頭練習の中に、日本の授業で参考のできる面が数多く見られたからである。今後の英語教育はH・Sの面をさらに重要視し、英語学習の基礎的段階にある学習者に、文字通りH・S・R・Wの4技能のバランスのとれた英語力をつけさせることに反対する者はいないであろう。

これまで、海外から数多くの教授法が紹介されて来た。最近ではCommunicative Approachがかなり研究されているようであるが、私は、H・Sの能力養成と称して、英語学習の基礎的能力養成段階において、会話の訓練をすることには不賛成である。何故ならば、日常的場面、例えそれが、教室の中で人工的に創られた場面であっても、そこでのコミュニケーションには余りにも多くの文法的要素が一度に入り込み、学習者はそれを処理しきれずに混乱するばかりだからである。しかも教室外では同様の場面に遭遇しても、英語を使用する必要のない社会では忘却も著しい。日本においては、文法事項の学習は1時間に1項目から数項目を目途に、段階的に配列し、それらについて、定着と応用を目標とした十分な口頭練習を含む学習指導を行う方が、すでに論理的思考が可能な年齢にある日本の中学・高校生には能率的な方法であると考えられる。したがって余談ではあるが、永住のため、あるいは仕事のために英語使用国にやって来た、ある程度基礎

の出来た英語学習者のために開発された教授法などは、その理論的根拠はうなづけるが、そのままの形で日本の英語教育に適用しようとする自体、無理というものである。

また、accuracy より fluency ということもよく言われている。たしかに native speakers にとっては当然の要求かも知れない。English speaking society で生活していれば、例え間違った英語を話しても、英語以外の要素がその間違いを理解可能にしてくれるため、コミュニケーションにはさほどの支障をきたさず、スムーズに会話が流れていくことはしばしばある。又、間違いをしても、自分の話し相手からばかりでなくその雰囲気からも knowledge of result や immediate correction, reinforcement のような学習を促進する心理的要素が常に得られるため、間違いはそれほど深刻な問題とはなり得ないし、間違ふことによって、より早く正しい英語が身につくという利点もあるわけである。しかし、そのような心理的要素が存在しない日本の社会ではどうであろうか。英語のクラスで、生徒の誤りに厳格すぎることは避けねばならないし、生徒が誤りを気にせず話すように仕向けることは、教師にとって大切な技術であるが、やはり正しい英語を1つ1つ覚えさせていく方が、日本の中学・高校での学習者には、後の転移、応用のためにも効率的な方法である。また、たとえ英語使用国に留学するにしても、そこで仕事をするにしても必要なのは、本や文書を読み、レポートを書き、討論する場合の英語であって、やはり正しさを要求される。したがって、間違いはあっても普通の速さでコミュニケーションができればよいという教授法は、日本には不適當であると言えよう。正確さを目標とした英語学習により到達した英語力が、日常生活のコミュニケーションに支障をきたすことは先づないであろう。それに、有能な教師であればH・Sの能力養成の中で、会話の技術を適宜織りませた指導が可能である。実社会では余り接することのない英語を、授業中だけでもふんだんに聞かせ、言わせるように仕向けて、英語学習の雰囲気をうまく作り出すことができるのも、最低限、堪能な英語力を身につけ、それに加えて十分な教授法研究を行った教師にだけ実現可能であるといえるであろう。

日本と同様の学習環境にあるソ連において、否、日本より環境はきびしいかも知れないソ連においてのH・Sの成功は、実に、教師自身の英語力養成に始まることを物語るものであった。日本においては制度の改革より

は中身の改善が重要であり、先づ、教員養成大学から堪能な英語力を身につけた教師を輩出するよう努力することにより、より理想的な英語教育へと近づけていきたいものである。最後に私の参加した研修旅行の日程を紹介し、この稿を終りたい。

1. Midnight : arrival in Moscow by air from London.
2. Morning : visit to the Kremlin.
Afternoon : sight-seeing tour of Moscow.
Evening : tour of the Moscow underground.
3. Morning : The Academy of Pedagogical Sciences.
Afternoon : The Exhibition of Economic Achievement.
Evening : Tchaikovsky Concert Hall : The Ukrainian and Dance Company.
4. Morning : visit to the Specialized English Secondary School No. 4.
Afternoon : visit to the Central Pioneer Palace.
Evening : departure for Leningrad by train.
5. Morning : arrival in Leningrad - sight-seeing tour of the city.
Afternoon : visit to the Hermitage Museum.
Evening : Maly Theatre : works by Rakhmaninov and Shostakovich.
6. Morning : visit to the Specialized English Secondary School No. 61.
Afternoon : meeting with teachers in the House of Friendship.
Evening : Reception for the Soviet hosts in Hotel Moskva.
7. Morning : The University of Leningrad : session with the Pro-rector, Professor Zelenev.
Afternoon : conducted tour of the Fortress of Peter and Paul.
Evening : Kirov Theatre : The Barber of Seville by Rossini.
8. Morning : free for shopping.
Afternoon : departure for London.

Nichiren's "Opening the Eyes"

Translated by Kyotsu Hori

There are three people whom everyone should respect. They are the lord, teacher, and parents. There are three categories of learning which everyone should study. They are Confucianism,¹ Buddhism, and heretic schools in India.²

The Three Emperors,³ Five Rulers,⁴ and Three Kings⁵ are called the Honorables Under Heaven in Confucianism as they are regarded to be the head and bridge⁶ of the people. Prior to the time of the Three Emperors, people did not know who their fathers were and acted in the same way as birds and beasts. However, since the time of the Five Rulers they knew their parents and acted dutifully toward them. King Shun, for instance, treated his stubborn and ignorant father respectfully;⁷ the Duke of P'ei, having ascended to the throne, continued to revere his father, the Grand Duke;⁸ King Wu had a wooden statue made of his late father, the Chief of the West;⁹ and Ting-lan had an image of his mother carved.¹⁰ These are examples of filial piety.

Foreseeing the downfall of the Yin dynasty, Pi-kan¹¹ dared to remonstrate against his sovereign and was beheaded. A man named Hung-yen died when he cut open his own stomach in order to insert the liver of his slain lord, the Duke of I (Yee).¹² These are examples of loyalty.

I-shou was the teacher of King Yao; Wu-shih was that of King Shun; T'ai-kung-wang was of King Wen;¹³ and Lao-tzu, of Confucius. These were the so-called Four Sages, in front of whom even

the Honorables Under Heaven bowed and all the people held their hands together in veneration.

These sages wrote some 3,000 rolls of books including the *Records of Three Emperors*, *Records of Five Rulers*, and *Three Histories*,¹⁴ but what they expounded were nothing but the Three Mysteries. The Three Mysteries mean, first of all, the "Mystery of Being" expounded by the Duke of Chou; in the second place the "Mystery of Non-being" by Lao-tzu; and finally the "Mystery of Being and Non-being" by Chuang-tzu. Mystery means darkness. Looking into our past before our parents were born, they said that life stemmed from the original spirit, and that one's position in society, happiness and sorrow, right and wrong, and gains and losses were all natural.

Although they established such beautiful theories as these, they knew nothing of the life in the past or in the future. Mystery means darkness and subtlety. Therefore, their teachings were called Mysteries. They seemed to know only the present. They insisted that in this world we had to protect ourselves and pacify our country by establishing benevolence and righteousness; otherwise we would bring ruin to our clans and families.

These wise and holy men might have been sages, but they were ignorant of the past just as unenlightened men could not see their back. They could not see the future just as blind men could not see in front. Having simply managed their houses, performed filial acts and practiced the Five Virtues¹⁵ in this world, they came to be revered by their fellow men, and their fame spread so widely in the land that wise kings invited them to be their ministers, relied on them as their teachers, or even bestowed the throne upon them. Even the Heaven came to defend and assist them. Examples of this: the so-called Five Elders¹⁶ who served King Wu of Chou, and the twenty-eight constellations which became Twenty-Eight Generals of Emperor Kuang-wu of the Later Han.

Having been ignorant of the past and future, however, they could

not help the future lives of their parents, lords, and teachers. They did not repay what they had owed; they were not really wise and holy. Therefore, Confucius said, "There never were wise and holy men in China, but there was a man called Buddha in the land to the west. He was a sage." He thus regarded Confucian writings to be the first steps toward Buddhism. It will be easier for one to comprehend the concepts of Discipline, Meditation, and Wisdom¹⁸ if he first learns the Rituals and Music¹⁹ before going into Buddhism. Therefore, Confucius taught royal subjects to respect their sovereigns, children to be filial to their parents, and students to obey their teachers.

Grand Master Miao-lo²⁰ said, "The Dissemination of Buddhism indeed depended on the spread of Rituals and Music followed by the opening of the True Way."²¹ Citing the *Sutra of the Golden Light*,²² T'ien-t'ai said, "All that is good in the world stems from the scripture. Those who truly know the worldly matters know the laws of the Buddha."²³ T'ien-t'ai also stated in his *Great Concentration and Insight*,²⁴ "The Buddha sent three sages to convert the people in China." Citing the *Pure Practicing the Dharma Sutra*, Grand Master Miao-lo said in his commentary on the *Great Concentrations*: "Bodhisattva Moon-Light was called Yen-hui over there; Bodhisattva Pure Light, Confucius; and Bodhisattva Kāshyapa, Lao-tzu. In India China was referred to as over there."²⁵

Next concerning the heretic schools in India, two gods, three-eyed and eight-armed Siva and Vishnu, were considered to be the compassionate parents and supreme lords of all the people. Three masters—Kapila, Ulūka, and Usabha, who lived about 800 years before the time of the Buddha—were called the Three Hermits. The teachings of these Three Hermits, expounded in the *Four Vedas*, were 60,000 words long. Thus, at the time of the Buddha's birth, the Six Heretic Masters, who had studied these heretic scriptures, had become teachers for kings all over in India.²⁶ Their branch schools numbered in the 90's, each of which further split into many sub-branches. Each claimed

to be the highest—higher than the Highest Heaven²⁷—and stuck to its own contention, which was firmer than metals and rocks. Profoundness and exquisiteness of their ideologies could not be simulated by Confucian masters. They could see through two, three, or even seven lives and 80,000 kalpas in the past. They also foresaw 80,000 kalpas in the future. Their innermost theologies maintained, “Effects lie in causes,” “Effects do not lie in causes,” or “Sometimes they do but other times they do not.” These were the secrets of the heretic schools in India.

Among the heretic schools in India, the better ones observed the Five or Ten Disciplines,²⁸ practiced meditation, though illusory, and reached the top of the World of Form and the World of Formlessness.²⁹ They climbed inch by inch like a measuring worm up to the Highest Heaven, which they took for the World of Nirvana. As soon as they reached the Highest Heaven, however, they all plunged into the Three Wretched Worlds³⁰ at the bottom, leaving none in the heaven. Nevertheless, they thought that those who reached the heaven remained there forever.

Because each of these schools stubbornly insisted on what it inherited from its master, they either bathed in the Ganges River three times a day in the midst of winter, pulled out hairs, threw themselves against rocks, roasted themselves in fire, or burned their limbs and head. And some of them stayed naked, claimed that a number of horses sacrificed would bring about happiness, burned grasses and trees, or worshipped every tree. These evil teachings were numerous in number, and their teachers were revered as respectfully as King Shakro³¹ was by heavenly bodies and an emperor by his subjects. Among the 95 heretic schools, whether good or bad, none had ever left the cycle of life and death. Those who followed good teachers fell into Wretched Worlds after two or three lives, while those who followed bad teachers plunged there in the life immediately following the present.

After all, the most important thing for the heretic schools was to prepare the way for Buddhism. Some of them maintained that the Buddha would be born 1,000 years later, while others insisted on 100 years later. The *Great Nirvana Sutra*³² says, "What has been said in all the heretic scriptures in the world are all teachings of the Buddha and are not the teachings of the heretic schools." It is said in the *Lotus Sutra*,³³ "My disciples pretended to have been contaminated with the Three Poisons³⁴ and showed an appearance of having poor ideas as an expedient to save the people."³⁴

In the third place, the Greatly Awakened and World Honored One³⁵ is the great leader of all the people. He is for them the great eyes, bridge, skipper, and fertile rice paddies. The so-called Four Sages of Confucianism and Three Hermits of heretic schools, despite their worthy names, actually were unenlightened men unable to get rid of the Three Illusions.³⁶ Although their names suggest that they were wise people, in reality they were as ignorant as infants, who knew nothing of the principle of cause and effect. How could people cross the sea of life and death aboard their ships? It is impossible to make them the bridge to cross over the winding streets of the Six Worlds.³⁷ Our great teacher had already crossed the life and death of the enlightened, not to speak of those of the ignorant. He had already extinguished the roots of the Fundamental Illusions,³⁸ not to speak of trivial illusions of the unenlightened.

Throughout His life—50 years since obtaining the enlightenment at the age of 30 till His death at the age of 80—this Buddha expounded His holy teaching. Each one of His letter and word represented the truth. There was not a sentence or line that was untrue. Even sages and wise men of heretic schools never uttered false words which did not speak of their minds. How much more so with the words of the Buddha, who had been the man of true words since the time of innumerable kalpas past? Therefore, what He preached during His life of 50 years were greater as a vehicle³⁹ of salvation compared to

the teachings of non-Buddhist schools in China and India. It must have been the true words of a Great Man. What He preached, since His first attainment of Buddhahood till the evening of His death, were all true and genuine.

However, considering 80,000 Buddhist scriptures⁴⁰ expounded by Him for 50 years, we find differences among them, such as those between the Lesser and Greater Vehicles,⁴¹ provisional and ultimate sutras, exoteric and esoteric teachings, gentle and rough words, and genuine and expedient opinions. The *Lotus Sutra* alone represents the true words of the Lord Shākyamuni Buddha. It is the true words of various buddhas who reside everywhere throughout the past, present, and future. The Greatly Awakened and World Honored One stated that various scriptures expounded during the first 40 odd years, though as numerous as sands of the Ganges River, did not reveal the truth, which would definitely be explained in the *Lotus Sutra* during the following eight years. At this moment Many-Treasures Buddha,⁴² emerging from the earth, attested it all to the truth, and various buddhas in replica⁴³ came crowded together and stuck out their long tongues⁴⁴ that reached the Brahma, the Creator in Heaven. What the Buddha meant by this is shinningly clear—brighter than the sun in the blue sky and the full moon at midnight. Look up and put your faith in it. Prostrate yourself before it and think hard about it.

However, there are twenty important matters in this sutra, even the names of which such sects as Kusha (Chü-shê), Jōjitsu (Ch'êng-shih), Ritsu (Lü), Hossō (Fa-hsiang), and Sanron (San-lun) did not know. Two sects of Kegon (Hua-yen) and Shingon (Chen-yen) plagiarized them in making their own fundamental structure. The three-thousand-worlds-in-one-mind concept⁴⁵ is hidden between the lines of the chapter on "The Life Span of the Tathāgata"⁴⁶ in the *Hommon*⁴⁷ section of the *Lotus Sutra*. Although Nāgārjuna and Vasubandha⁴⁸ knew it, they did not expound it. Only our Grand Master T'ien-t'ai did it.

The concepts of three-thousand-worlds-in-one-mind was based on the mutual possession of the Ten Worlds.⁴⁹ The Hossō and Sanron Schools, being ignorant of the Ten Worlds, established the Eight Worlds.⁵⁰ How did they know of mutual possession of the Ten Worlds? Kusha, Jōjitsu, and Ritsu Sects were based on the *Āgama Sūtras*, which enunciated the bottom six worlds, but ignored the remaining four. It ignored the existence of the one and only Buddha in the worlds in ten directions or the existence of a buddha in replica in each world. How could it speak of every living being having the Buddha nature? It did not recognize that man has the Buddha nature. Nevertheless, sects such as Ritsu and Jōjitsu spoke of the existence of buddhas in the worlds in ten directions or of the Buddha nature in man. It must have been that scholars after the death of the Buddha plagiarized the Greater Vehicle concepts to the advantage of their own sects. Among the Chinese and Indian heretic schools, for instance, heretics in India before the time of the Buddha was not too egoistic. Those after the Buddha, however, were the most crooked, in that they, learning from Buddhism and realizing their own shortcomings, cunningly stole Buddhist concepts and utilized them to the advantage of their own schools. They were the so-called Buddhists assisting heretics and heretics stealing Buddhism. The same can be said of Confucian studies in China. Confucian and Taoist scholars before Buddhism was introduced to China were as free and vain as infants. However, since the time of the Later Han dynasty, teachings of the Buddha came to China and gradually spread after the initial controversies. Then there appeared Buddhist monks who returned to secular life due to their violation of the Buddhist commandments, or simply adopted Buddhist teachings into Confucianism and Taoism in response to popular demands.

It is said in the fifth part of the *Great Concentration and Insight* :

Nowadays there are many evil monks who, having abandoned

the Buddhist disciplines, have returned to secular lives and, being afraid of ostracism, have gone back to teaching Taoism. Seeking fame and profits, they boastfully talk about Chuang-tzu and Lao-tzu, utilizing Buddhist concepts in interpreting evil classics, forcibly taking the high for the low, crushing the honorable to mix it with the humble, and leveling them all to be equal.

The *Annotations* elaborates this:

There were some Buddhist monks who destroyed Buddhism. Or men like Wei Yüan-sung⁵¹ abandoned the Buddhist disciplines, secularized themselves, and wrought havoc upon Buddhism while being laymen. They plagiarized Buddhism to bolster evil classics. What was meant by "Forcibly taking the high for the low..." is that they, with the heart of Taoist masters, equated the two systems of teachings, the right and the wrong. There was no justifiable reason for doing so. Having been in Buddhist ministry, they plagiarized the right teachings to back up the false ones, and forcibly attached the 80,000 holy teachings in twelve series⁵² to the base teachings of 5,000 words in two rolls⁵³ in order to expound their false and base classic. This is what was meant by "crushing the honorable to mix it with the humble."

We should understand these interpretations, which are essentially the same as what have been said above.

The same thing happened to Buddhism. Coming to China in the Yung-p'ing era⁵⁴ of the Later Han period, Buddhism defeated the false classics and established itself. Three southern and seven northern schools developed within Buddhism itself competing with each other for supremacy as though orchid and chrysanthemum flowers bloomed at once. They were all defeated, however, by Grand Master T'ien-t'ai during the time of Ch'en and Sui dynasties, and Buddhism was revived as the savior of all living beings. Afterward, Fu-hsiang (Hossō) and Chen-yen (Shingon) sects were transmitted from India, and Hua-yen

(Kegon) school also sprang up. These sects, especially Fa-hsiang, were against T'ien-t'ai, opposing each other like water and fire. However, Venerable Hsuan-tsang⁵⁵ and Grand Master Tzu-en⁵⁶ seemed to have surrendered to T'ien-t'ai in heart as they read his interpretations carefully—although they did not abandon their own sects lest their own false theology should fall apart.

The Hua-yen and Chen-yen sects were originally expediential. Grand Venerables Shubbhākarasimha and Vajrabodhi plagiarized T'ien-t'ai's concept of three-thousand-worlds-in-one-mind, which they made the basis of their own sects. They added to it the symbolic finger signs and True Words to make themselves appear superior than others. Those scholars who did not know the fact believed that the *Great Sun Buddha Sutra*⁵⁷ had had the three-thousand-worlds-in-one-mind concept from its beginning in India. As for the Hua-yen school, although people did not realize, Ch'eng-kuan⁵⁸ stole the concept of three-thousand-worlds-in-one-mind and read it into the words of the *Flower Garland Sutra*⁵⁹ saying "mind is like a skillful painter."

The Six Sects⁶⁰ such as Hua-yen (Kegon) were brought over to our land, Japan, before T'ien-t'ai (Tendai) and Chen-yen (Shingon) sects. Hua-yen, San-lun (Sanron), and Fa-hsiang (Hossō) sects controverted one another like water and fire. Then, Grand Master Dengyō⁶¹ emerged in this country, and he not only silenced the fallacy of the Six Schools but also decisively proved that Shingon Sect had plagiarized T'ien-t'ai interpretations of the *Lotus Sutra* in order to make up its own secret principle. Casting aside opinions of various masters in various schools and basing solely on Buddhist scriptures, Grand Master Dengyō won in polemic against high priests of the Six Sects—eight, twelve, fourteen, and three hundred odd in number—as well as Grand Master Kōbō.⁶² Everyone in Japan without exception surrendered to Tendai School, and the Six Sects of Nara, Eastern Temple,⁶³ as well as the temples in the entire land of Japan became subordinate to Mt. Hiei.⁶⁴ It became clear also that founders of various Buddhist

schools in China had surrendered to T'ien-t'ai, enabling themselves to avoid the charge of slandering Buddhist laws.

Afterward, as the world degenerated and wisdom of the people declined, fine theology of T'ien-t'ai was no longer studied. As other sects grew stronger in devotion, Tendai, reduced by the Six or Seven sects,⁶⁵ steadily grew weaker until it was no longer equal even to the Six or Seven Sects. Defeated by Zen and Pure Land sects, which were not worth mentioning, lay members of Tendai began moving over to those false schools—at first gradually, but in the end even revered high priests all left Tendai for these false schools to bolster them. Meanwhile, farms and fiefs of the Six Sects and Eight Sects⁶⁶ were all destroyed, and the true dharma disappeared. Such great and righteous guardian deities as Goddess Amaterasu, True Hachiman, and Mountain King do not seem to accept the delicacy of the true dharma. As they left the land, making room for wicked evils, the country was about to crumble.

Now in my humble opinion, there are many differences between what was preached by the Buddha during the first forty-odd years and that of the last eight years,⁶⁷ but what scholars consider to be the most important, which I certainly agree with, are the attainment of Buddhahood by two categories of men called *shravaka* and *pratyekabuddha*⁶⁸ as well as the revelation of the Eternal life of the Buddha.

It is revealed in the *Lotus Sutra* that, Shāriputra is the future Buddha of Flower-Light; Kāshyapa, that of Light; Subhūti, of Beautiful Form; Kātyāyana, of Gold-Light; Maudgalyāyana, of Tamālapatracandana-Fragrance; Pūrna, of Law-Brightness; Ānanda, of Mountain-Sea-Wisdom-Supernatural-Power-King; Rahūla, of Stepping-on-Flower-Of-Seven-Treasures; 1,200 male disciples, of Universal Brightness; 2,000 of those who are learning and who have nothing to learn, of Treasure-Form; female disciple Mahā-Prajāpāti, of Gladly-Seen-By-All-Beings; and Yashodharā will be the Emitting-Ten-Million-Rays-of-Light Buddha in the future.

These people appear respectable in the *Lotus Sutra*, but are often disappointing in scriptures expounded before it. For the World Honored Buddha was a man of true words, and that was the reason why He was called a sage or Great Man. Wisemen and sages of Confucianism and heavenly hermits of heretic schools in India must have represented reality. The World Honored One must have been called a Great Man because He was superior to all these people. This Great Man declared, "He has come to this world for the purpose of carrying out solely one important task." He also said that the truth, "which has not yet been revealed," "was about to be revealed at long last," and that "He was about to cast aside all the expedients." These words of His were attested to be true by Many-Treasures Buddha, and buddhas in replica who gathered together to praise Him, sticking out their tongues.⁶⁹ Under the circumstances who could cast doubt on the words that Shāriputra was the future Flower-Light Buddha and Kāshyapa was the Light Buddha?

Nevertheless, it is also true that scriptures expounded prior to the *Lotus* are also words of the Buddha. It is said in the *Flower Garland Sutra*:⁷⁰

There are just two places where the Great-Medicine-King Tree, representing the wisdom of the Buddha, is unable to grow : a large chasm where two categories of people, *shravaka* and *pratyeka-buddha* who practice non-action, had fallen; and a great body of water contaminated with poisonous greed and attachment, where those unworthy who destroyed whatever merits they accumulated were drowned.

The meaning of this sutra is as follows: There is a huge tree on Himalaya Mountains, the roots of which are said to be expanding without bounds. Called the Great-Medicine-King Tree, it is the supreme king of all trees in the entire world, measuring 168,000 *yojana*⁷¹ in height. All trees and grasses in the whole world have roots in it, and they bear flowers and fruits according to the condition of this

giant tree's branches, leaves, flowers, and fruits. This tree is a simile of His buddha-nature as all of the trees and grasses stand for all the people. However, this giant tree cannot grow in a burning pit and in the water. The state of mind of *shravaka* and *pratyekabuddha* is likened to a burning pit, and heart of those unfit for obtaining Buddhahood is to a body of water. That is to say these two kinds of people will never become buddhas.

It is said in the *Sutra of the Great Assembly*:⁷²

There are two categories of people, who are the same as being dead because after all they are unable to feel grateful to what they owe and repay it. They are the so-called *shravaka* and *pratyekabuddha*. They are like a man who has fallen in a chasm, unable to help himself and others. Having fallen in a pit of freedom,⁷³ *shravaka* and *pratyekabuddha* are unable to help themselves as well as other people.

In the final analysis, 3,000 odd rolls of Confucian writings boil down to two: filial piety and loyalty. Loyal subjects also come from filial families. To be filial means to be high; the heaven is high but it is not at all higher than filial piety. It means thickness, too; the earth is thick, but it is not any thicker than filial piety.⁷⁴ Both sages and wise men come from filial families. How much more should those who study the Buddhist dharma know and repay the kindness they receive? Disciples of the Buddha should not fail to feel grateful of Four Favors⁷⁵ and repay them. Moreover, *shravaka* and *pratyekabuddha* such as Shāriputra and Kāshyapa were those who kept the 250 Commandments,⁷⁶ lived with dignity in accordance with 3,000 rules, exhaustively studied Triple Meditation⁷⁷ and the *Āgama Sutras*, and extinguished illusions of the unenlightened⁷⁸ in the Triple World.* They must have been examples of knowing and paying favors received. In spite of all this, the Buddha condemned them for not realizing what they had owed. The reason for this is that it is for the purpose of saving parents that a man leaves his parents' house and takes a

Buddhist vow; and that although *shrāvaka* and *pratyekabuddha* might think that they have obtained their own freedom, they lack the merits of helping others. Even if they help others a little, they are still to be blamed for not repaying what they owe their parents so long as their parents are permitted to wander in the path with no possibility of obtaining Buddhahood.

It is said in the *Vimalakīrti Sutra*:⁸⁰

Vimalakīrti also asked Shāriputra, "What is the seed of Buddhahood?" Shāriputra responded: "Those with all the illusions are the seeds of Buddhahood. Even if they commit Five Evils⁸¹ to go to the worst Hell of Incessant Suffering,⁸² they still have a longing for this Buddhahood." Shāriputra also said, "For instance, beautiful and fragrant blue lotus flowers do not bloom on a dry plateau land, but they do bloom in muddy fields;" and "Those who have already achieved complete freedom from all craving and call themselves arhats are unable to strive for Buddhahood and achieve the Buddha's dharma. It is just as those whose five sensory organs are damaged cannot have an advantage of enjoying the Five Joys."⁸³

This means that even if the Three Poisons of greed, anger, and ignorance become a seed of Buddhahood; even if the Five Evils such as murdering father become a seed of Buddhahood; and even if the blue lotus plants grow on a dry plateau land, *shrāvaka* or *pratyekabuddha* will never be a buddha. That is to say, in comparing good deeds by *shrāvaka* and *pratyekabuddha* against evil acts of the unenlightened men, even if the latter deserve to be buddhas, the former do not. While Hinayana sutras remonstrate the evil and praise the virtuous, this one slanders the virtues of *shrāvaka* and *pratyekabuddha* and praises the evils of the unenlightened. This sounds like a heretic teaching rather than that of Buddhist sutras, but it must have been said in order to stress the impossibility of ever obtaining the buddhahood by those two categories of people.

It is recorded in the *Dharani Sutra*:⁸⁴

Bodhisattva Mānushrī asked Shāriputra: "Would you say that dead trees bloom, rivers go back to mountains, pieces of a broken rock become whole, and toasted seeds ever germinate?" When Shāriputra answered, "No," the bodhisattva said to him, "If these cannot happen, why have you been joyful to hear that I was guaranteed of obtaining buddhahood in the future?"

This means that as dead woods will not bloom, river waters will never go back to the original mountain, broken rocks will never become whole, and toasted seeds will never germinate; two categories of people—*shravaka* and *pratyekabuddha*—will never obtain buddhahood as their seeds of buddha nature have been toasted.

The *Larger Wisdom Sutra* says:⁸⁵ "Those in the World of Heaven, who have not yet gotten the longing for the perfect enlightenment, will have it someday, while those who have reached the highest of *shravaka* will never aspire to have the perfect enlightenment because such people have isolated themselves from life and death." It means that we should not admire those in the world of *shravaka* and *pratyekabuddha* because they will never strive for the perfect enlightenment, but we should admire those in the World of Heaven because these people will.

The *Sutra of the Resolute Meditation* says:⁸⁷ "Even those who committed Five Evils will be able to obtain the buddhahood if they, upon hearing about the Resolute Meditation, wish to attain the perfect enlightenment. Oh, World Honored One, those arhats who have gotten rid of all illusions are like a broken utensil; they do not deserve this meditation." The *Vimalakīrti Sutra* says:⁸⁸ "Those who give alms to you are not a rich paddy of happiness; those who support you will plunge into the Three Wicked Worlds." It means that those in the Heaven and Human World⁸⁹ who support saintly monks such as Shāriputra and Kāshyapa never fail to plunge in the Three Wicked Worlds.

With the exception of the Buddha Himself, these saintly monks were considered nothing but the eyes of those in the Heaven and Human World and leaders of all the people. Despite that, it was repeated in the presence of those in the Heaven and Human World that those saintly men would never obtain buddhahood. This must have been lamentable for them. Was the Buddha trying to punish His disciples to death?

In addition, citing numerous parables such as cow's milk and donkey's milk,** ceramics and golden utensils,** and fireflies under the sun,*** the Buddha harshly condemned *shrāvaka* and *pratyekabuddha*. He did so not in a few words, not for a few days or months or years, and in not a few scriptures. As the Buddha relentlessly condemned them for more than forty years, in numerous scriptures, and before crowds of numerous meetings, everyone, you and I and heaven and earth, knew that He was not joking. It was not one or two persons but hundreds, thousands, and tens of thousands of people who knew it. Those of the Triple World—various heavenly ones, dragons and demons; those from all over India, Four Continents,⁹⁰ Six Heavens of the World of Desire,⁹¹ Worlds of Form and Formlessness; as well as those heavenly and human beings, *shrāvaka* and *pratyekabuddha*, and great bodhisattvas who gathered together from the worlds in ten directions all heard of it. Upon returning to their own lands, they told what they heard in the Saha World⁹² to everyone in their respective lands. Therefore without exception everyone in the entire world, expanding limitlessly and in ten directions, knew that Kāshyapa and Shāriputra would never achieve buddhahood and that they should not be supported.

Nevertheless, the Buddha suddenly retracted his words and stated in the *Lotus Sutra*, preached in the last eight years, that the *shrāvakas* and *pratyekabuddhas* would obtain buddhahood. How could a great crowd of those from Heaven and Human World believe in that? Finding it difficult to believe, they began to cast doubt about all the

sutras and what He preached over 50 years. They wondered whether or not it was really said in the sutras that the truth had not been revealed during the first forty odd years of His preaching, and whether or not it was a heavenly devil who appeared to be the Buddha, expounding sutras the last eight years. While they were wondering, the Buddha seemed very serious and proceeded to define the times, places, and names of the *shravaka*, and *pratyekabuddha* as future buddhas, that is, in which land and how many kalpas later they would attain buddhahood. He even designated the disciples they would have then. The Lord Buddha appeared to have double talked and contradicted himself. It was for this reason that heretic schools accused Him of being a big liar.

Being questioned of the contradiction by the disturbed crowds from the Worlds of Human as well as Heaven, Lord Shākyamuni Buddha tried in vain to dispel their doubts explaining them away one way or another. Just when the Buddha was having a difficult time Many-Treasures Buddha of Treasure-Purity World to the east emerged from the earth, aboard the great Stupa of Seven Treasures, 500 *yojana* high and 250 *yojana* wide, and went up high in the sky. It was as though the full moon appeared over the mountain range in the east in the midst of a pitch-dark night. From this great Stupa of Seven Treasures, hung in the sky without touching the earth or sky, sounded a resounding voice of confirmation :⁹³

Thereupon a loud voice of praise was heard from within the Stupa of Seven Treasures : “Excellent, excellent ! You, Shākyamuni, the World Honored One, have expounded the Sutra of the Lotus Flower of the Wonderful Law, the Teaching of Equality, the Great Wisdom, the Law of Bodhisattvas, the Law protected by the Buddhas, to this great multitude. This is it, this is it. What you, Shākyamuni, the World Honored One have expounded is all true...”

Thereupon the World Honored One displayed His great super-

natural powers in the presence of the multitude, which included not only the many hundreds of thousands of billions of bodhisattvas who had lived in this human world, headed by Mānusharī, but also... men and non-human beings. He stretched out His broad and long tongue upward until the tip of it reached the World of Brahma. Then He emitted the rays of light....

He sent back the buddhas in replicas, who had come from the worlds of the ten quarters, to their home worlds and said, "May the stupa of the Many-Treasures Buddha be where it was."

When the Greatly Awakened and World Honored One obtained the buddhahood for the first time, various buddhas appeared in the worlds of ten directions to comfort Him. In addition, they sent great bodhisattvas over to Him. Expounding the *Wisdom Sutra*, the long tongue of Shākyamuni Buddha covered three-thousand worlds,⁹⁴ and thousands of buddhas appeared in the world in ten directions. When He preached the *Golden Light Sutra*, four buddhas of the worlds in four directions emerged; when He preached the *Amitabha Sutra*, tongues of buddhas in the worlds of six directions covered three-thousand worlds; and when He preached the *Sutra of the Great Assembly*, various buddhas and bodhisattvas gathered together in the Great Temple.

Considering these against the background of the *Lotus Sutra*, they are like yellow rocks against gold nuggets, white clouds against white mountains, white pieces of ice against mirrors of silver, black color against blue color, which those poor-eyesighted, crooked-eyed, one-eyed, or evil-eyed may not be able to distinguish. Having been expounded first, the *Flower Garland Sutra* had no preceding words of the Buddha to compare with. How could there be any serious doubt about it? It was for the purpose of chastising the *shravaka* and *pratyekabuddha* of Hinayana sutras that the Buddha, upon expounding such sutras as the *Great Assembly*, *Larger Wisdom*, *Golden Light* and *Amitabha*, explained the Pure Lands in the worlds of ten directions, causing the unenlightened and bodhisattvas long for the Pure

Lands, and making *shravaka* and *pratyekabuddha* worry themselves. It was for the purpose of making distinction between the Hinayana and Mahayana sutras that the Buddha explained in the Mahayana sutras such things as buddhas appearing in ten directions, bodhisattvas dispatched from ten directions, expounding of the same Mahayana sutras also in the worlds of ten directions, buddhas gathering together from the ten directions, Shākyamuni Buddha covering three-thousand worlds with his huge tongue, or various buddhas also sticking out their long tongues. This must have been solely for the purpose of tearing apart what was said in the Hinayana sutras that there was only one Buddha in the worlds of ten directions. It was not as serious as it was with the *Lotus Sutra*, which revealed the fundamental difference from other Mahayana sutras expounded before it, making men of *shravaka* and *pratyekabuddha* wonder whether or not it was a devil pretending to be the Buddha. Nevertheless, those poor-eyesighted followers of the Kegon, Hossō, Sanron, Shingon, and Pure Land sects saw no difference between their canons and the *Lotus Sutra*. Their eyes must have been poor indeed!

During the life time of Shākyamuni Buddha, there might have been those who cast aside sutras expounded during the first forty odd years, siding with the *Lotus Sutra*. After His death, however, it must have been difficult to put faith in this sutra. For one, while there were many sutras expounded before the *Lotus*, the latter was just one; while the former were preached many years, the latter was just eight years; the Buddha appeared to many a big liar, who could not be trusted. They believed in, if at all, not the *Lotus Sutra*, but those expounded before it. Also it appears today that everyone puts faith in the *Lotus Sutra*, but not really. This is why they willingly put faith in those who see no distinction between the *Lotus Sutra* on one hand and the *Great Sun Buddha Sutra*, the *Flower Garland Sutra*, or the *Amitabha Sutra* on the other; but not in those who differentiate them. Even if they did, they did so reluctantly. This is why nobody

believes in me, Nichiren, who has been saying that it was Grand Master Dengyō alone who read the *Louts Sutra* during the 700 odd years since the introduction of the sutra to Japan.

However, it is stated in the *Lotus Sutra*:⁹⁵ "It is not difficult to grab the Mt. Sumeru⁹⁶ and throw it over to any of those numerous Buddha lands..., but it is indeed difficult to expound this sutra in this decadent world after the death of the Buddha."

My stubbornness is matched by the sutra. What would you say about a line in the *Nirvana Sutra*, an amplification of the *Lotus Sutra*, that says, "The slanderers of the dharma in the latter age of decay are countless just as the soil of the worlds in ten directions is immeasurable; those who keep the right dharma are few in number just as a bit of soil in a dirty fingernail is small in amount? Please think deeply whether or not various peoples in Japan represent a bit of soil in a fingernail, and Nichiren the soil of the worlds in ten directions. Reasons win under the rule of a wise king, and unreasonableness gets the upper hand under the rule of an unwise sovereign. You must remember that it is in the world of saintly people that the true meanings of the *Lotus Sutra* are revealed. Regarding this theology, comparison between the first half of the *Lotus Sutra* and sutras expounded before it makes the latter appear superior. If the sutras before the *Lotus* are superior, those *shravakas* and *pratyekabuddha* such as Shāriputra will never be able to attain buddhahood. How regrettable would it be for them!

(to be continued)

NOTES

1. Including Taoism. Nichiren apparently does not differentiate Confucianism from Taoism in writing this essay.
2. Literally, outer and inner ways.
3. First series of legendary rulers in China (Fu-hsi, Shen-nung, Yellow Emperor).
4. Series of five legendary sage rulers (including Yao and Shun) succeeding the Three Emperors.
5. Founders of the earliest three dynasties in China: King Yü of Hsia, King T'ang of Shang (Yin), and King Wu of Chou.
6. What is indispensable to cross over the river of life and death, that is, in life.
7. King Shun, the last of the so-called Five Rulers, is said to have never slighted his father, who repeatedly tried to kill him in favor of the younger son, Shun's half-brother (*Shih-chi*, Wu-ti pen-chi).
8. Han Kao-tze, Founder of the Former Han dynasty, kept on treating his father with reverence even after Kao-tze became the emperor.
9. According to the *Shih-chi*, King Wu, founder of Chou dynasty, went to the battleground against the Shang army, carrying a wooden name tablet of his father (Chou pen-chi).
10. A man of the Later Han China, he is said to have his mother's statue made and treated it respectfully as though it were his real mother so that it eventually began to speak.
11. Uncle of the last King of Yin (Shang), Chieh (*Shih-chi*, Yin pen-chi).
12. Duke I (Yee) of Wei, a typical bad last ruler, was killed by northern barbarians, who cannibalized him, leaving only his liver on the street. Returning from a political mission, Hung-yen picked it up and cut his own stomach to insert it (*Shih-chi*, Wei K'ang Shu shih-chia).
13. Father of King Wu of Chou. See note 9.
14. The first two do not exist today, and there is no agreement as to what the last refers to.
15. Five virtues of Confucianism: benevolence, righteousness, politeness, wisdom, and fidelity.
16. King Wu had five assistants including Duke of Chou and T'ai-kung-wang (*Lü-shih ch'un-ch'iu*, 25).
17. It is said that the 28 generals who helped restore the Han dynasty were manifestation of 28 constellations (*Ho-Han-shu*).

18. Three fundamental concepts of Buddhism.
19. Two fundamental practices of Confucianism.
20. Also called Chan-jan, he is given credit for the revival of the T'ien-t'ai school in T'ang China.
21. *Mo-ho-chih-kuan-fu-hsing-chuan-hung-chüeh* (Annotations on Mo-ho-chih-kuan) hereafter referred as *Hung-chüeh* (Annotations), Book 6, cited in *Taishō shishū daizōkyō* (hereafter referred as TT), vol. 46.
22. *Suvarnaprabhāsotta-ma-rāja-sūtra*.
23. *Mo-ho-chih-kuan* by T'ien-t'ai (TT, vol. 46).
24. Ibid.
25. *Hung-chüeh*, see n. 21.
26. Literally, five Indias, i. e., East, West, South, North, and Center of India.
27. *Hisōten* or Hisō Heaven which is the highest region of the world of unenlightened men.
28. Buddhist commandments.
29. The world of unenlightened men is called Triple World because it consists of three regions : World of Desires, of Forms (without desires), and of Formlessness (without physical forms).
30. Bottom three of the Ten Worlds. According to the T'ien-t'ai theology, the world consists of, in ascending order, hell ; world of hungry spirits, beasts and birds, anger, human beings; heaven; worlds of *shrāvaka*, *pratyekabuddha*, bodhisattvas, and buddhas.
31. Shakro Devānām Indrah, one of the two main guardian deities of Buddhism.
32. *Mahāparinirvāna sūtra* (TT, vol. 12).
33. Chap. 8.
34. Greed, anger, and ignorance.
35. The Buddha.
36. Illusion of unenlightened men in reasoning as well as feeling, illusion preventing bodhisattvas from saving others, and fundamental illusion preventing bodhisattvas from attaining the fundamental enlightenment.
37. Bottom six of the Ten Worlds, in which the souls of living beings transmigrate from one another. See n. 30.
38. See n. 36.
39. Teaching to save all the people.
40. It is said that there are altogether 84,000 Buddhist scriptures in 12 series.
41. Hinayana and Mahayana.
42. Prabhūtaratna (Tahō) Buddha.
43. The Buddha assuming various forms as a means of saving various people.

44. Attesting it to be true and praising it (*Lotus Sutra*, chap. 21).
45. *Ichinen sanzen* in Japanese, i. e., T'ien T'ai doctrine saying that all phenomena in this world are included in one thought which human beings think in their daily lives.
46. Chap. 16.
47. The first half of the *Lotus Sutra* is called *shakumon* while the last half *hommon*.
48. Two Indian Buddhist scholars having great influence on Chinese and Japanese Buddhism.
49. T'ien-t'ai doctrine saying that each of the Ten Worlds (see n. 30) contains the other nine.
50. Bottom 8 of the Ten Worlds.
51. Of Northern Chou, who became a leading anti-Buddhist activist largely responsible for the imperial edict of 574 A. D. by Emperor Wu prohibiting Buddhism and Taoism.
52. Buddhist scriptures. See n. 40.
53. *Tao-te-ching*, the Taoist canon.
54. Most widely accepted date for the introduction of Buddhism to China is 10th year of the Yung-p'ing era (67 A. D.).
55. (600 - 644 A. D.), founder of the Fa-hsiang sect in China, spent 26 years traveling in India in pilgrimage.
56. (632 - 682), disciple of Hsuan-tsang and the second primogenitor of the Fa-hsiang sect in China.
57. *Mahavairocana-sūtra*, basic sutra of Chen-yen (Shingon) School.
58. (738 - 839), 4th primogenitor of the Chen-yen Sect in China.
59. *Avatamsaka-sūtra* (Hua-yen-ching), the basic text of the Hua-yen (Kegon) Sect (TT., vol. 9).
60. Six Sects of Buddhism during the Nara Period: Kusha (Chū-shê), Jyōjitsu (Chên-shih), Kegon (Hua-yen), Sanron (San-lun) Hossō (Fa-hsiang), and Ritsu (Lū).
61. Also called Saichō (767 - 822), founder of the Tendai Sect in Japan.
62. Founder of the Shingon Sect in Japan.
63. Tōji of Kyoto belonging to the Shingon Sect.
64. I. e., Enryaku Temple on Mt. Hiei founded by Dengyō.
65. Six Sects of Nara and Shingon Sect.
66. Six Sects of Nara as well as Shingon and Tendai.
67. According to T'ien-t'ai the *Lotus Sutra* was expounded by the Buddha during the last eight years of His life.

68. Literally two vehicles, meaning vehicles of *shrāvaka* and *pratyekabuddha*, that is those striving to achieve enlightenment for themselves, without thinking of others. See also n. 30.
69. Nn. 42 - 44.
70. TT, vol. 10.
71. *Yojana*, a unit of measurement in length in ancient India. The exact length is not known, but it is said to be the distance of a day's journey by a king's chariot.
72. *Daishutsu Sutra* (TT., vol. 13).
73. *Vimukti*: gaining freedom from the bonds of sufferings and illusions.
74. "On" pronunciation of Chinese characters for filial piety, height, and thickness are all pronounced "kō."
75. Favours of parents, all living beings, sovereign, and three treasures (Buddha, dharma, and *samgha*).
76. Requirements for monks of Hinayana Buddhism.
77. Three stages of advancement in the practice of meditation or *zen*.
78. Literally, illusions in thinking and feeling. See. n. 36.
79. N. 27.
80. TT., vol. 14.
81. Killing father, mother, and arhat; injuring the Buddha; and disrupting peace among Buddhist monks.
82. There are many hells, that of Incessant Suffering being the lowest.
83. Joys of color, voice, fragrance, taste, and touching.
84. TT., vol. 21.
85. *Mahāprajñāparamitā-sūtra* (TT., vol. 8).
86. One of the Ten Worlds.
87. *Shūramgama-samādhi-sūtra* (TT., vol. 15).
88. TT., vol. 14.
89. 2 of Ten Worlds.
90. The world where humans live was considered by ancient Indians to have consisted of four continents.
91. World of Desire was thought to be covered by the 6 layered heaven.
92. The world inhabited by men.
93. Chap. 11, 21, 22. (Senchū Murano, *The Lotus Sutra*, pp.165, 265, 271).
94. Worlds numbering the third power of one thousand (one billion), conceived to be the Buddha's domain.
95. Chap. 11.
96. Thought to stand at the center of the world, according to ancient Indian

tradition.

* See n. 29.

** “Though they are alike in color, when they are fermented, cow’s milk will become milk-wine but donkey’s milk will turn to manure.” (*Mahā-prajñāparāmitashastra*, 18).

*** The *Sutra of Boddhisattva Mañjuśahri’s Pure Disciplines* says that ceramic utensils look like golden ones if they are gilded with gold; however, difference between ceramic and golden utensils becomes clear when polished. Likewise, disciplines of Mahayana and Hinayana are fundamentally different although they may sound alike. (Ichirō Kobayashi, *Nichiren Shonin ibun dai-koza*, p. 109).

**** “You can’t compare a cow’s footprint with the great ocean; you can’t compare a firefly against the sun.” (*Vimata-kirti Sutra*, cited in Shōkō Kabutogi, “Kaimokushō,” p. 340).

Bibliography

Text

"Kaimoku-shō" in vol. 1 of *Risshōdaigaku Shūgaku Kenkyū-jo*, ed., *Showa teihon Nichiren ibun*, 4 vols., Minobu, Minobu Kuonji, 1959 - 65.

Works in English

- Daitō Shuppan-sha, *Japanese-English Buddhist Dictionary*, Tokyo, 1979.
Murano, Senchū, tr., *The Sutra of the Lotus Flower of the Wonderful Law Translated from Kumarajīva's Version of the Saddharmapundarika-sutra*, Tokyo, Nichiren-shū Headquarters, 1974.
Nichiren Shōshū International Center, *A Dictionary of Buddhist Terms and Concepts*, Tokyo, 1983.

Works in Japanese

- Kabutogi, Shōkō, ed. with annotations, "Kaimoku-shō," in Iwanami Shoten (comp.), *Nihon koten bungaku taikai*, 82, *Shinran-shu, Nichiren-shu*, Tokyo, Iwanami Shoten, 1966.
Kobayashi, Ichirō, *Nichiren Shōnin ibun dai-kōza*, 2, *kaimoku-shō*, Tokyo, Nisshin Shuppan, 1978.
Motai Kyōkō, *Kaimoku-shō kōsan*, Kyoto, Heiraku-ji Shoten, 1974.
Nakagawa, Nisshi, *Kaimoku-shō teiyō*, Kyoto, Heiraku-ji Shoten, 1974.
Takakusu, Junjirō, et al., eds., *Taishō shinshū daizōkyō*, Tokyo, Taishō Issai-kyō Kankō-kai, 1924 - 33.

Begin + 後続動詞群の深層構造

(The Deep Structure of *Begin* + *to*)

清水純子

〔0〕序

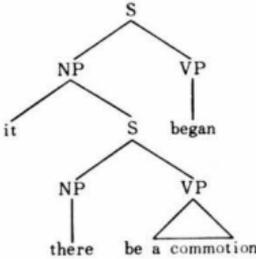
He began his work. や He began working. における his work や working のような、名詞句、動名詞を伴う begin の場合の文の深層構造は各々 [S[NP[N he]] [VP[V begin]] [NP[Det his] [N work]]], [S [NP[N he]] [VP[V begin]] [NP[N working]]] のようになり、begin に後続する名詞句、動名詞は名詞句 (NP) と解釈され、これらの場合の深層構造に関しては疑義はない。しかし、begin の後に to を含む動詞群を伴った場合の深層構造に関しては、自動詞的 (intransitive)、他動詞的 (transitive)、準助動詞 (semi-auxiliary) + 前置詞句 (PP)、の解釈がある。そこで、ここでは、begin は相 (aspect) をあらわし、F. R. Palmer (1974) のいう連鎖詞 (catenative) として、即ち、形式的には本動詞 (full verb) として、さらに意味の観点から法助動詞 (modal auxiliaries) にも似た特徴があるところから、意味上準法助動詞 (semi-modal) としても解し、begin 及び後続の to を伴った動詞群からなる動詞句 (VP) の深層構造として、自動詞的、他動詞的、準助動詞 + 前置詞句、とは異った深層構造を提唱する。

〔1〕諸 説

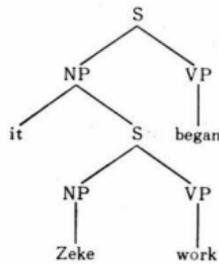
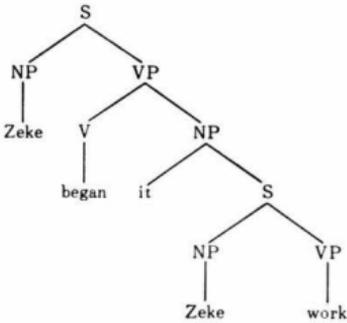
よく取りあげられるのが Perlmutter¹ (1970) の学説である。文主語 (abstract subject) をとる場合、即ち、(1), (2) のような文の場合は begin は seem や happen のような intransitive verb と解され、(3) ((2) の D.S.) のような深層構造 (D. S.) を有し、生物主語 (animate subject) 及び、深層において it で置き換えられる補文 (complement) をとると考えられる (4) の場合、begin は try, condescend, refuse のような働きをすると考え

られ transitive であるとし、(5)のような D.S. となる。また、(4)のような表層構造を有し、無生物主語をとる場合、及びその受動化の場合の D. S. は(6)のような解釈が可能であるとする。

- (1) It began to rain.
- (2) There began to be a commotion.
- (3)



- (4) Zeke began to work.
- (5)
- (6)

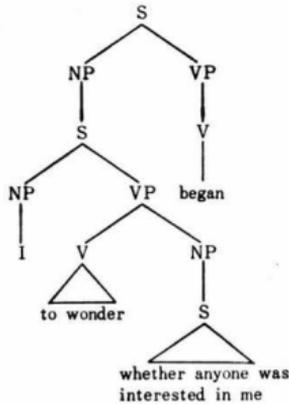


Newmeyer(1969)は(3), (6)のような intransitive² の D. S. を主張する。happen のような動詞に似た特性があり、transitive と解釈した場合に必要な類似主語制約 (like-subject constraint) を認めず、そのため、*John began for Bill to go. のような非文が出来てしまうということからも D. S. においては intransitive のみの解釈があるとする。

また Langendoen (1969) や Huddleston (1976) も(7)の D. S. を(8), (9)の D. S. を(10)に示すように intransitive と解していると考えられる。

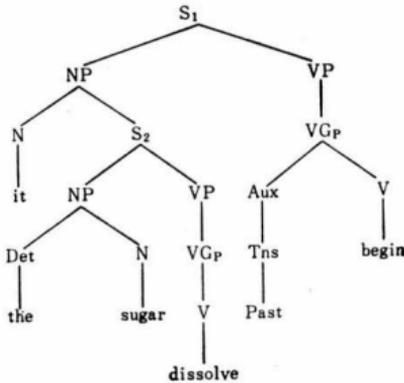
- (7) I began to wonder whether anyone was interested in me.

(8)



(9) The sugar began to dissolve.

(10)



他方、中島 (1982) は(11)の受動態は(12), (13)ではなく、(14)のように受動態は不定詞句内で行われ begin は無変化であることから、begin を準助動詞と見、準助動詞は(15)のような構造をもつとしている。

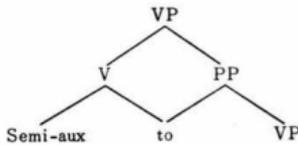
(11) The noise began to annoy Joe.

(12) *To annoy Joe was begun by the noise.

(13) *Joe was begun to annoy by the noise.

(14) Joe began to be annoyed by the noise.

(15)



〔2〕 連鎖詞 (catenative) begin

Palmer, F. R. (1974) は “there is a much ‘tighter’ syntactic and semantic relationship between the catenative and its following verb;” と連鎖詞 (catenative) と後続の動詞との間に密接な関係があることを強調しているように、伝統文法や Perlmutter, Ross, Kiparskey, P., がいうように NP が begin に後続しているのではなく、Newmeyer, Langendoen, Huddleston, 梶田がいうように、begin の後に何も後続しないというのではなく、to を含む後続動詞群と catenative である begin は緊密な関係にあると考える。

〔A〕 (16) What did she begin?

(17) She began (learning) Chinese.

(18) She began jogging at six o'clock.

(19) She began to arrange flowers, when the phone rang.

(20) What do you want?

(21) I want a Harley Davidson motorcycle.

(22) I want to see an old friend.

(16)の返答として、(17)、(18)のような返事が理解しやすく好ましいが、特別な状況 (situation) のもとでは(19)もあり得、(20)の返答として(21)はよく理解できるが、(22)は特殊な場合にのみ可能というのが informants の判断である。この観察から(16)の質問に対する返答 (17)、(18) 及び (20)の質問に対する返答(21)の Chinese, jogging, a Harley Davidson motorcycle は名詞句 (NP) と断言できるが、(19)、(22) の to arrange flowers, to see an old friend は NP であると明言することは難しい。

〔B〕 (23) *What did he begin to?

(24) What did he begin to do?

- (25) He began to put his toys away.
 (26) *What does he want to?
 (27) What does he want to do?
 (28) He wants to watch T. V.

(23), (26)のような疑問文は存在しないが, (24), (27)の疑問文は認容できる (acceptable). (24), (27) のような質問に対しては必ず(25), (28) のような返答が得られる. (25), (28)のように begin や want の後に to を含む動詞群が続くような答を期待するときは, (16), (20)のような疑問文でもなく, (23), (26) のような疑問文でもなく, (24), (27) のように begin to do, want to do が一体となって各々が一つの動詞句 (VP) の働きをしている場合が認容可能なのである. このことから, begin と後続の to を含む動詞群の結びつきは緊密であるといえることができる.

- [C] (29) *What he began was to work.
 (30) What he began to do was to work.
 (31) What he liked was to see a movie.
 (32) What he hoped was to be well.
 (33) What he wanted was to become a doctor.
 (34) What he hated was to tell a lie.

Palmer (1974) は, ある動詞が目的語として不定詞をとり, 他の動詞の場合は目的語としての不定詞ではないということを示すために, 擬似分裂文 (pseudo-cleft sentence) を用いてテストしても有益ではないとして, “it is very difficult to draw any clear lines where pseudo-clefting is or is not possible.” (p. 179) と述べているし, 又 Perlmutter (1970) の注に “George Lakoff has agreed that the lack of grammatical pseudo-cleft sentences like *What Zeke began was to work. is also not a valid agreement against noun phrase complementation with such verbs,…” とあるように, 動詞に後続する to を含む動詞群が NP かどうかを調べるためのテストとしては問題があるようである. ここで pseudo-cleft sentence を用いているのは, begin の後の to を伴った動詞群が NP であるかどうかをテストするためではなく, pseudo-cleft sentence を用いて認容可能となった場合の begin と後続の to 付動詞群との関係を観察したためである. 即ち (30) の pseudo-cleft sentence の場合, begin to do

によって認容できる文となっているのは, begin と後続の to 付動詞群は切り離せない密接な関係にあることを示している. 他の catenatives である like, hope, want, hate, との比較において, like, hope, want, hate, の場合は to do を伴わずして pseudo-cleft sentences をつくるのが可能である. このことから, 同じ catenatives でも begin の方が後続の to を含む動詞群との関係の緊密度が高いのではないかと思われる.

[D] (35) He never washed his clothes, but in 1980 he began to (wash)³.

(36) He did not learn a lot of English last year, but he wants to.

(37) Did she receive fan letters?
No, but she is beginning to.

(38) Did she go to Niagara Falls?
No, but she wants to.

(39) a. John will want to go if Mary wants to.

b. John will want to if Mary wants to go. (Bresnan)⁴

次に省略する場合を考えてみる. (35)においては, he began to の後に wash his clothes が省略されており, (36)では learn a lot of English, (37)では receive fan letters, (38)では go to Niagara Falls が省略されている. 即ち動詞句 (VP) が省略されているが, begin にせよ want⁵ にせよ to を伴っていることに注目したい. この省略のされ方より, to wash his clothes, to learn a lot of English, to receive fan letters, to go to Niagara Falls が NP ではないということも明確であり, (36), (38), (39) より want と to, (35), (37) より begin と to の結合は密接であることを明示している.

[E] (40) *John began at ten o'clock to work at midnight.

(Newmeyer)

(41) *John began nastily to work merrily. (Ib.)

(42) John began to work at ten o'clock.

(43) John began to work nastily.

Newmeyer (1969) は “I also agree that intransitive subject-embedding verbs cannot co-occur independently with adverbials.” と述べてい

るが、(42), (43)のようにいうことができるにもかかわらず、(40), (41)において *begin* と *to* を切り離してしまっているところに問題がある。従って非文(40), (41)からも *begin* と *to* の間にはいかなる単語も介入させない密接な結びつきがあるということを示している。

以上〔A〕～〔E〕より *begin* に続く *to* を伴う動詞群は NP ではないということと、*begin* と *to* は緊密な関係にあり、Palmer のいうように *begin* は *catenative* であるということができる。

〔3〕 $\bar{S} \rightarrow \text{Comp S}$ (an embedded sentence with for-to)

〔2〕で述べたように、*to* を伴った後続の動詞群の部分が NP ではないということになると、深層構造ではこの部分はどのように扱われるべきなのであろうか。

García (1967)⁶ “All that is needed is to regard *begin* and its group as verbs taking sentences not as their objects, but as their subjects. In other words, they can be thrown into the class of *happen*, *seem*⁷, and *appear*.” と述べているが、注目したいのは、後続動詞群を文扱いしている点である。

(44) He began to work.

(45) He began [S he work].

このことから(44)のおよその深層構造は(45)と考えられる。これは次の OE の例からも理解できると思う。

(46) Ond Ongann hine biddan

=and began to ask himself (Apollonius of Tyre)

(47) Ða ongann sēo abbudisse clyppan

=Then the abbess began to honor (Ib.)

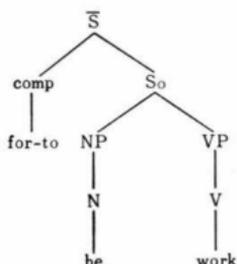
(46), (47) の *biddan*, *clyppan* の bare-infinitive として使われていた部分は、(45)のような補文 (complement) をもっていて、今日と同じような意味理解がなされていたのではないかと推測する。この complement に *for-to* の補文化子配置 (complementizer placement) がなされ補文主語削除 (complementizer subject deletion), 即ち Equi NP deletion によって *to work* が残るということになる。この際(48)のような非文が起らないようにするために、類似主語制約 (like-subject constraint) を適用すれば、

即ち「begin はその主語とその補文の主語が同一でなければならない。」と
 いうことになり、(49)のような文は生成されないことになる。従って(45)
 の complement の部分を樹形図 (tree structure) で示すと (50) のように
 なる。

(48) *John began for Bill to go. (Newmeyer)

(49) *He began for {me, her, us} to work.

(50)



中島は begin に続く動詞群を(15)に示したように、前置詞句 (PP) と
 して扱っている。これは Jespersen (1970) が “Comparative grammar has
 shown that the infinitive in prehistoric times was a fully inflected
 verbal substantive. In OE the ending was *-an*, the only inflected form
 of which was the dative in-*enne*, which under the influence of *-an*
 became *-anne*; this form was used after the preposition *to*.” (§10. 1_i)
 といっているように、不定詞は本来は動詞起源の名詞で、OE においても
-an とか *-enne* というような名詞屈折の名残があり、元来名詞の与格
 の *-anne* は前置詞の *tō* あとに置かれたということから、起源的な見方
 で、前置詞 *tō* + 名詞与格 *-anne* と解し、前置詞 + NP で PP となると
 解釈しているのではないと思われる。一つの解釈としては考えられるが、
 深層構造において、即ち意味の真意として、PP と解し、表層の (45) He
 began to work が生成されるかどうかは、現在の筆者には明確ではない。

〔4〕本動詞 (full verb), 準法助動詞 (semi-modal)

(i) 本動詞

Palmer (1974) は “It has already been assumed that catenatives occur
 in complex rather than simple verb phrases, involving subordination,
 though it has been stressed that these complex phrases still share some

of the characteristics of the simple phrases. As such they are clearly full verbs, not auxiliaries." (p. 168) と、本動詞扱いとし、次のように動詞、助動詞を分類している (P. 16).

- (1) Primary auxiliaries BE, HAVE, DO
- (2) Secondary or modal auxiliaries
WILL, SHALL, CAN, MAY, MUST, OUGHT, DARE,
NEED
- (3) Catenatives KEEP, WANT, LIKE, SEE and many others
- (4) The remaining full verbs

form	full verb	begin
(3rd person singular present) -s form -ing participle	He tells a story.	(51) He begins to tell a story.
	He is telling a story.	(52) He is beginning to tell a story
	Telling a story, he shed tears.	(53) Beginning to tell a story, he began to smoke.
(past participle)	He has told a story.	(54) He has begun to tell a story.
	A story is told by him.	(55) *A story is begun to tell by him.
	Told a story, he burst out crying.	(56) *Begun by Jim, the song became unpopular.
infinitive	To tell a story is interesting.	(57) To begin something as soon as you think of doing it is to succeed in life.
	He had no chance to tell a story.	(58) It is the time to begin the meeting.
	He came here to tell a story.	(59) He gathered men in order to begin a new company.
question	Does he tell a story?	(60) Does he begin to tell a story?
imperative	Tell a story.	(61) Begin to tell a story.

ここでは、catenative begin の動詞としての特性を形式 (form) にもとづいた機能の観点から観察することにする。

(51) から (61) において、begin が形成上不成立なのは、(55) の受動態と(56)の分詞構文で、それ以外は catenatives 以外の本動詞と同じ用法を有しているといえる。この観点から、一応本動詞とみなしてよいのではないかと考える。しかし、他の本動詞と全く同じ取り扱いをすることはできない。(55)のような受動態は不可能であるが、後続動詞の受動化が可能な場合もある。次に、後続動詞受動化⁸が成立する場合、不成立の場合の各々について調べることにする。

(ii) 準法助動詞 (semi-modal)

中島は(11)の受動態は(14)で、この場合 begin が受動形にならずそのままであるところから、準助動詞 (semi-aux) と見ているが、次の観察から主語指向 (subject oriented) の法助動詞 (modal auxiliaries) に似ているということが出来る。

- (63) She began to love the book.
- (64) The book was loved by her.
- (65) *The book began to be loved by her.
- (66) Bill began to eat the apple-pie.
- (67) The apple-pie was eaten by Bill.
- (68) *The apple-pie began to be eaten by Bill.
- (69) John began to kick Jim.
- (70) Jim was kicked by John.
- (71) *Jim began to be kicked by John.
- (72) The tough question began to confuse Mr. Reagan.
- (73) Mr. Reagan began to be confused by the tough question.
- (74) The old woman's trouble began to tire the doctor.
- (75) The doctor began to be tired with the old woman's trouble.
- (76) Something began to lift her body.
- (77) Her body began to be lifted by something.

(65), (68), (71)の文が認容されない (unacceptable) のは、(63), (66), (69)における主語が行為を引き起す動作主 (agent)⁹ であるために受動化が不可能なのであって、主語が agent ではない(72), (74), (76)の場合

は(73), (75), (77)のような受動化の文が可能である。(68)という受動化が不可能な(66)の場合, Bill の意識で動作を始める(もし行為が続いた場合は意志によるとする。)のであって, (68)では Bill の意識による動作行為が the apple tree が主語になることによって, 表現されず, (66)での意味をとどめていない。即ち(66)とは異った意味の受動文(68)は, 意味が変わってしまったために, 理解されない文となってしまうのである。このような現象は, 主語指向(subject oriented)¹⁰の法助動詞(modal aux.)の will や can の場合も起る。

(78) John will meet Mary. (Palmer)

(79) Mary will be met by John. (Ib.)

(80) Tom will meet Sue.

(81) *Sue will be met by Tom.

(78), (79)の will は単なる未来を表わしており, 受動文にしても意味はかわらず, 能動文(78)と受動文(79)の意味は同じ(主語が変わることによる多少の意味差違はあるが, およその意味は同じである。)である。一方(80)の will は意志の will であるため, 認容されない(81)のような文が生じてしまう。即ち, (80)の主語である Tom の意志(volition)によって, Tom は Sue に会うのであるから, (81)のように主語が Sue になると, Sue の意志で行為がなされることになり, (80)の意味とは違った受動文となり, (81)は非文となってしまうのである。

次にVPを省略する観点から見ると, (35)と(82), (37)と(83), のように類似した context の中で, 又は全く同じ context で, begin to と modal aux が使われることができる。このことは begin to が modal aux に似ていることを示しているのではないかと考える。

(35) He never washed his clothes, but in 1980 he began to.

(82) He does not wash his clothes, but he should.

(37) Did she receive fan letters?

No, but she is beginning to.

(83) Did she receive fan letters?

No, but she may.

以上の考察より, begin to が modal aux に似ている点もあるということで, 準法助動詞(semi-modal)と呼ぶことも可能ではないかと考える。

(iii) 動詞指向 (verb oriented)

- (84) Begin to beat the drum.
- (85) Begin to sing a song.
- (86) Begin to read the book.
- (87) *Begin to see a dog.
- (88) *Begin to dream at midnight.
- (89) *Begin to tremble. (not in the theater)
- (90) You will begin to beat the drum.
- (91) *You will begin to see a dog.
- (92) He began to see a dog.
- (93) He began to dream at midnight.
- (94) He began to tremble.

(61)においては、成立する命令文の一例だけをあげたが、命令文の場合も、成立する場合と成立しない場合とがある。

(84)～(86)までは、begin に後続する beat, sing, read は、主語の意志 (volition) によって行為を行うことができる動詞 (+volitive) であるが、(87)～(89)においては、後続の see, dream, tremble は主語の意志によって行動を起すことができない動詞 (-volitive) である。(84)～(86)の begin は後続の (+volitive) の動詞の、(87)～(89)の begin は後続の (-volitive) の動詞の影響を受けていると考えることができる。なぜならば、begin は始動相 (ingressive aspect) を表す点動作相 (point-action aspect) で Curm (1965) によれば点動作相とは、“The point-action aspects call attention, not to an act as a whole, but to only one point, either the beginning or the final point.” で更に始動相を “directs the attention especially to the initial stage of the action or state.” と説明している。即ち begin に後続する動詞の行為、状態のはじめの一点を表すということになる。従って後続の動詞の行為、状態の一部を表すことになり、(84)～(86)の begin は後続の (+volitive) 動詞の行為のはじめの一部を、(87)～(89)の begin は後続の (-volitive) 動詞の行為のはじめの一部を、表出しているということになるので、(84)～(86)の begin は (+volitive) で (87)～(89)の begin は (-volitive) といえる。一方、(92)～(94)は後続の動詞の行為の一部分を表しているという意味で、理解できる文である。

ところで(84), (87)の深層構造は(90), (91)であるが, 深層において, 主語 *you* の意志(modal aux の *will* が深層にある)によって行為が行われなければならないことを意味している. 主語の意志によって行動することができる動詞は(+volitive)動詞であるから, 深層の *you will* の後には(+volitive)の動詞が使われなければならないことになる. 従って表層の(84)~(86)は(+volitive) *begin to beat, begin to sing, begin to read* が使われており, 認容される文となっている. しかし, (87)~(89)の *begin to see, begin to dream, begin to tremble* は(-volitive)の行為を表しており, 深層の *you will* の後には(+volitive)の動詞が続かなければならないということに反し, (91)のように深層において, 認容されず, 従って, 表層の(87)も非文になり, (88), (89)も同様の理由で認容されないことになる.

(95) I asked him to listen to the lecture. (Anderson)

(96) *I asked him to hear¹¹ the lecture. (Ib.)

(97) I asked him to try to listen to the lecture. (Ib.)

(98) I asked him to try to hear the lecture. (Ib.)

(99) I asked him to begin to listen to the lecture. (Ib.)

(100) *I asked him to begin to hear the lecture. (Ib.)

Anderson (1968) は “*begin* meets the condition imposed by *ask*, but the condition is still in force on any following verb. *Begin* is transparent to the condition where *try* is not.” と *ask* の *begin* に, 更に後続の動詞に及ぼす影響を述べている. 即ち, 方法は異なるが, (+volitive) の *ask* と *begin* と後続の(+volitive)の動詞 *listen* と(-volitive)の *hear* の関係を観察していると解釈することができる. 命令文の時に解説したように, (+volitive)の *ask* の後には(+volitive)の動詞が後続しなければならず, その条件を満たすのは(+volitive)である *begin to listen* であって, (-volitive)の *begin to hear* ではない. 故に(99)は認容され, (100)は後続条件の(+volitive)に反しているため, 非文となっていると考えられる.

命令文にせよ, Anderson の例文にせよ, *begin* は point-action aspect の ingressive aspect で, 後続の動詞の行為, 状態の一部である一点を表すため, 後続の動詞の特性を *begin* も担うことになり, 意味上後続の動

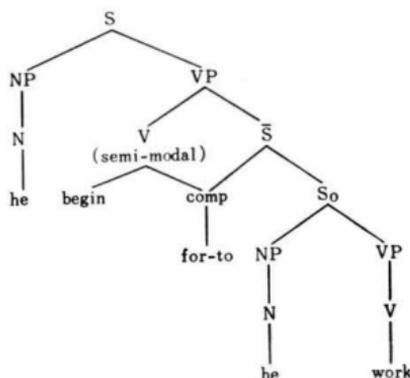
詞の *begin* に及ぼす影響は非常に大きいということができ、従って *begin* は後続の動詞指向 (verb oriented) の特性があるといえることができる。

以上より、(i) で述べたように、形式的には本動詞と解釈でき、(ii)、(iii) の準法助動詞、動詞指向の特性は意味上、助動詞的ともいえることができる。従って本稿では形式上は本動詞、意味上は助動詞的として扱うこととする。

〔5〕 深層構造 (the deep structure of *begin*)

伝統文法や他動詞説などでいわれるような名詞句 (NP) が、*begin* の後に続いているということとはありえないということは、以上の考察から明白と思う。また〔2〕で述べたように *begin* と *to* は緊密に結びついた本動詞、catenative であり、かつ semi-modal であり、*begin* の後の動詞群は embedded sentence \bar{S} であるということより、次のような(45)の深層構造が考えられる。

(101)



Notes

informants として、東京立正女子短期大学、非常勤講師二世 Kaeko Nakashima 他、3名のアメリカー人の御協力を得た。

- 1 Ross (1972) は Perlmutter の説を支持し、Kiparskey, P. が M. I. T. での class lectures で、ドイツ語の例をあげ検証したとしている。例えば一例あげると、

Es hat (*damit) { angefangen } zu schneien.
 { begonnen }

Max hat (damit) { angefangen }, den Schnee zu schaufeln.
 { begonnen }

で da+mit が transitive の anfangen, beginnen の場合に可能であるというのである。

- 2 梶田 (1974) も (1-a), (1-b) のような文に対し, (2-a), (2-b) のような深層における概略の構造を示していることから, intransitive の解釈をしていると考えられる。

(1-a) Cubans began to arrive.

(1-b) John began to attend political meetings.

(2-a) [NP [S Cubans arrive]] began

(2-b) [NP [S John attend political meetings]] began

- 3 wash を使うことを望む informant あり。

- 4 Bresnan は意味の点で次のように述べている。

In (39-a) *Mary wants to* can be interpreted as "Mary wants to go."

But in (39-b) *John will want to* is interpreted as meaning something other than "John will want to go."

- 5 省略の時には, want 以外の catenatives の場合も, 例えば, hope to, like to, try to のように to を伴う。

- 6 García (1967) の tree structure は次のようである。

"In the case of *Tom began to be killed by John*, we start from Fig. 5a, and then embed, obtaining Fig. 5b. This passivizes finally into *Tom began to be killed by John*."

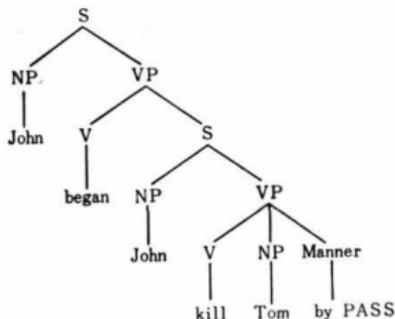


FIGURE 5a

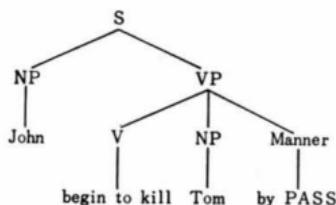


FIGURE 5b

- 7 Palmer (1974) は seem を 'subject complementation' verb として扱っているが、この seem と全く同じように扱えない動詞として begin をあげている。(P. 187)

"There are a few verbs that seem to follow the pattern of SEEM as well as that of the more usual pattern of the other catenatives, eg. BEGIN in:

John began to read a book.

The rain began to destroy the flowers.

For the first sentence cannot be passivized but the second can :

*The book began to be read by John.

The flowers began to be destroyed by the rain.

- 8 catenatives でも後続動詞受動化が可能な場合、不可能な場合がある。

John wants to meet Mary. (Palmer)

!Mary wants to be met by John. (Ib.)

John happened to see Mary. (Ib.)

Mary happened to be seen by John. (Ib.)

Palmer は happen のように意味をかえない passivization の場合を voice neutrality と呼び、" 'Voice neutrality' is a characteristic of the 'subject complementation' catenatives, which are almost 'pseudo-modal'." (p. 99), 即ち happen や seem は擬似法助動詞 (pseudo-modal) であるということである。

- 9 Fillmore (1968) では agent は animate となっているが、生物の動作主でも、一般的な場合の (1) に対する (2) や、動物の場合の (3) に対する (4) は受動化は可能なようであるが、informants によれば (4) はあまり使われないうことである。

(1) Everybody began to read the book.

- (2) The book began to be read by everybody.
 (3) A big snake began to climb the tree.
 (4) The tree began to be climbed by a big snake.

begin は、後続の動詞が(+volitive)の場合、後続動詞の行為、状態のはじめの一点を主語が意識することにより、行為が行われると考えるので、個人の意識にあまり関係のない一般人称や動物のような生物の場合には、受動化が成立するのではないかと考える。

- 10 談話指向 (discourse oriented) の modal aux である shall, may 等の場合は passivization が可能である。
 John shall meet Mary. (Palmer)
 Mary shall be met by John. (Ib.)
 John may meet Mary. (Ib.)
 Mary may be met by John. (Ib.)
- 11 Anderson(1968)によると、この hear の意味は 'The judge will hear the case next week'. の場合のような 'listen to in order to judge' というよりも 'sense by the ear' という意味に解している。

References

- Anderson, T. R. (1968) "On the Transparency of Begin: Some Uses of Semantic Theory" *Foundation of Language* 4 394 - 421
- Bresnan, J. (1978) "A Realistic Transformational Grammar" *Linguistic Theory and Psychological Reality*, Halle, M., Bresnan, J. and Miller, G. A.(eds) M. I. T. Press 1 - 59
- Curme, G. O. (1965) *Syntax* Tokyo, Maruzen
- Fillmore, C. J. (1968) "The Case for Case" *Universals in Linguistic Theory*, Bach, E. and Harms, R. T. (eds) 1 - 88
- García, E. C. (1967) "Auxiliaries and the Criterion of Simplicity" *Language* 43 853 - 870
- Huddleston, R. (1976) *An Introduction to English Transformational Syntax*, London, Longman
- Jespersen, O. (1961) *A Modern English Grammar* V, London, G. Allen & Unwin
- 梶田 優 (1974) 「英文法論 II」東京、大修館
- 小西友七 (1980) 「英語基本動詞辞典」東京、研究社

- Langendoen, D. T. (1969) *The Study of Syntax*, New York, Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- 中島文雄 (1982) 「英語の構造 上」東京, 岩波
- Newmeyer, F. J. (1969) "The Underlying Structure of The Begin-class Verbs", *Chicago Linguistic Society Papers from the Fifth Regional Meeting*, 199-204
- Palmer, F. R. (1974) *The English Verb*, London, Longman
- Perlmutter, D. M. (1970) "The Two Verbs Begin" *Readings in English Transformational Grammar*, Jacobs and Rosenbaum (eds), Tokyo, Kanto Books Co., Ltd.
- Ross, J. R. (1970) "More on Begin" *Foundation of Language* 8 574-577

幼児・学童期における

安全能力に関する一考察

— その 2 —

A Study on Infants' and School Children's Safety Ability

杉 江 つ ま

原 田 寿 子 (立正大学短大)

—はじめに—

幼児および学童期は人間の一生の中でも、心身の著しい発達をとげる時期であり、将来彼らが成人として健康で安全な豊かな生活設計をめざすための基礎作りの時期であるといえる。発達途上にあるこれらの時期は、身体の諸機能が未成熟であるために、自らの力で生命を維持することは困難であり、とりわけ事故に対しては無防備同然である。

近年わが国において医学の著しい進歩や、高度経済成長などによって、幼児の疾病による死亡率は低下を示している。しかし一方幼児・学童を取巻くさまざまな生活環境は、年々悪化の一途をたどり、社会構造的に危険を生み出す必然的状況にあるといえる。その実態の一端を示す資料として、厚生省の人口動態統計によれば、交通事故をはじめとするいわゆる「不慮の事故」による死亡や負傷件数は、増加傾向にあることが報告されている。

児童憲章(1951. 5. 5 制定)第一項に「すべての児童は、心身共に健やかに生まれ、育てられ、その生活を保障される」と明記されているように、すべての子どもは豊かな健康生活が十分に保障されるべきであり、そのための環境設定がなされるべきである。そして、彼らは未来社会の担い手であり、社会の宝物という認識で養育されるべきものであると考える。しかし今日の社会ほど子どもたちの発達のゆがみが大きな問題となったことは

なく、彼らの生命と身体危機は深刻化している。本来子どもたちは、心身の発達をたゆまず継続し得る可能性を持ち、この時期の子どもの生命や身体への侵害は極めて重要な健康問題である。この時期の子どもの生命ならびに健康維持は、もっぱら養育者の手にゆだねられ、これらの仲介者の教育や健康管理への取り組み方が、子どもたちの健康生活に大きく反映されている。その意味でこの期の健康問題を左右する安全教育が、重要な課題の一つとされている。

安全教育の領域でも安全能力の開発、その向上がポイントであることはいうまでもない。事故を防止するためには、自らの安全を守る能力を高めておくことが必要となる。

安全能力とは生命の尊重ならびに心身の健康状態の維持・増進を基礎にして、生活環境の中で生ずるさまざまな危険を事前に予測し的確な判断のもとに行動するという視点から、発達段階に促した知識や技能の習得をはかるべきである。これらの安全能力は幼稚園および保育所・学校と家庭とが連携して相互の積極的な取り組みの中で達成されるものであり、あらゆる機会を活用し、安全な環境や安全教育を実践し、安全に対する関心をこの時期から喚起することが大切なことである。

たとえ危機に直面しても、自身で身体のメカニズムを知り、いかにしたら克服できるかという認識まで高めていく、つまり生の営みの原動力の中心的役割を果たす大脳の働きを学ぶことが必要となる。

原点に立ちもどり、人間の子どものらしい、真に生き生きとした、たくましく、思う存分遊び遊べる健全な子どもの育成をはかるべきである。そして幼児期から常に安全に対する関心を持たせることが大切であり、そのためには、人間の本性としての動きづくりや、生活のリズムといったものが大切となる。

子どもは本能的に危険を感じずるが、その行動は安全を意識したものではなく、認識行動パターンがある程度とれるようにするためには、日常生活の中での訓練をとおして、自己の行動の安全を理解し、判断し危険に対処していくことのできる実践的能力や、態度を育成することが課題となる。

そのためにはどうしたらよいのか？ という疑問を出発点に昭和58年(1982)より本テーマに取り組んだ。

子どもたちの生活は遊びが生活ともいえるわけで、自然に無理のない形

で日常生活の遊びを主体とした中での安全能力開発が可能か否か？ また体育的指導の中で、どの発達年齢にどのような運動処方子どもにも提供したらその能力助長がなされるのか？など安全能力開発のための今後の研究の一端として役立てて行きたい。

——事故発生のメカニズム——

安全教育の必要性を考えるにあたり、事故とは何か？その発生のメカニズムについて考察してみる必要がある。

自然界の脅威から人間を保護していた時代の科学進歩とは異なり、現代における高度に進んだ科学の進歩および技術は、自然界の生態系のサイクルを無視し、人工的な環境を作り出すことにある程度成功し、今それら文明社会からのつけとして、健康や安全を侵害されている状況である。公害や交通事故などはその好例といえる。便利さを捨て、以前の社会状態にもどすことが良いか否かは別として、危険にみちた現在の状態からの打開が先決であろう。その意味からも事故や災害について考察してみることは大切なことである。

事故、災害のとらえ方については、さまざまである。例えば我国の場合、日本学校安全会の災害給付や、労使関係から生ずる労災補償などの法的規定があり、その他運転者教育に対するもの、教育現場など適応目的によりその表現や範囲に多少のちがいはあることはやむを得ないことである。

一般に事故や災害に対してどのようにとらえられているのであろうか。国語大辞典によれば「事故とは悪い出来事。特に人の意図によらずに起った、正常な活動でそこなわれるような事態」(小学館)とあり、さらに「災害に対しては、異常な自然現象や人為的原因によって人間の社会生活や人命の受ける被害」(広辞苑)とある。また I L O (International Labor Organization) (国際労働機関)は「災害とは突然予期しないで発生した外部のできごとで、負傷、欠陥または不具を結果するもので、産業災害は雇主および使用人の契約関係に由来する災害である」としている。(生活の安全 大修館 P 19)

一方須藤春一氏は「事故とは人間の身体的能力や、人の知能、知識、性格、情緒、モラルのような精神的能力の未熟や過誤に基づいて発生する異常な事態を意味する」とし「災害とは事故がもたらした人的ならびに物的

な損害を意味する」(保健学習序説 P266)と定義づけている。であるから事故の結果、災害に発展することもあるし、そうならないこともあるというわけである。事故も災害も全く非情なものであり、その発生が全く予測していなかったような形で突発的に起こるものであり、結果的には大きな不幸を招くことが多い。事故は大抵の場合種々の要因がからみあって、起こるべくして起こったものであり、決定的な事故の破局に至るまでには、諸要因の時間的経過があるはずである。すなわち偶然や不可抗力によって事故は発生するわけではない。であるから危険の程度が人間のコントロールの能力の範囲内であれば、ある程度安全は確保されるし、その能力の範囲をこえれば事故につながると考えられる。

近年では疫学的方法を適用し、非伝染性疾患や健康、事故災害などの分析にも応用されるようになってきた。その草分け的存在であるゴルドン(Gordon, J. E)は1949年はじめて疫学的手法を用いて事故の疫学について論文を発表した。すなわち伝染病が発生ないし流行をみるのは、宿主(主体)、感染源(要因)、環境のそれぞれの条件が完全に成立した時に、伝染病の発生や流行をみる。とすると発生防止のためには、それぞれの要因に対して対策をたてればよいとする考え方である。事故災害防止のための改善策を疫学的分析により試みようとするものである。

我国では須藤春一氏が疫学的考え方にもとづき、潜在危険論の考え方を発表した。(1969 安全教育の科学)「いっさいの事故は原因あっての結果、すなわち因果律に支配される現象と考え、その原因を潜在危険と名づける」と述べ、潜在危険の分野を心身の状態、環境、人間の行動、服装の4つの類型にまとめ、事故発生までのプロセスを連続的にとらえている。これらの各々の潜在危険が小さく未成熟の場合は、事故には至らないが、それらが段々に成熟し、その結合により次第に事故発生に至るとされている。同氏は潜在危険を未成熟の事故とし、それらの放置に警告を与え、その早期発見および除去は事故を防止する上に重要であると指摘する。同氏の理論は、潜在危険と、事故の関係を明瞭にし、理解しやすいもので、広く利用されている。

豊原恒男氏も指摘するように、我国では、事故発生のメカニズムを考える際に、ともすると人間的原因が重視されすぎ、環境要因が比較の見すごされているきらいがある。事故原因を明確にする場合、即個人の責任問題

に転嫁しやすいのはそのあらわれであり、本当の意味での事故原因分析にはならない。事故を起こした人も問題であるが、事故を起こしやすい状況の分析、つまり環境要因の分析がもっと重要といえる。

こと事故に関する限り人的要因のみを切り離しても意味がない。つまり人の心は環境や彼が受けた教育により大きく左右されるものであり、その観点から今後人と環境と安全教育のシステム化をはかる必要がある。

環境整備がなされるとはいつても大多数の人々に適するであろうと思われる最大公約数的なものであり、そこに安全教育という面が伴わなければ環境の効果は期待できない。

安全教育は生涯通じてなされるべきものであろうが、特に幼児期における早期実施は安全能力開発にとって効果が大きい。安全教育における安全とは安らかで危険のない状態ということであり生活環境の場における障害と人間の行動とのかかわり合の程度により危険の程度が決まってくる。この危険の可能性をいかにとりのぞくかということが安全にかかわってくる。その能力を安全能力と解する須藤氏らは安全能力の要素として次の四項目をあげている。

「身体・運動」「知能・知識」「情緒・性格」「規範・道徳」である。(1969安全教育学) いずれの項目も安全な行動をする上において重要な要因と考えられ、これらの養成のためには、幼稚園・学校・家庭などが一体となり推進されなければその効果は期待できない。

《身体・運動》

身体の形態や機能の開発を意味する。人の行動は、内外の環境状況を感じ器を通して、情報として受容し、それを大脳で知覚し、理解、認識し、それを基盤に情報を判断し運動器に対して適切な指令を下して行動が起こる。これらのことから考えると身体の健康を保持し安全に行動するためには、敏捷性、巧緻性、平衡性などの総合的な力、調整力および握力などの筋力を高めることは重要なことである。各種の感覚を理解し、知覚し身体に知識の形で覚え込ませることが必要となってくる。

また運動機能は日常生活の中からは勿論、体育活動の中にも意図的に行なわれることが望ましい。

《知能・知識》

他の生物と異なり、考えることができるのは人間の特性である。安全な

生活を営む上にも各種の情報を理解し、認識し判断を下すという行動パターンからみても安全能力において大切な要素の1つといえる。それが単に安全のきまりや、行動パターンを理解するのみにとどまらず、行動時において危険を予測し、どのように行動するのが安全なのか考える能力すなわち洞察力を高めることも必要となる。

《情緒・性格》

他の教育分野においても重要な要素であるが、とりわけ安全教育において、安全な行動を生み出すために重要な要素である。子どもらをとりまく教育環境の全てを動員して望ましい性格形成、情緒の安定をはかることが必要となる。

《規範・道徳》

社会のルールを守るという態度を定着させ、他人に対して迷惑をかけないという価値観を育成することが大切であり、それが自・他の安全を守る上で大切な条件となる。

集団遊びなどを通して学ばせることも一方法であろう。

我々の本テーマもこれらの理論におう部分が大であり、その1、その2も安全能力開発の要素である「身体・運動」という項目に着目し、実験を試みた。

——その1の結果——

調査目的は幼児期から学童期にかけての発達年齢のうちどの年齢が安全能力（敏捷性・反射能力テスト実施）が助長されるのか、また運動処方の効果の比較検討を行った。

調査方法

調査期間は昭和57年4月20日～7月20日。

・質問調査について

調査方法は全対象者の父兄に対して、子どもの住居環境、遊びの環境、健康状態の各項目にわたって、調査期間最後に実施した。

・運動処方について

幼稚園、小学校ともに、運動グループと、非運動グループを設定し、2集団間の比較検討を行った。

調査対象

○ 立正大学付属幼稚園			
年 令	運動グループ	非運動グループ	計
3 才	9	14	23
4 才	25	16	41
5 才	37	30	67
6 才	8	0	8
計	79	60	139
○山梨県敷島町立敷島北小学校			
年 令	運動グループ	非運動グループ	計
6 才	25	19	44
7 才	46	33	79
8 才	13	9	22
計	84	61	145

○運動内容について

幼稚園の場合

- ① 2 m間の往復走。20秒間に10回実施した。回数設定理由は、あらかじめ子どもたちに10秒間の往復走を行ない、測定値の平均の80%の負荷を課し10回と定めた。
- ② 2 m間を砂袋を肩からかけて、①と同回数往復走行を行なう。砂袋の重量は300 g、大きさは15cm×18cm、ひもの長さは90cmとした。これは通園時に携帯してくるバッグを想定して作った。
- ③ ①②の運動後なわとびを自由に10分間実施する。毎回登園直後に実施した。

小学校の場合

- ① 4 m間の往復走を実施した。回数は設定せず、20秒間できるだけ早く行わせた。
- ② 4 m間を通学用のカバンをかけて負荷をかけて往復走を実施した。毎日登校直後一斉に実施させた。

身体反応テストについて

調査開始時と、2ヶ月後の調査終了時に運動グループ、非運動グループの2集団全員に対して、光、音による身体反応テストを測定した。幼稚園、小学校ともに同方法で実施した。

今回継続校の敷島北小の6歳～8歳までのアンケート調査の結果である。

山梨県下ということもあり住宅環境はその大半が一戸建住宅に生活をし、比較的恵まれた環境である。余裕のある生活空間での成長であるが、しかしこの環境下でも自宅内遊びが多く、戸外遊びの時間も平均して2時間足らずである。これに付随してテレビの視聴時間が長くなってきている傾向にある。今回の調査では2.5～3時間位が平均的である。

筑波大の細川・松井両氏の実施した生活時間調査によると子どもたちが眠りにつく時間が午後9時台が最も多く49%、午後8時台が30%、午後10時以降に寝るケースが21%もあり、「夜型」が幼児の世界にも増加していると指摘し、子どもたちの生活のリズムが乱れ、いわゆる朝から疲れている子どもの増加がみられると報告している。

今回のアンケート調査にもあらわれているように、遊ばない子、夜型のテレビっ子という問題がある子どもの現象が多くなってきていることが伺える。

子どもらしい生活習慣を形成し、生活に実践できる子どもの育成が改めて必要になってきていることを痛感する。

また事故傾向児のチェックを実施したが、事故傾向を示す子どもが約30%近くもあり、情緒面、性格面での安定が安全に対する身体的能力と合わせ重要なポイントであることを物語っている。

表は身体反応テスト時間と年齢との関係のみたものである。

結果的には運動機能の助長されるであろうと思われる年齢は幼稚園後半から8歳位までであった。先回はそれ以後の年齢の実験データがなく今回の調査では前回有意であるとみられた年齢を含め、小学校全体で安全能力の特に運動機能面の反射時間についての傾向を把握するために調査を実施した。

身体反応テスト時間と年令との関係
 <立正幼稚園>

年令区分	運動グループ			有意水準			非運動グループ			有意水準					
	N	平均	tの値	5%	1%	N	平均	tの値	5%	1%	N	平均	tの値	5%	1%
光	(3-0)~(3-11)	9	1.133	0.929	なし	なし	14	1.044	0.964	なし	なし	1.044	0.964	なし	なし
	(4-0)~(4-11)	25	0.779	0.269	なし	なし	16	0.936	0.105	なし	なし	0.936	0.105	なし	なし
	(5-0)~(5-11)	37	0.646	0.478	なし	なし	30	0.723	0.147	なし	なし	0.723	0.147	なし	なし
	(6-0)~(6-11)	8	0.498	0.430	なし	なし									
音	(3-0)~(3-11)	9	0.863	1.098	なし	なし	14	1.096	0.294			1.096	0.294		
	(4-0)~(4-11)	25	0.863	1.820	なし	なし	16	1.031	1.645			1.031	1.645		
	(5-0)~(5-11)	37	0.732	1.613	なし	なし	30	0.877	2.057			0.877	2.057	有意	有意
	(6-0)~(6-11)	8	0.762	11.80	なし	なし									

<敷島小学校>

年令区分	運動グループ			有意水準			非運動グループ			有意水準					
	N	平均	tの値	5%	1%	N	平均	tの値	5%	1%	N	平均	tの値	5%	1%
光	(6-0)~(6-11)	25	0.583	0.136	なし	なし	19	0.597	1.192	なし	なし	0.597	1.192	なし	なし
	(7-0)~(7-11)	46	0.564	0.331	なし	なし	33	0.555	1.323	なし	なし	0.555	1.323	なし	なし
	(8-0)~(8-11)	13	0.526	1.063	なし	なし	9	0.489	1.155	なし	なし	0.489	1.155	なし	なし
音	(6-0)~(6-11)	28	0.747	3.646	有意	有意	19	0.639	2.372	有意	有意	0.639	2.372	有意	有意
	(7-0)~(7-11)	45	0.643	4.652	有意	有意	34	0.631	1.457	なし	なし	0.631	1.457	なし	なし
	(8-0)~(8-11)	13	0.597	2.317	有意	有意	9	0.555	3.423	有意	有意	0.555	3.423	有意	有意

質 問 調 査 結 果
 < 敷 島 北 小 学 >

質問項目 年令性別	住居の環境 (%)										子供の遊びの環境 (%)										③家庭にはどんな遊具があるか (%)										
	①子どもはいつも誰と遊んでいるか (%)										②遊ぶ場所はどこか (%)																				
	農 村 地 域	商 業 地 域	住 宅 地 域	1 戸 建 宅	集 団 住 宅	其 他	兄 弟	同 年 親	母 親	長 兄	祖 父	祖 母	兄 弟	自 宅 内	自 宅	庭 家	公 園	空 地	其 他	ア ラ ン コ	砂 場	オ ス ベ リ	三 自 輪 車	鉄 棒	な わ と び	ゴ ル フ	バ ド ミ ン ト	野 球			
6才	♂	13	8	0.5	13	0	0.26	5.11	0	0.2	0	0.5	1	0	0.2	1	2	1	0	0.8	1	0	0	2	3	1	3	0	2		
	♀	28	12	0	16	27	1	0.13	32	0	1	2	1	0	0.4	1	3	0	0	0	1	4	0	0	3	3	7	10	3	0	
	total	41	20	0.5	29	3.6	0.26	5.63	0	0.2	0.4	1.1	2.0	0	0.44	1.1	3.3	0	0	0.11	1.8	0	0	6.7	17.8	15.5	22.2	6.7	0	0	
7才	♂	42	14	1	27	41	0	1	12	36	0	8	1	1	0	6	12	9	16	0	0.33	4	0	1	7	10	11	18	7	11	
	♀	40	19	1	20	38	0	2	16	28	1	0	6	4	0	12	29	11	9	0	0.9	6	0	1	3	5	10	17	2	0	
	total	82	33	2	47	79	0	3	28	64	1	8	7	5	0	18	41	20	25	0	0.32	10	0	2	10	25	21	35	9	11	
8才	♂	12	6	0	6	12	0	0	3	12	0	2	0	1	0	2	1	2	3	0	0.12	1	0	0	3	3	1	11	4	2	
	♀	10	7	0	3	10	0	0	1	9	0	0	1	0	0	5	5	1	0	0	0.4	2	0	1	1	3	3	5	3	0	
	total	22	13	0	9	22	0	0	4	21	0	2	1	1	0	7	6	7	4	0	0.16	3	0	1	4	6	4	16	7	2	
			48.9%	0.51	297.6	2.4	0.26	5.63	0	0.4	2.9	2.9	0.26	1.8	7.2	1.7	4.3	0	0.39	1.7	8	0	0.7	8.17	21.2	52.0	3.4	7	3.1		
			50.0%	0.50	0.100	0	0.16	7.667	0.11	1	0.55	0.10	5.0	10.0	0.15	0	0	0	0	0	0.69	3.6	0	0.10	7.10	7.3	6.39	31.4	3	7.1	
			70.0%	0.30	0.100	0	0.9	18.8	0	0.9	1	0	0	25	25	5.0	0	0	0	0.20	7.7	0	3.8	3.8	11.5	51.1	51.9	21.1	5	0	
			59.1%	0.40	0.9	100	0	0.13	8.72	4	0.6	9	3.4	3.4	0.17	5.15	0.17	5.10	0	0	4.0	5.6	0	1.8	7.4	11.1	7.4	29.6	13.0	3.7	

調 査 対 象 者

学校名		山梨県敷島町立 敷島北小学校 (運動グループ)	山梨県竜王町立 竜王北小学校 (非運動グループ)	計
学 年				
1 年	男	33人	34人	67人
	女	44	34	78
2	男	34	38	72
	女	33	43	76
3	男	41	52	93
	女	50	50	100
4	男	45	45	90
	女	38	44	82
5	男	48	41	89
	女	39	50	89
6	男	40	39	79
	女	41	46	87
計		486	516	1,002

—調査方法—

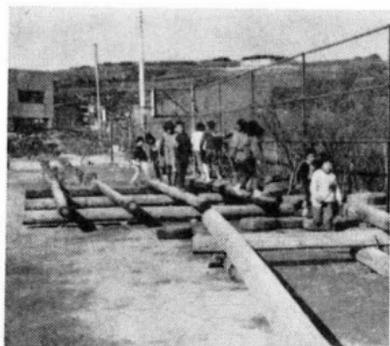
調査期間は昭和57年10月～昭和58年3月

○運動処方について

上記の期間敷島北小学校(運動実施グループ)には運動のプログラムを提供し、実施した。一方竜王北小には非運動グループとして依頼し、調査初回と終了時に反応テストを実施し、その間プログラムされた運動は実施しなかった。この両校における反応時間の比較を中心に検討を行った。

○運動内容

敷島北小学校については、トレーニング期間中、先生方に安全機能増強のための運動計画実施案をプリントして配布した。期間中、各クラス担任の先生方を中心に指導していただいて実施した。実施時間は休み時間、放課後を原則として利用した。



安全機能増強のための運動計画実施案

敷島北小学校

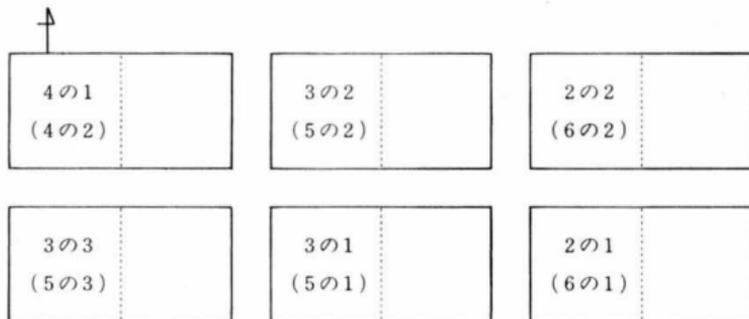
■実施時間帯

	負 荷 の 種 類			
	な わ と び	ドッチボール	ボールまわり	アスレチック渡り
A グ ル ー プ	週3回以上適宜に。 200回 ●雨天の時 屋体でボールまわり (前出)	/	/	毎日、中休み
B グ ル ー プ	/	週3回、月水金の 朝の遊びの時間 〔 2の1・2 3の1・2・3 4の1 〕	毎日放課後、適宜に 1回実施 ●雨天の時、屋体でボールま わり2回	
C グ ル ー プ	/	週3回、火木土の 朝の遊びの時間 〔 5の1・2・3 6の1・2 4の2 〕	毎日放課後、適宜に 2回実施 ●雨天の時、屋体でボールま わり2回	

■実施上の注意

- ・アスレチックについては、ぬれている場合は、特に注意する。
この場合、実施時間の変更も担任の判断で行う。
- ・B・Cグループについて、渡る速度は、個人の能力や慣れを考慮しながら、段階的に増すようにしてほしい。
- ・ドッチボール実施については、場所を優先的に提供してほしい。
- ・放課後実施のB・Cグループについては、バス通学の児童の時間的な配慮をしてほしい。

■ドッチボールコートでの固定設置(6面)



・身体反応テストについて

調査開始時（S 57.10）と終了時（S 58.3）に敷島北小（運動実施グループ）、竜王北小（非運動グループ）の両集団全員に対して光、音刺激による身体反応テストを実施した。

——結果と考察——

表1は調査対象者の身体発達の傾向を把握するために身体計測結果を示したものである。両校とも全国平均と比較してみてもほぼ標準的な発育状況にある。須藤氏の指摘するように、いかなる形態が安全生活のために必要であるかの点については、今だに未解決の状態である。形態の発育は機能発達を伴なうということが大切な要素であり、この関連からも今後の研究テーマである。

①運動内容について

敷島北小の実施した内容を検討してみる。6ヶ月間の比較的長期間に渡る継続的なトレーニングであるために、調査時ばかりではなく、多目的に使用できるミニアスレチックを設定した。トレーニング期間の終了した現在でも子どもたちの格好の遊び場として残っている。子どもたちの能力に合わせ、渡る時間速度は示さず、歩いてとか走ってとかいう表現で指示した。であるからクラスの傾向がかなり出たように考えられる。しかし遊びの延長という考え方で主に平衡性、巧緻性を目的した種目である。

ボールまわりはスタートとゴールラインを明確にわけ、運動中の衝突などの事故が起こらないように配慮した。敏捷性を主体としたものである。

その他ドッジボールを中心とするボールゲーム、なわとびなどは調整力その他精神的なもの、例えばルールを守るなどを期して運動能力ならびに体力増進を意図したものである。いずれも子どもにとって興味のない運動の押しつけであったり、強制にならないように配慮した。楽しくかつ自然な遊びの中に運動機能をのばすことを求めることは勿論であるが、体育活動においては、実態をふまえ目的を持った系統的指導が安全能力を高めることはいうまでもないことである。

特にドッジボール、サッカーゲーム、鬼ごっこ形式の集団あそびは、多くの場合に多数な動きが含まれ、人や物の動きにより素早く判断した上での行動が要求され、協応性や調整力の向上ものぞまれ、安全教育において、

表 1 発 育 統 計

学 年	項 目		男			女		
			敷島小	全 国	竜王小	敷島小	全 国	竜王小
1	身 長	cm	117.3	115.9	115.8	114.6	115.1	114.8
	体 重	kg	21.1	20.9	21.1	20.4	20.4	20.1
	胸 囲	cm	57.7	57.6	58.3	55.7	56.1	56.0
	座 高	cm	65.7	65.0	65.0	64.6	64.4	64.8
2	身 長		121.1	121.4	120.7	120.6	120.8	122.4
	体 重		23.1	23.2	23.1	22.5	22.8	23.0
	胸 囲		59.5	59.6	59.7	57.1	58.1	58.3
	座 高		67.3	67.4	67.5	67.1	67.1	67.9
3	身 長		128.8	126.8	128.1	127.6	126.1	126.2
	体 重		26.1	25.9	26.4	26.2	25.4	25.8
	胸 囲		61.1	61.8	62.3	59.4	60.2	60.3
	座 高		70.6	69.8	70.4	69.9	69.4	69.8
4	身 長		133.0	132.1	132.7	133.7	131.9	130.0
	体 重		29.1	29.0	28.5	29.5	28.5	29.3
	胸 囲		64.1	64.2	64.6	62.6	62.7	63.4
	座 高		72.3	72.1	71.6	72.6	71.9	72.4
5	身 長		137.4	137.2	136.9	139.3	138.2	139.0
	体 重		31.8	32.3	32.2	34.6	32.4	33.1
	胸 囲		65.7	66.7	65.7	67.7	66.0	65.7
	座 高		74.6	74.3	73.9	75.7	74.9	75.2
6	身 長		142.7	142.8	142.8	146.0	145.0	141.4
	体 重		35.1	35.9	36.1	38.0	37.3	35.5
	胸 囲		68.2	69.2	69.3	70.5	69.9	66.8
	座 高		76.4	78.6	76.0	79.2	78.2	75.8

適切な教材のように思われる。

また集団遊びの持つ特性は、仲間を意識するということであり、その中からルールを守るなどの精神面での発達が促進されるという一面を持っていることである。

地域にふさわしい伝承遊びなども豊富にとり入れ、オリジナルな遊びを工夫してみることも大切なことであろう。

今回の調査においては、学校全体が子どもたちの安全能力開発のためにという目的を持ち、先生方の協力を得て実施されたものである。特に指導者が共通目的を持ちその指導にあたる場合は好結果が得られるように考えられる。

② 身体反応時間について

対象者全員調査開始時とトレーニング終了後の2回、光・音の視聴覚刺激に対する身体反応テスト測定機で測定した。

光または音を知覚、認識し素早くその場にとび上がり、その反応時間を測定するものである。

◎表2、3は各学年における反応テスト時間の平均を示したものである。

これによると光、音両刺激に対する反応時間は昭和57年10月の開始時より、終了時の結果が短縮化の傾向を示している。これは敷島北小、竜王北小両校に対して共通である。その短縮時間の内容は、運動実施校の敷島小

表2 光刺激に対する身体反応テスト時間平均値

57.10 (トレーニング前)

58.3 (トレーニング後)

敷島北小
(運動グループ)

竜王北小
(非運動グループ)

	性別	第1回目 テスト		第2回目 テスト		第1回目 テスト		第2回目 テスト	
		57.10	58.3	57.10	58.3	57.10	58.3	57.10	58.3
1年	♂	秒		0.496	0.415	秒			
	♀	0.559	0.428	0.496	0.415	0.492		0.466	
2年	♂	0.609	0.466	0.519	0.455	0.659		0.496	
	♀	0.503	0.393	0.493	0.414	0.422	0.402	0.401	0.412
3年	♂	0.566	0.378	0.517	0.409	0.496	0.449	0.458	0.408
	♀	0.345	0.337	0.342	0.337	0.452	0.380	0.405	0.387
4年	♂	0.379	0.355	0.407	0.368	0.440	0.442	0.408	0.414
	♀	0.328	0.310	0.338	0.280	0.402	0.363	0.372	0.358
5年	♂	0.352	0.331	0.364	0.329	0.462	0.389	0.390	0.399
	♀	0.327	0.316	0.336	0.313	0.387	0.381	0.366	0.355
6年	♂	0.349	0.345	0.344	0.318	0.438	0.402	0.421	0.394
	♀	0.327	0.300	0.323	0.304	0.329	0.372	0.324	0.336
		0.346	0.340	0.341	0.329	0.394	0.423	0.357	0.395

表3 音刺激に対する身体反応テスト時間平均値

敷島北小 (運動グループ) 竜王北小 (非運動グループ)

	性別	第1回目 テスト		第2回目 テスト		第1回目 テスト		第2回目 テスト	
		S57.10	58.3	57.10	58.3	57.10	58.3	57.10	58.3
		秒				秒			
1年	♂	0.690	0.463	0.614	0.502	0.515		0.501	
	♀	0.683	0.509	0.645	0.562	0.540		0.559	
2年	♂	0.611	0.442	0.612	0.504	0.466	0.401	0.492	0.453
	♀	0.612	0.438	0.647	0.486	0.511	0.427	0.554	0.473
3年	♂	0.351	0.358	0.394	0.407	0.489	0.400	0.450	0.449
	♀	0.418	0.385	0.451	0.423	0.538	0.427	0.448	0.483
4年	♂	0.327	0.314	0.369	0.363	0.496	0.376	0.434	0.428
	♀	0.344	0.364	0.389	0.417	0.560	0.426	0.472	0.428
5年	♂	0.323	0.331	0.364	0.361	0.387	0.368	0.403	0.385
	♀	0.351	0.346	0.371	0.359	0.452	0.424	0.499	0.444
6年	♂	0.318	0.296	0.350	0.360	0.362	0.353	0.354	0.373
	♀	0.350	0.341	0.381	0.396	0.413	0.423	0.400	0.468

が短縮傾向が大きく、特に1、2年は男女ともに0.1~0.2秒の短縮効果である。一方竜王北小も加齢による短縮はみられるが、その差は0.1秒以下でありわずかである。

図1~4は反応時間の平均値をグラフ化したものである。

◎光、音両刺激間の比較検討

光に対する反応が音のそれよりも速いのは、視覚が聴覚よりも早く知覚されるということで当然の結果である。

両刺激とも屋外の何も遮断する場のない場所での測定と、今回のように体育館にての測定の場合を比較すると屋内測定の方が早いものと推測できる。

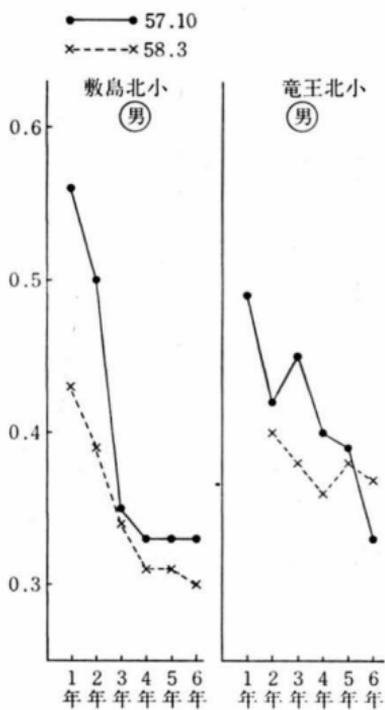
反応テストを実施する際に、同じ刺激に対して、2回ずつのテストを実施した。

その結果は、表に4、5示す通りであり、1回目、2回目との間に大差はみられなかった。

図 1

図 2

⑧ 身体反応テスト平均時間



⑧ 身体反応テスト平均時間

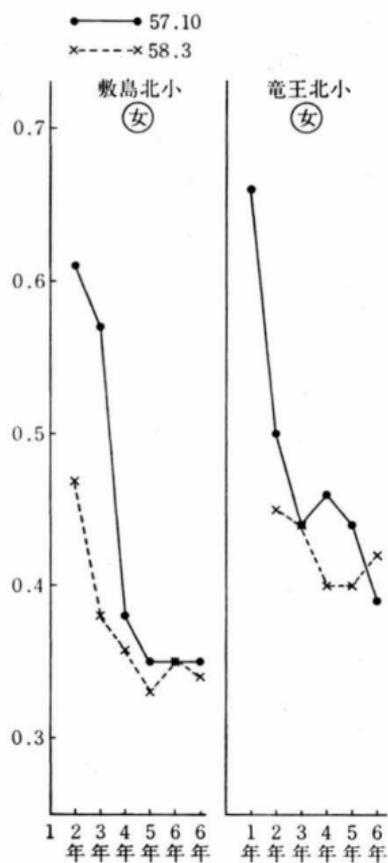
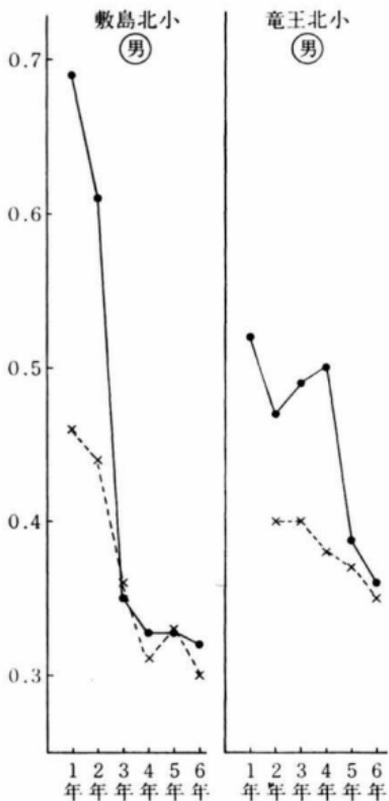


図 3

図 4

③ 身体反応テスト平均時間

●—● 57.10
x---x 58.3



③ 身体反応テスト平均時間

●—● 57.10
x---x 58.3

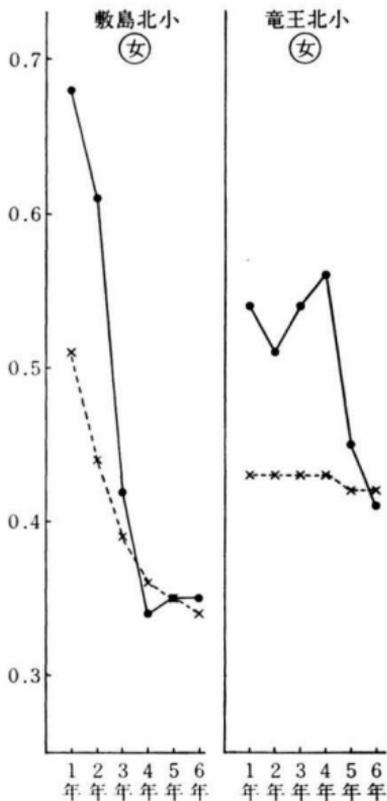


表4 身体反応時間テスト結果(2回目テスト-1回目テスト) (一) 時間短縮
(+) 時間延長
敷島北小(運動グループ)

(1982) S57.10実施

S58.3 実施(1983)

学年	性別	傾向	光	音	音	傾向	性別	学年	性別	傾向	光	音		
1年	♂	+	24.2%	0.093秒	42.4%	0.132	♂	1年 ♂33人 ♀44人	♂	+	45.5%	0.056%	0.117	
	♀	-	75.8	0.115	57.6	0.229	♀		♀	-	54.5	0.069	66.7%	0.071
	♀	-	29.5	0.118	36.4	0.109	♀		♀	-	40.9	0.058	33.3	0.127
2年	♂	+	70.5	0.183	63.6	0.151	♂	2年 ♂34人 ♀33人	♂	+	59.1	0.059	29.5	0.125
	♀	-	47.1	0.103	52.9	0.084	♀		♂	+	52.9	0.082	73.5	0.123
	♀	-	52.9	0.110	47.1	0.094	♀		♀	+	47.1	0.049	26.5	0.107
3年	♂	+	48.5	0.055	57.6	0.128	♂	3年 ♂41人 ♀50人	♂	+	72.7	0.072	66.7	0.096
	♀	-	51.5	0.450	42.4	0.095	♀		♀	-	27.3	0.076	33.3	0.038
	♀	-	53.7	0.031	73.2	0.083	♂		♂	+	46.3	0.056	65.9	0.104
4年	♂	+	46.3	0.043	26.8	0.063	♀	4年 ♂45人 ♀38人	♀	+	53.7	0.049	34.1	0.059
	♀	-	68.0	0.071	64.0	0.115	♀		♀	-	54.0	0.066	66.0	0.103
	♀	-	32.0	0.063	36.0	0.097	♀		♀	-	46.0	0.048	34.0	0.067
5年	♂	+	55.6	0.061	73.3	0.073	♂	5年 ♂48人 ♀39人	♂	+	55.6	0.068	71.1	0.103
	♀	-	44.4	0.053	26.7	0.043	♀		♀	-	44.4	0.060	28.9	0.086
	♀	-	47.4	0.072	68.4	0.096	♀		♀	+	52.6	0.048	68.4	0.093
6年	♂	+	52.6	0.043	31.6	0.062	♂	6年 ♂40人 ♀41人	♂	+	47.4	0.050	31.6	0.107
	♀	-	56.3	0.049	70.8	0.083	♀		♂	+	47.9	0.060	58.3	0.090
	♀	-	43.8	0.039	29.2	0.062	♀		♀	-	52.1	0.060	41.7	0.056
7年	♂	+	41.0	0.038	53.8	0.086	♂	7年 ♂40人 ♀41人	♂	+	33.3	0.049	59.0	0.090
	♀	-	59.0	0.036	46.2	0.055	♀		♀	-	66.7	0.066	41.0	0.085
	♀	-	52.5	0.035	72.5	0.066	♂		♂	+	55.0	0.051	77.5	0.096
8年	♂	+	47.5	0.048	27.5	0.056	♀	8年 ♂40人 ♀41人	♂	+	45.0	0.053	22.5	0.043
	♀	-	46.3	0.034	63.3	0.076	♀		♀	+	48.8	0.048	60.5	0.063
	♀	-	53.7	0.037	31.7	0.070	♀		♀	-	51.2	0.069	19.5	0.050

(一) 時間短縮
(+) 時間延長

表5 身体反応時間テスト結果

竜王町立北小(非運動グループ)

S 58.3 実施

S 57.10 実施

学年	性別	傾向	光	音	学年	性別	傾向	光	音
1年	♂	+	44.1%	55.9%	2年	♂	+	50.0%	75.0%
	♀	-	0.103	44.1		♂	-	50.0	0.034
	♀	+	0.069	58.8		♀	+	32.4	0.056
		-	58.8	41.2			-	67.4	0.088
2年	♂	+	47.4	73.7	3年	♂	+	46.2	74.4
	♀	-	0.055	26.3		♂	-	53.8	0.051
	♀	+	0.071	72.1		♀	+	36.2	0.048
		-	27.9	0.103			-	63.8	0.071
		+	72.1	27.9			+	46.2	0.076
3年	♂	+	25.0	46.2	4年	♂	+	47.1	78.4
	♀	-	0.077	53.8		♂	-	52.9	0.054
	♀	+	0.088	40.0		♀	+	56.0	0.058
		-	28.0	0.075			-	44.0	0.050
		+	72.0	60.0			+	47.1	0.049
4年	♂	+	20.0	31.1	5年	♂	+	29.5	63.6
	♀	-	0.085	68.9		♂	-	70.5	0.053
	♀	+	0.060	40.9		♀	+	39.6	0.051
		-	20.5	0.075			-	60.4	0.043
		+	79.5	59.1			+	29.5	0.038
5年	♂	+	36.6	61.0	6年	♂	+	30.2	65.1
	♀	-	0.047	39.0		♂	-	69.8	0.044
	♀	+	0.059	72.0		♀	+	34.7	0.034
		-	68.0	0.106			-	65.3	0.061
		+	68.0	28.0			+	30.2	0.050
6年	♂	+	53.8	32.6	7年	♂	+	65.3	71.4
	♀	-	0.045	67.4		♂	-	34.9	0.054
	♀	+	0.056	37.0		♀	+	71.4	0.082
		-	46.2	0.096			-	28.6	0.072
		+	53.8	63.0			+	65.1	0.060

(光) 表6 身体反応時間テスト結果 (S 57.10 実施) (男)
 敷島北小 (運動グループ) 竜王北小 (非運動グループ)

学 年	1年		2年		3年		4年		5年		6年																	
	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%																
反応 時間 (秒)	学 年																											
0.1	反応 時間 (秒)																											
0.2	1	3.0	1	2.9	1	2.2	1	2.2	1	2.9	4.10.5	1	2.2															
0.3	3	8.2	56.1	0.27	60.0	30.62	5.24	60.0	5.14	7.10	26.3	15.28	8.19	42.2	24.58	5.22	56.4											
0.4	12	36.4	15	44.1	7	17.1	5	11.1	3	6.2	3	7.5	0.4	13	38.2	18	47.4	22	42.3	19	42.2	8	19.5	4	10.3			
0.5	11	33.3	11	32.3	1	2.1	0.5	10	29.4	5	13.2	10	19.2	4	8.9	3	7.3	1	2.5	4	11.8	2	3.8	1	2.4			
0.6	4	12.1	3	8.8	0.7	2.1	0.6	4	11.8	2	3.8	1	2.9	1	2.9	1	2.6	1	1.9	1	2.9	1	2.6	1	1.9			
0.7	3	9.1	1	3.0	0.8	2.4	0.8	3	9.1	1	3.0	0.9	2.7	1	2.9	1	2.6	1	1.9	0.8	2.3	1	1.9	0.9	2.7			
0.8	1	3.0	1	3.0	1.0	3.0	1.0	1	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0			
0.9	1	3.0	1	2.9	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0		
1.0	33	99.9	34	99.9	84	100.45	100.45	100.48	100.40	100	total	34	99.938	100	52.99	84	59.9	94	199.939	100	34	99.938	100	52.99	84	59.9	94	199.939

(光) S 58.3 実施
 敷島北小 (運動グループ)

学 年	1年		2年		3年		4年		5年		6年						
	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%					
反応 時間 (秒)	学 年																
0.1	反応 時間 (秒)																
0.2	1	3.0	4	11.8	11	26.8	21	46.7	26	54.2	16	47.5					
0.3	14	42.4	15	44.1	24	58.5	14	31.1	15	31.2	18	45.0					
0.4	9	27.2	12	35.3	6	14.6	6	13.3	5	10.4	17	47.2					
0.5	9	27.2	3	8.8	1	2.2	1	2.2	2	2.1	1	2.5					
0.6	0.6	1.8	0.7	2.1	0.7	2.1	0.7	2.1	1	2.1	1	2.1					
0.7	0.7	2.1	0.7	2.1	0.7	2.1	0.7	2.1	0.7	2.1	0.7	2.1					
0.8	0.8	2.4	0.8	2.4	0.8	2.4	0.8	2.4	0.8	2.4	0.8	2.4					
0.9	0.9	2.7	0.9	2.7	0.9	2.7	0.9	2.7	0.9	2.7	0.9	2.7					
1.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0	1.0	3.0					
total	33	99.834	100	41.99	94.5	100.48	100.48	100.40	100	total	36	100.39	100	51.99	94.4	100.43	99.9

竜王北小 (非運動グループ)

(音) 表7 身体反応時間テスト結果 (S57.10 実施) (男)
 敷島北小 (運動グループ) 竜王北小 (非運動グループ)

学 年	1年		2年		3年		4年		5年		6年		学 年	1年		2年		3年		4年		5年		6年		
	反 応 時 間 (秒)	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数		反 応 時 間 (秒)	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%
0.1				2	4.9								0.1													
0.2	1	3.0	1	2.9	614.6	1533.3	31735.4	1537.5					0.2	1	2.9	1	2.6	1	1.9	1	2.2	4	9.7	923.1		
0.3	1	3.0	1	2.9	2663.4	2351.1	2858.3	2050.0					0.3	411.8	1436.8	1223.1	920.0	2765.9	1846.2							
0.4	2	6.1	617.6	512.2	613.3	2423.7	7.5						0.4	1544.1	1539.5	1834.6	1533.3	614.6	1025.6							
0.5	9	27.2	1029.4	2491	2.2	1	2.5						0.5	617.6	37.9	1426.9	1328.9	2491	2.5							
0.6	10	30.3	823.5										0.6	514.7	37.9	4773	6.7									
0.7	2	6.1	411.8										0.7	1	2.9	1	1.9	4	8.9	2	4.9					
0.8	4	12.1	25.9										0.8	2	5.9	1	2.6	2	3.8							
0.9	2	6.1	12.9										0.9			1	2.6									
1.0	2	6.1	12.9										1.0													
total	33	100	3499.8	4100	4599.9	48100	40100	100					total	3499.9	3899.9	95299.9	45100	4100	3999.9	45100	4100	3999.9	45100	4100	3999.9	45100

(音) S 58.3 実施

敷島北小 (運動グループ) 竜王北小 (非運動グループ)

学 年	1年		2年		3年		4年		5年		6年		学 年	1年		2年		3年		4年		5年		6年		
	反 応 時 間 (秒)	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数		反 応 時 間 (秒)	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%
0.1				1	2.4	2	4.4						0.1													
0.2	1	3.0	2	5.9	1024.4	2146.7	2041.6	2152.5					0.2	411.1	923.1	1325.5	511.4	716.3								
0.3	10	30.3	1132.3	1946.3	1533.3	32041.6	1230.0						0.3	1541.7	1435.9	2039.2	2659.1	2660.4								
0.4	12	36.4	141.1	921.9	1511.1	510.4	37.5						0.4	1336.1	1128.2	1223.5	1227.3	920.9								
0.5	15	45.2	38.8	12.4	12.2	12.1	2.5						0.5	38.3	12.5	23.9	12.2									
0.6	4	12.1	38.8	12.4	12.2	24.2							0.6	1	2.8	25.1										
0.7	1	3.0	12.9										0.7			25.1										
0.8													0.8													
0.9													0.9													
1.0													1.0													
total	33	100	3499.8	4100	4599.9	48100	40100	100					total	36	100	3999.9	95199.9	45100	4100	3999.9	45100	4100	3999.9	45100	4100	3999.9

(光) 表8 身体反応時間テスト結果 (S 57. 10 実施) (女)
 竜王北小 (運動グループ) 竜王北小 (非運動グループ)

学年	1年		2年		3年		4年		5年		6年		反応時間 (秒)
	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	
0.1			1	2.0	1	2.6							0.1
0.2	1	2.2	8	16.0	4	10.5	6	15.4	9	21.9			0.2
0.3	2	4.5	22	44.0	25	65.8	28	71.8	25	60.9			0.3
0.4	7	15.9	7	14.4	21	53.6	2	5.1	8	20.5			0.4
0.5	15	34.1	21	42.0	6	15.4	2	5.1	8	20.5			0.5
0.6	6	13.6	1	2.0	2	5.1	2	5.1	2	5.1			0.6
0.7	4	9.1	3	6.0	1	2.6							0.7
0.8	5	11.4	1	2.0	3	7.7							0.8
0.9	3	6.8											0.9
1.0	1	2.2											1.0
total	44	99.9	83	166.8	95	239.9	93	233.1	99.9				total

(光) S 58.3 実施

竜王北小 (運動グループ) 竜王北小 (非運動グループ)

学年	1年		2年		3年		4年		5年		6年		反応時間 (秒)
	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	
0.1			2	6.1	1	2.6							0.1
0.2	3	6.8	9	18.2	11	28.4	9	23.1	7	18.0			0.2
0.3	7	15.9	14	28.4	29	74.8	58	148.4	52	133.1			0.3
0.4	21	47.1	33	66.0	8	20.5	17	43.5	4	10.3			0.4
0.5	10	22.7	1	2.0	3	7.7	4	10.3	2	5.1			0.5
0.6	3	6.8	2	4.0	1	2.6							0.6
0.7	3	6.8	2	4.0	1	2.6							0.7
0.8													0.8
0.9													0.9
1.0													1.0
total	44	99.9	83	166.8	85	218.0	100	256.3	39	99.9	41	100	total

表9 身体反応時間テスト結果 (S 57.10実施) (女)
 竜王北小 (非運動グループ)

学 年	1年		2年		3年		4年		5年		6年	
	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%
反応時間 (秒)	0.1											
	2	4.0	2	5.2	0.1		1 2.2		1 2.2		3 6.5	
	0.2	510.0	821.1	820.5	717.1	0.2	1	2.9	716.3	918.0	511.4	816.0
	0.3	12040.0	1539.5	2461.5	2560.9	0.3	1235.3	1841.8	1326.0	1227.3	3672.0	1328.3
	0.4	511.4	39.1	1428.0	1026.3	717.9	614.6	0.4	1338.2	1023.3	1428.0	1022.7
	0.5	715.9	1030.3	612.0	25.2	24.9	0.5	514.7	369.7	14.0	613.6	36.5
	0.6	920.4	1030.3	12.0	0.6		0.7	25.9	49.3	48.0	49.1	2.0
	0.7	818.2	721.2	12.6		0.8	12.9	12.3	36.0	49.1	2.2	12.0
	0.8	920.4	13.0	24.0	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9
	0.9	24.5	0.9		1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
	36.8	total										
	4499.9	933	10059	1003899.9	3999.9	4199.9	3499.9	94399.9	950	1004499.9	950	10046

(音) S 58.3 実施

竜王北小 (運動グループ)

学 年	1年		2年		3年		4年		5年		6年	
	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%
反応時間 (秒)	0.1											
	1	2.0	1 2.5		0.1		1 2.1		1 2.1		1 2.1	
	0.2	24.5	26.1	1224.0	8	1128.2	1331.7	0.2	12.9	48.5	36.0	24.1
	0.3	715.9	1133.3	32040.0	01921.0	1641.0	2458.5	0.3	1235.3	1327.6	2040.0	1633.3
	0.4	1431.8	1236.4	1122.0	955.0	720.5	37.3	0.4	1544.1	1634.0	1428.0	2041.7
	0.5	1125.0	618.2	510.0	123.7	37.7	0.5	514.7	1225.5	1122.0	612.5	612.2
	0.6	715.9	13.0	12.0	2.6	0.6	0.6	12.9	12.3	36.0	49.1	2.0
	0.7	24.5	13.0	12.6	12.4	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7
	0.8	12.2	0.8		0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8
	0.9	0.9	0.9		1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
	3499.9	833	10050	1003399.9	3999.9	4199.9	3499.9	94799.9	850	1004899.9	9499.9	9499.9
	total	total										

短縮傾向 (+)
延長 "

表10 敷島北小トレーニング前後の反応時間結果

(58.3) トレーニング後— (57.10) トレーニング前

(光)

学年	性別	傾向	第1回目テスト	第2回目テスト	学年	性別	傾向	第1回目テスト	第2回目テスト
1年	♂	+	9.1%	0.222秒	1年	♂	+	15.2%	0.119秒
	♀	-	90.9	0.153		♀	-	84.8	0.289
	♀	+	22.7	0.091		♀	+	15.9	0.067
2年	♂	+	77.3	0.230	2年	♂	+	84.1	0.246
	♀	-	39.4%	60.6		♀	-	75.8	0.180
	♀	+	38.6	0.075		♀	+	36.4	0.071
3年	♂	+	61.4	0.164	3年	♂	+	8.8	0.130
	♀	-	29.4	0.079		♀	-	20.6	0.070
	♀	+	70.6	0.229		♀	+	79.4	0.256
4年	♂	+	6.1	0.085	4年	♂	+	6.1	0.074
	♀	-	93.9	0.120		♀	-	18.2	0.116
	♀	+	34.0	0.103		♀	+	81.8	0.225
5年	♂	+	36.6	0.052	5年	♂	+	58.5	0.163
	♀	-	63.4	0.073		♀	-	46.3	0.082
	♀	+	34.0	0.103		♀	+	53.7	0.083
6年	♂	+	66.0	0.090	6年	♂	+	28.0	0.084
	♀	-	34.1	0.238		♀	-	42.0	0.084
	♀	+	70.0	0.050		♀	+	58.0	0.113
7年	♂	+	33.3	0.079	7年	♂	+	72.0	0.090
	♀	-	66.7	0.067		♀	-	44.4	0.064
	♀	+	34.2	0.034		♀	+	55.6	0.094
8年	♂	+	71.1	0.073	8年	♂	+	39.5	0.104
	♀	-	65.8	0.064		♀	-	39.5	0.085
	♀	+	33.3	0.079		♀	+	60.5	0.049
9年	♂	+	33.3	0.080	9年	♂	+	35.6	0.093
	♀	-	66.7	0.057		♀	-	44.4	0.064
	♀	+	51.3	0.076		♀	+	55.6	0.094
10年	♂	+	43.7	0.088	10年	♂	+	46.2	0.079
	♀	-	64.1	0.074		♀	-	48.7	0.079
	♀	+	45.0	0.035		♀	+	51.3	0.088
11年	♂	+	25.0	0.044	11年	♂	+	30.0	0.092
	♀	-	75.0	0.051		♀	-	47.5	0.089
	♀	+	43.9	0.076		♀	+	52.5	0.067
12年	♂	+	56.1	0.060	12年	♂	+	31.7	0.079
	♀	-	63.4	0.042		♀	-	61.0	0.056
	♀	+	68.3	0.059		♀	+	39.0	0.075

前回の幼稚園児のテストとは異なり、テスト方法に対しての理解力が最初から備わり、2回目のテストに著しい短縮傾向は認められない。結果は、短縮傾向、延長傾向半々ということである。

◎身体反応テスト時間の分布

表6～7は身体反応テスト時間の各学年による分布を示したものである。

光刺激に対する敷島北小男子の場合をみると、全学科ともトレーニング後（S58.3）の測定において短縮傾向が認められる。特に小1～2年のその傾向は大きい。例えば小1の場合 S57.10時には測定時間秒の間にバラツキがみられたものが、S58.3には0.3秒を中心に0.2～0.5秒間に分布域が移行していることをみても理解出来る。

音に関する場合も光刺激と同傾向がみられ、男女とも1～2年生の年齢区分に時間短縮が認められる。

竜王北小の非運動校の場合も全体に短縮傾向はみられる。しかしそれは加齢によるものである。

前回の調査の場合に安全能力要素として、運動機能の向上が最も期待できる年齢は6歳～8歳位までではないかという結果が出たが、今回の追調査をふまえてみても同結果が得られたということである。

◎反応テスト時間短縮者をさらに検討

表10はトレーニング前（S 57.10）とトレーニング後（S58.3）の反応時間の短縮または延長の傾向をあらわしたものである。

光、音両刺激ともに、短縮傾向が明らかである。光刺激に関してみると、小1～2年の低学年は男女とも77～93.9%の者が時間短縮傾向を示している。その後の年齢別変化をみるとその傾向は5分5分ということが言える。

音刺激に対しても、ほぼ同傾向が得られる。

図5～8は表10をグラフ化したものである。このように今回の調査においては、トレーニング実施校（敷島北小）に運動効果が認められたと言える。

特に小1～2年生（6～8歳）という年齢は体格や神経系の発達と共に、知的理解度が高まり、身体運動もスムーズになり、安全に対する能力および態度もチャンスがあれば、そこを起点に強化されていくものと推測され

図 5

光刺激に対するトレーニング前後の比較

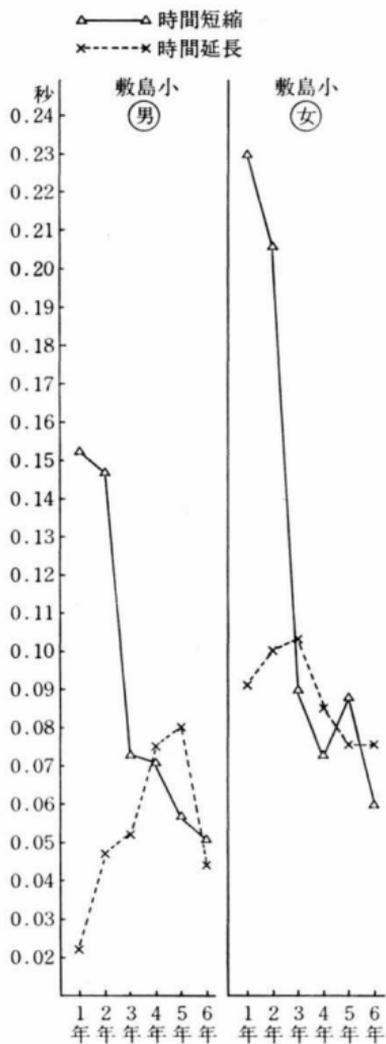


図 6

光刺激に対するトレーニング前後比較

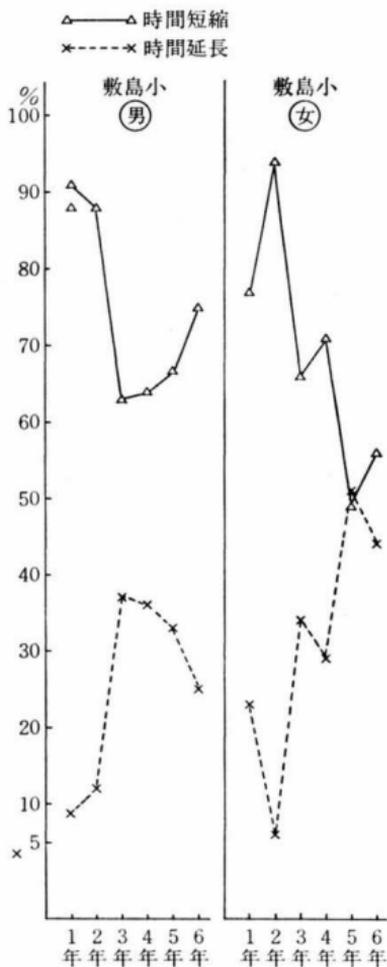


図 7

音刺激に対するトレーニング前後の比較

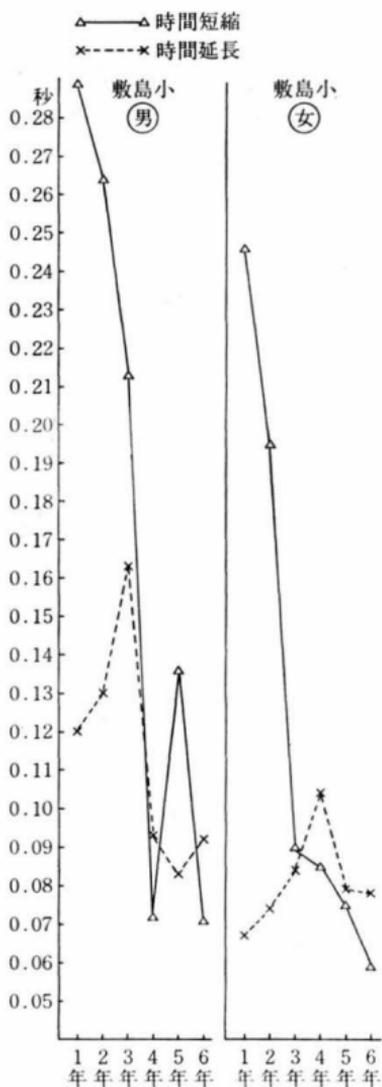
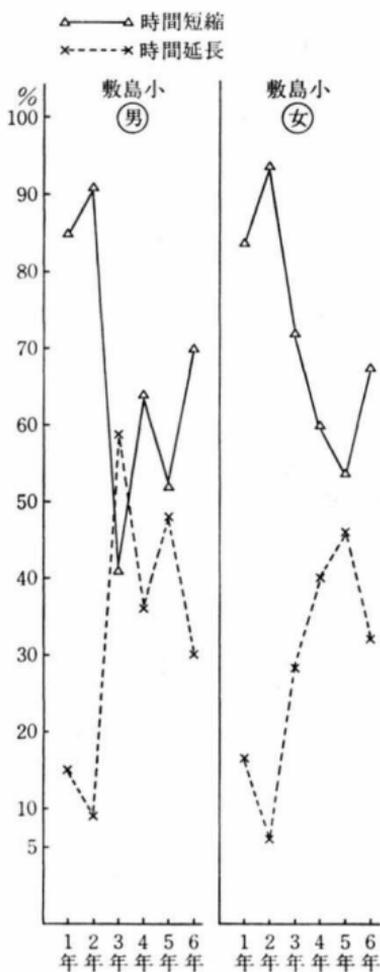


図 8

音刺激に対するトレーニング前後の比較



る。このテストの結果と発達年齢との関係は、前回の調査で小1～2年が特に運動機能の開発の芽ばえがあるという結果が出たが、今回の調査においても同様の結果である。

限られた運動内容と、一部分のテスト結果であるから断定はできないが、少なくとも小1～2年生の発達年齢は安全能力の開発の可能性を持った年代と言える。今後とも多角的な研究を進めて行きたい。

—まとめ—

子どもたちの健康生活を確立し、健康を維持・増進していくことは、養育者に課せられた義務である。

発達途上にある子どもたちにとって、不慮の事故による生命および身体に傷害を受けることは大きなマイナスである。

養育者は、家庭や学校などの子どもの生活環境を整備し、事故防止に対して万全の策を講ずるべきであるし、けがをしない子、しにくい子どもに育てることが大切なことである。

不慮の事故を防止するためには、子どもたちの場合、事故が発生しやすい運動遊び、通学時などの行動時の心身の機能について科学的に究明することが必要である。

感覚機能や運動機能のような身体機能は、精神機能と同様に環境や主体の要因をうけやすい。その意味においても、須藤氏の説く潜在危険の考え方は、未成熟の事故と事故との関係が明確になり、環境とのかかわりあいの中で生活する我々にとって、事故防止の対策がたてやすくなっていることは確かである。潜在危険になりうる要素の回避ないし、除去を考えることは、事故防止につながりうる。先回、今回と安全能力の調査を実施するにあたり、事故とは何か、その発生のメカニズムを知ることで安全能力の要素を細かく追求できるのではないかと考え、改めて本論文で考えをまとめてみた。

今回の調査では先回に引き続き体育指導面での運動あそびの中における安全能力開発及びその向上にむけて実施した。敏捷性、平衡性、調整力という一部の運動機能の要素に対して検討を試み、結果的に運動実施校が効果を示した。全体的なレベルアップをはかると同時に、個々の運動機能、知覚機能などの開発、向上をねらうべきであり、その意味で安全能力開発

のためのプログラムとして提供する運動内容は、多角的に研究すべき余地を残している。

そして前回に引き続き実施した調査によれば小1～2年生(歳6～8歳)に関して反応時間結果は著しい短縮を示し、安全能力開発の運動機能という面からみて、一番効率のよい年齢といえる。

この年齢に対し、今回の調査は環境要因を考慮し、日常生活で身につけているカバン、その他雨天時を想定して傘、カッパ、長ぐつ等を着用させ調査を行ってみる予定である。また生活の中で色彩とのかかわり合も深く、安全との関連を含めて検討してみたいと考えている。

本調査に際して、心よく御協力いただきました敷島北小、竜王北小両校の校長先生をはじめとし、諸先生方に感謝致したいと思います。

付 記

本調査は杉江と原田によって行われたもので、この内容については共同で責任を負うものであるが、本文の内容は双方の討議により、杉江が執筆した。

参考文献

- ① 安全保育と事故事例 成田他編 中央法規出版 1980
- ② 生活の安全 前田・詫間編 大修館 1974
- ③ 保健学習序説 須藤春一 杏林書院 1979
- ④ 子どもの安全白書 伊藤他編 総合労働研究所 1980
- ⑤ 国民衛生の動向 厚生省統計協会 1980
- ⑥ 体力テスト百科 ぎょうせい 小野三嗣監修 1980
- ⑦ 新しい安全教育 吉田・三枝著 教育出版 1973
- ⑧ 幼児の健康 細川編 共栄出版 1982
- ⑨ 事故の視角 柳田邦男著 文芸春秋 1978
- ⑩ 視覚の心理学 鳥居修晃著 サイエンス社 1982
- ⑪ 災害心理学序説 安倍北夫著 サイエンス社 1982
- ⑫ 安全性の考え方 武谷三男編 岩波新書 1967
- ⑬ サイコロジーNo.3 サイエンス社 1980
- ⑭ 幼児の安全能力に関する一考察 —その1— 原田, 杉江 立正大学短期大学部紀要No.12

幸田露伴の文学と仏教

石川 教 張

はじめに

幸田露伴（一八六七—一九四七）における文学の特質は、世俗の虚飾に埋没することなく、芸術美の実現に向専念する人間の強烈な意志を描き、同時に脱俗的な（風流）の世界の機微と悟達を追求する空無の精神を形象したところにある。

このことは、露伴が日本の近代化過程にもなって生起していた人間の自己至上主義の時代思潮と対峙し、近代的自我を人間の内なる我執として認識していたこと、また、大悟につらなる真風流の精神を体現することによって自立した個の形成をめざしたことを意味している。

こうした露伴文学に貫流し、その基底となっていたものは、東洋の思想とりわけ儒教・道教・神仙思想そして仏教の精神であった。露伴は、文芸・思想・歴史から趣味の事がらにいたる一切の事象に対する該博な知識と幅広い関心にもとづき、それらを『因縁の糸の牽くに任せて』⁽¹⁾総合的に連環させながら省察と論評を試みている。特に東洋の宗教

精神と文学空間とを『法縁微妙、玉環の相連⁽²⁾る』がごとくに融合連環させることによって、脱俗的な人間の意志と悟達の世界に住する志想を作品に具象した点は、露伴文学の骨格を形成する注目すべき特徴と云えよう。

この小文では、東洋の宗教精神のうち、主として仏教と露伴文学との連環に言及し、露伴がいかなる信仰観にもとづいて仏教を素材として取り上げ仏教の内容を論評しつつ、作品世界に仏教をどのように結晶させているのかを考察しようとするものである。

露伴の信仰観

東洋の宗教思想を基盤ないし背景とする露伴文学の特質を理解する問題視角に立って、まず露伴の抱懐していた信仰観あるいは宗教観ともいうべきものに関して一考しておきたいと思う。

大正二年四月に発表した『信仰と我執⁽³⁾』のなかで、露伴は次のように述べている。

信仰とは、自ら信ずることを言ふに非ずして、信ぜしめられているものを云ふだと考へてゐる。私の信仰に対する告白は、既に此の一言に尽きてゐる。⁽⁴⁾

露伴によれば、『我』から出発した信仰は「我執」であり、現世・来世の区別をたてず「我」から離れ判釈をとり去り「全心全容の形」で信ぜしめられている時に、大なる信仰に接した心境になりえる、と云う。すなわち、真の信仰に没入できないのは、「我執」という自己中心の計量による妄想煩惱への執着が存在するためであると指摘し、『我』を信仰の海の中に、氷の如く結んで行く人は、所謂信者で、『我』を溶かして此の大海に包容されて行く人は真の信者である」と主張することによって、我執を離れて信仰の大海に包容される真の信仰のありようを示すのであ

る。

これは、我に執着する人間の自己否定を通して、「假令如何なる智識の進歩を見『生きる為』の教の動搖を来したりとも決して些の変動を見ざる大なるもの」を信仰せしめられることを明らかにしたものである。この「大なるもの」とは、「宗教はいつも其の奥の奥に円融無礙の妙諦を有してゐる」と指摘した宗教の広大な包容性と連環性の具備した世界をさしている。それは、露伴が宗教の本質を新しき生命と限りなき生命を得る点にあると認識していたからである。⁽⁷⁾

この認識に関して、露伴は『仙書參同契』の一節で次のように述べている。

宗教若くは宗教類型のもの成立の秘奥微密のところを探れば、其様相の差異はあるが、いずれも有限の人間の生命の中に於て無限の自然の生命を体得した大讚歎が其根基となり源泉となつてゐることを見出すことを語るであらう。そして其宗徒の中の卓越せる者は、同じ修煉信行によつて、同じ境地に達し、同じ靈驗を得、従つて其教の遠大を致すに至るものであることを語るであらう。⁽⁸⁾

この言葉には、露伴の到達した宗教観が集約されており、有限と無限、人間と自然、信と行の連環性が提示されている。ここでは、第一に宗教もしくは宗教類型の成立基盤を、「有限の人間の生命の中に於て無限の自然の生命を体得した大讚歎」にあると指摘されている。この認識は、有限の生命と無限の生命とを対立したものとみなすのではなく、有限なる人間が自己の生命の内奥に無限の自然の生命を体得する宗教の本質と源泉を明らかにしたものであり、限りなき自然の生命に包容されることによつて人間の生命の有限性は永遠性に昇華されてゆく秘奥微密の信仰世界をとらえたものである。この自然の限りなき生命が「大なるもの」あるいは「円融無礙の妙諦」と称した新しい永遠の

生命を有限の人間に付与する自然の根源的な力なのである。

これは、我執にみちた俗なる人間の理智によって知ることのできない「難思難儀」な限りなき自然の内奥微密の世界であり、このいっさいの存在を包容する円融無礙の妙諦を体得身証せしめる道に人を歩ませてゆく点にこそ宗教の本質がある、と露伴は主張するのである。⁽⁹⁾それゆえ、人間は信仰世界に我執を溶解させ、生命の有限性への凝視を通して自然の妙諦に包摂されている自己の永遠性を身証し、その限りない円融無礙の妙諦を受容することによって「信ぜしめられてゐる」自己を再発見することができるのである。これは、信仰の大海に包容されて生かされながら生き無限の新しい生命を体得した「大讚歎」を発する姿が真の信仰と宗教の基盤を成立させている源泉であることを語り示したものと云えよう。

第二に、このことは露伴が信仰における信と行の体得・身証を重視していたことをもの語っている。露伴は、宗教はすべて「信先解後」⁽¹⁰⁾であると述べている。仏陀を信ずる宗教がまず仏陀を信ずることを肝要としているごとく、先に「信」がなければならず、「解」はその後に必要なのである。

しかも、「信」を第一に求めるだけでなく、その「信」にともなう「行」によって信仰を身証することがなければ信仰の内奥に円融する妙諦を体得することはできない、と露伴は強調している。すなわち、「信の純熟と行の精到」⁽¹¹⁾によって聖なる永遠の信仰世界に参入し、無限の妙諦に包容されながら「信」によって聖意に叶うことに宗教の妙諦が存在する、と云うのである。

こうした露伴の信仰観は、明治二十三年一月三日に坪内逍遙が「幸田は、仏学によりて或る主義を定めたるものゝ如し」⁽¹²⁾と日記に書いたように露伴の青年期以来から持続され、さらに「信の純熟と行の精到」を経たなかから告白され

主張されたものと考えられる。

仏教に関する評論と寓話作品

露伴の書いた仏教に関する作品は、仏典の注釈、仏教寓話、釈迦および仏典教説の評論、詩歌、伝記、仏教精神を基底とする小説などに大別することができる。

仏典の注釈についての代表作品は、『般若心経第二義注』である。仏教寓話には、経律論を典拠とした『宝の蔵』や『印度の古話』が執筆されている。仏教についての評論はきわめて多く、その主要なものをあげれば次の通りである。(1)『一切経の伝』『父母恩重経』『金光明最勝王経』(『蝸牛庵聯話』所収)など仏典の流伝および内容に関するもの、(2)妄感による小執着心と釈迦の大執着心を論じた『犬談義』、『話苑』に収められている「釈迦時代の印度」「目連尊者と佐藤一斎と」「禪宗の史」「宗論」「難陀」などの短評、(3)『仏教に現れたる女性』『禪と修養とに就いて』『寺院建築と実際的要求』『因其心恋慕乃出為説法』『末利夫人と石田三成』など多面的に仏教のあり方を論じたものや『読書礼記』『蝸牛庵聯話』の中で言及した仏典内容および弁才天、毘沙門天、三十番神などの由来に関するもの。

また、詩歌には般若心経や法華経にもとづく短歌、俳句があり、特に後者には「寿量讃」(句集『江東集』所収)がある。仏教者の伝記には「妙法蓮華経の行者日蓮一代」の不退転の勇氣と堅忍不拔の所信を影写した『日蓮上人』が代表作としてあげられる。日蓮に関しては、「我が高祖大士」降誕の日を慶賀して勇氣と歡喜の念をひれきした『高祖の降誕』という講述がある。ほかに、これは伝記とはいえないが、文章表現に関連して『文学上に於ける弘法

大師』、「一枚起請文、与乘信房勸信心決定書、念仏を勧むるの書」(『文章講義』所収)など仏教者とその著作にふれた作品がある。

仏教の精神を基底とし、また作品世界に貫流させている小説としては、法華経方便品の説く十如是を作品構成に引用しながら、一念の誠によって仮現より解脱して金剛不壊の実相美妙の仏体を成就する『風流仏』、釈迦を大いなる愛憐熱涙の情をうたつた大歌人と讃嘆する『毒朱唇』、美醜を包容する無我および煩惱から解脱への道程を描いた『対髑體』、一心の誠によって不朽の宝塔を建立した背後に仏教の象徴化を顕現した『五重塔』などをあげることができる。これらは、いずれも仏教の精神を作品世界に結晶させることによって、風流の志想と芸術美の理想を形象しようとしたものである。

これらの作品のうち、『風流仏』と『囚其心恋慕乃出為説法』『寿量讚』ならびに『日蓮上人』『高祖の降誕』については、かつていささか論及したことがある⁽¹³⁾。本稿では、仏典評釈、仏教寓話、仏教評論、仏教精神の貫流した小説の中から若干の作品をとりあげ、露伴における文学と仏教の連環のありようについて述べていきたいと思う。

まず初めに、先きにあげた作品の中より評論と仏教寓話に関するものを簡略に紹介しておきたい。

明治二十七年二月に書いた『一切経の伝』⁽¹⁴⁾という一文は、仏典の流布と書写翻刻の略伝を記したものである。この中で、仏教中の経律論秘密雜の五藏の総称が一切経であるとし、この一切経は『実に其宗徒に取りては、救世の宝典迷津の巨舟にて、局外者に取りても亦、文学の一大叢林なり』と語っている。

露伴は既に明治二十五年頃には興教書院より刊行された和綴活版本の『大藏経』を購入して座右に置き、これを繙きながら経論の読誦や説示を試みている⁽¹⁵⁾。こうした中からまとめられたのが、『宝の藏』⁽¹⁶⁾である。

『宝の蔵』は、明治二十五年七月に学齡館より刊行された。仏教説話を収録した寓意集である。この作品は、「世にも珍らしき宝の蔵と呼べる絵巻」を所持する山里の翁が里の童子に宝の蔵に収める面白い話を次々に語って聞かせるといふ構成になっている。翁は、「問ふことは知ることの初めなり」と述べて、大切な宝の蔵を開いて珍しい話を語り、不思議なこの巻物によって宝を得られると云う。同時に、「思考かんがふことは悟ることの初めなり」と語り、この物語を聞き考えることによって「宝の蔵より真まことの蔵を得ること」を目的に悟りの道に童子たちを導こうとするのである。露伴は、この『宝の蔵』の緒言で次のように記している。「余浪りに経論を誦誦するの次、譬喩ひよの説因縁の説、甘きこと醍醐の如く、而して雋味津々として出で、尽きざるものに遇ふときは、牢記復忘るゝあたはず、飯後茶間に妹等と談笑するに及んでは、機に触れ興に乗じて、百喩百縁の類、胸臆に浮ぶもの一則或は二則をとって語ることを免かれざり」。

ここには、露伴が経論をしばしば誦誦し、特に譬喩と因縁説に多大の関心と興味を抱いていたこと、これらの仏典説話を日常茶飯事に語っていたことが述べられている。『宝の蔵』は、こうした露伴の仏典説話に関する姿勢にもとづいて、その「百喩百縁の類」より十五話を抄出したものである。露伴の明らかにした『宝の蔵』に所収された十五話の題名・寓意と典拠は、次の如くである。

- (一) 善牙獅子ぜんがししと善搏虎ぜんぱくこと両舌野干りょうぜつげんとの話 虚偽こゝろ(二枚舌)の無益さを説く。独立して共存する者を仲違いさせて自己保身を図る卑屈で偽りにみちた誠なき狡猾な振舞いは恥ずべきことであり、ともに助けあいみだりに争わない賢い知慧を持つべきであると述べた譬喩譚 八十誦律卷九、弥沙塞部和醯五分律卷六▽

- (二) 鳥と鶏との間の雛の話 二念ふたごころを持つてはならないことを示した教訓 八摩訶僧祇律卷二十四▽

- (三) 毒箭に当りたる愚人の話 たちちに為すべきことを為さず無益の想像に耽ける愚かさを述べた教訓 八中阿含経卷六十、箭喻経 〱
- 四 猿と虬みづちとの話 虚偽をもって人を欺けば他人もまたいつわりを構えて自分を欺くことを示した譬喻話 八本行集経卷三十 〱
- (五) 象と猿と巖多鳥てんたうとの話 互譲の心を抱いて睦しく交わる時にはたがいに楽しく過ごすことができると説いた説話 八四分律卷五十、摩訶僧祇律卷二十七 〱
- (六) 涼わなにかゝりし鹿の話 信義を失なつてはならず、信義は人を感動させるといふ教訓 八鹿母経 〱
- (七) 記恩野干と老獅子王との話 なさけは人の為ならずといふ教訓 八十誦律卷三十六 〱
- (八) 水牛と猿と人との話 くだらぬ人に取りあつてはならない。つまらぬ人は自ら罪の報いを受け、その罪は消えないといふ譬喻 八仏説水中経 〱
- (九) 梟と鳥との話 怨恨を解かず、これを結べば強者も亡びることを示した物語 八雑宝藏経卷八 〱
- (〇) 他の善を助くるに勇猛なる兎の話 善事の為には身を捨てて志を遂げること示した教訓 八旧雑譬喻経卷下、雑宝藏経卷二 〱
- (一) 狼と羊との話 一念を起して立てた善い志を貫くことの大切さを述べた寓話 八摩訶僧祇律卷四 〱
- (二) 野干王城を改むる話 身の程知らぬ望みを起す愚かさと実力なくして多数を治める危険さを示した物語 八弥沙塞部和醯五分律卷三 〱
- (三) 毒蛇とも黄金とも見えしもの話 不正に得た財宝は毒蛇のように忌はしきことを示した物語 八馬鳴菩薩

大莊嚴經論卷六

(四) 啄木鳥怒って獅子王を罵る話 強者は弱者を輕侮してはならない、罵詈は必ず罵詈を招き暴言には暴言がか

えってくるという譬喩 八菩薩瓔珞經卷十一

(四) 孔雀と国王の后と眞師との話 慾望は災を受ける因となり、分外の望みの空しいことを述べ、思慮なき言葉

は信義と徳を破ることになる点をあかした説話 八六度集經卷三

こうした仏教の譬喩および因縁説に関しては、明治二十六年六月に書いた『印度の古話』⁽¹⁷⁾にも利吒阿利吒兄弟の善心と慈悲心の功徳を語っている。また、華嚴經を典拠にして善財童子と伊舎那女にまつわる物語を書き綴った大正四年五月執筆の『伊舎那の園』⁽¹⁸⁾では、善を志す人間生活における永遠の美をあかしてあり、「道を尋ねて」⁽¹⁹⁾（大正六年三月）では善財童子が弁具足道女を敬礼して無尽福德藏解脱門を得るに至った話を述べている。大正三〇四年にかけて四たび雑誌『新修養』に掲載した「恩重經」⁽²⁰⁾においては、釈迦仏も孝を重んじた点を認めながら、父母恩重經に三種あることにふれて「漢に生じたるの經」即ち偽經であることを明らかにし、「偽經と雖、勸孝報恩の事を説けるもの人間に重んぜらるゝを見て、人の至性の欺き俺ふ可からざるものあるを感じるのみ」と記している。このほか、仏典の名は作品中にしばしば載せられ、その内容にも言及されており、先述の『蝸牛庵聯話』所収の金光明最勝王經に関する評釈や法華經についての作品も、こうした一切經への並々ならぬ造詣と仏典を作品に結実させてゆく姿勢によるものである。

このような仏典への認識にもとづいて、仏教に言及した評論も少なくない。たとえば『仏教に現れたる女性』⁽²¹⁾（明治三十八三月）は、露伴が玉耶教（經）に示された仏教の婦人觀を語ったものである。露伴は、この經が小乗の教え

であるが面白い事が書いてあるとして、仏が婦人の三障三惡および特に母婦・妹婦・知識婦・婦婦・婢婦・怨家婦・奪命婦の七種の理を諄々と説きあかし玉耶女は遂に邪慳の角を折って仏に帰依したという経の主眼を紹介している。

また『末利夫人と石田三成』⁽²²⁾（昭和三年三月）は、仏在世時代の橋薩羅國勝光王の夫人末利の美と賢を語り、王が奴婢の境界に落ちていた末利女の「聡明の智が有って且つ親切な心の所有者」であることに感じ入って王妃にした逸話を述べている。

また、『話苑』⁽²³⁾（明治二十八年七月）には、医王者婆の母が柰樹の中より生れた美人であったことはかくや姫の話をほうふつさせるとか、崑陵の地であって高さは日月の上に出る崑崙山は須弥山の事としてよく須弥山をヒマラヤというのは臆説にすぎるとか、仏弟子の目連尊者が太古の状況を思惟觀察して説いた話として、土地争いが続いたので智徳円満の人を選んで人々の所得の六分の一を与えて王としたのが大同意王と呼ばれるようになったという国王創始の説を述べ、さらに坪内逍遙がかつて仏弟子難陀を好学の士といたが出家してなお恋慕の情やみがたく女性を見て慾心をおこした難陀は好学のものではないなどと語っている。こうした仏教への関心は、仏典・仏話の領域から「宗教の信仰若くは宣伝弘通よりして生じたる歌」⁽²⁴⁾としての和讃の研究に至る幅広いもので、なかには疊じき和服着坐様式より腰掛式靴ばき様式の建築への展開を予測した『寺院建築と實際的要求』⁽²⁵⁾（大正六年四月）といった一文まで含まれている。

露伴にとつて、仏典は特にこうした仏教認識の根本として読まれたが、病中においても仏典（宝光明経）を手にし無辺の恭敬心をおこして我人の傲慢を棄捨せよ、悪知識から離れて求法の善友を求めよなどの語に励まされ「我が悪癖に中り我が前途を指示する者を見出して、奮然として起ち赧然として恥ぢ豁然として安んずる所を得」⁽²⁶⁾たと記述し

たように、仏典は自己を激励し欠点を是正する心の支えを意味していたと考えられる。

『般若心経第二義注』と風流観

色即是空の心を

岩に砕け渚に寄する音はあれ水をはなれて立浪もなし

空即是色のこゝろを

雲と見へかすみと粉ふよしの山春風吹かて咲花もなし⁽²⁷⁾

露伴は、明治十八年七月に電信技手として北海道に赴いた折、東京から携帯してきた漢籍や仏教書を読み、余市の永禅寺に詣でて参禅読経し楞嚴経をひもといている⁽²⁸⁾。また、「よし突貫して此逆境を出でむ⁽²⁹⁾」との決意を抱いて帰京した明治二十年九月末以降仏書を読みふけた露伴が最初に手に入れた仏典は、般若心経である⁽³⁰⁾。このことについて露伴は、『般若心経第二義注⁽³¹⁾』の中で、「我が初めて仏書を読まんとしたる時は実に此経に縁ありて、折本になりたる無注のものを広小路にて得たるより、注あるものを求めしに先づ隆蘭溪禅師の注を得たり」と述べている。塩田賢は、この般若心経との出会いに関し、「露伴文学に特別の関係を有するにいたる仏教はこのようにして吸収されるのである⁽³²⁾」と指摘している。

『般若心経二義注』は、斎藤八郎筆写の写本を用い、明治二十三年八月二十日に書写したものとされている。発表されたのは、昭和二十二年の『文学』十月号「露伴追悼号」においてである。

「謹みて大聖教主を頭にいたゞき、傲慢の罪を懺悔し一切悪念を放下し去らむと覚悟なし、真実の道心を励まし、

一ツは親戚朋友のため、一ツは障惑深き我身の修行のため、又及ばぬことながら遠くは正法弘通のために世間利益のために、今夜此宝経を注釈せんとおもふ」。

この書きだしではじまる般若心経の注釈は、言語文字をもって解釈するのではなく「行為」をもって解くことによつて未解の者を感悟せしめようとの願いによつてなされたものである。

露伴は、「聖賢の語を解くの最勝法は、無言の言即ち行をもつて説くの法なり」と諸経注釈の最勝法を示し、この立場にもとづき、「我が修行によりて聊か得たる眼光にてたすけ／＼て記」したのが、この作品であった。露伴が経典の注釈を「無言の言即ち行」に拠つて行なつたことは、信と行の一致による身証を秘奥の本質とみなした宗教観をすでに般若心経の注釈以前にもつていたことを示すものであり「我が修行によりて聊か得たる眼光」に映じた信仰内容から『般若心経第二義注』が記されたことを意味する。

また「第二義注」の語は、風流観の再検討と解決を般若心経に求めた露伴が傲慢の罪を懺悔し一切悪念を放下しざらうとの覚悟をもちつつも、「我身のあさましき故に、無言の言をもつて解き得ざることを痛感し、いささか明らかに体解しえたものを「少悟は多識よりも勝れたるなり」との観点から記したという意味である。

この作品は、般若心経の経文を解説しながら自己の体験を通して注釈を試みたものであり、「我も一年ばかりは湯氣にあがりて、人跡なき深山の笹小屋に徹夜の坐禅など役だぬ業を悦び、酒の肴に楞嚴経を読むなど白痴を尽した」これまでの参禅体験への反省がこめられている一方、色不異空だけ見て空不異空に眼をとめず、妄念のために悩み苦しむ真風流に背いてきた慙愧の念も表白されている。

『般若心経第二義注』において露伴のとらえたものは、般若の利劍によつて妄想煩惱を斬つて捨て愉快なる円満の

境界に参入する道程である。また、色身即空の理、色空一如の觀を示す般若の智慧によって意魔を圧伏し垢淨を脱した解脱の世界を明らかにしたことである。ここから無我と愛の精神が語られ、円満地の解脱の境界に心身をおいた恋は必ず貫かるべき恋であり、万人稠坐の中に行わるべき恋、万年相結ぶ恋であり、「大力の魔王も妨ぐるあたはざるの真恋慕なり」というのである。

このような「淫慾の銅と妄想の悪鉛」に比べて黄金の価値を有するのが真恋慕であるという主張は、金剛不壞の真恋慕真風流の再生を仏典注釈によって体得身証してゆく露伴の姿勢を意味していたと考えられる。この真恋慕の思想は、のちに「色と空と」(大正元年十一月)で「実相と妄念と与に幻なり」「仏是魔、魔是仏、煩惱と菩提と執着と解脱と、門有りて内外あり、堂ありて上下あるのみ」と述べたような煩惱即菩提の相即の思想すなわち色空一如の觀として表明されるのである。風流觀を骨格とする露伴の作品は、迷悟・仏魔・人我・時処をいずれも仮幻のうちにとつた「空色俱に空、有無俱に無」という無我の解脱精神を結実させたものといふことができる。

ところで露伴が『般若心経第二義注』を書いたのはいかなる理由があつたのか。

その最大の理由は、露伴が明治二十三年に『風流仏』に代表されるこれまでの風流觀の変換を迫られたことである。その煩悶懊悩の精神状況は、同年七月の報知新聞に「造化と文学」と題して掲載された書簡に記されているところである。この書簡で露伴は、空想的態度で造り出した無茶な小説は「魔作の世界」を真世界であるかの如くあざむいてきた「大無風流」の偽善であることに驚愕し、その深刻な自省の中から「到底妄想撲滅にあらずんば無茶ならざる小説は成らず大真如界に住せずんば好句も好小説も成らず」と述べて「真風流の真小説」を造化してゆく道を再び探求する覚悟を告白している。

この露伴の風流観修正に関する直接の動機は明確にはわからないが、実生活上の問題では恋愛の相手であった弟子の斉藤瑩（号紫英）にまつわる恋の不成立とこれに伴って自らの心の内部におこった独善や我執を改めて痛感せざるをえなかった点が推測されている。⁽³⁵⁾ 露伴は、かつて『風流伝』において青春の意気に燃え「仮相の花衣、幻翳空華解脱して深入無際成就一切、莊嚴端麗あり難き実相美妙の風流伝」⁽³⁶⁾を描きあげたが、この時期での心的体験によって \wedge 俗 \vee や我執が外なるものだけでなく、実は内なる心に向うごめく「魔」であることを深く認識せざるをえなかったのではなかろうか。その我執の妄念を直視したとき、外的な \wedge 俗 \vee の我執に對置していた聖なる金剛不壞の恋をとらえるのみでは「真風流」とはいえず「大真如界」に住したことはならないという切実な動揺をもたらしたのであろう。ここから聖なる愛と芸術と理想の融合した解脱即ち仏と結びあった風流の背後にある内なる妄念としての「魔」の折伏を試みていかねばならなかったと思われる。

露伴は仏教への造詣を文学の基盤のひとつとしていたが、「仏」すなわち解脱に相對する我執煩惱の「魔」を折伏調御する妄念の撲滅のためにはより根源的に「大真如界」に住せんとする宗教精神の血肉化を必要としたと考えられる。露伴は、こうした思念にたつて色道の極意を描く『風流魔』⁽³⁷⁾（改題『艶魔伝』）を書き、この逆説的筆法によつて仏魔一如の世界と魔を超越したところにある仏 \parallel 真の解脱を極めるために「大真如界」に住する道を探求し、やがて『風流悟』⁽³⁸⁾（明治二十四年八月）を書くに至つてゆく。この作品は、魔を調御した解脱の「悟」を風流と連環させることによつて真風流を実現しようとしたものである。

『風流悟』は、恋と我慾が離れずに相戦い悲泣し恨み歎ずる恋の牢獄に身をおきつつも「我慾の念をば幸に折伏したりし故に左る悪境に入らざりし」自己の姿を物語つたものであり、「卑きかな恋慕に沈みて而して俗の所謂恋の成

就を望む人の心や」と述べて世俗的な恋を否定し、むしろ世俗の恋の不成就を「幸福」であるとすると恋愛観を吐露している。そして真の恋慕の成就とは、「我が掠奪婚姻的精神ならざる恋慕の念の彼女に通じ、即ち唯一の恋慕の念の彼女に感得せられて、而して彼女の我に對して又唯一の恋慕の念の発せる」ものであるという。悲泣し恨み歎ずる我慾にもとづく恋の牢獄の裏にあって世俗の愛を否定して真の恋愛に逍遙することによって「恋の牢獄は即ち楽園なり」という境地になるのである。

こうした風流觀における仏—魔—悟の連環の軌跡にひとつの解答を与えたのが、般若の利劍を用いて煩惱という魔を斬った「釈迦の慈悲」であったことは注意を要する。このことは、『般若心經第二義注』によって確信したものであったと考えられる。ここで露伴は、「煩惱の悪魔と戦かつてはまだ此方の太刀先鈍く、数々くだらぬ悲しみ憤りに使はれ、此色身のために日々夜々狂ひまはり居る事、無念骨髄に徹する次第なり」と記しており、この言葉は他者一般についてふれたものというより魔性としての妄想に覆われた自らの色身に對して表白したものと考えられる。露伴はこの自己凝視から、恋しい、憎い、嬉しい、悲しいと煩惱し、憎むときには愛することを知らぬ片よった「意魔」に使われる不円満の境界を離れて「一度正見の眼を開きて即空と觀じ、片よりたる境界に心を置かず、円満の地に居ては照々と明らかに為すべき道為すべからざる道も分りて、然る後猶恋をなすとも恨むとも恋を捨つるとも、いづれの道大愉快の地に居て、下らぬ所行には及ばざるべし。凡人の恋は恋に使はれ、釈迦の慈悲は慈悲をなし玉ひたるにて、此処大相違あり」とする「円満地」の境界に参入する心境をあかすのである。

この「意魔」に使われる偏愛の念を般若の利劍によって忽ちに斬って捨てて円満地の自在の境地に到達することなしには、「妄想撲滅」による真風流の成就は不可能である、と露伴は述べるのである。「釈迦とても生きたる内は愛

憎喜怒のなき筈なし、唯般若の利劍を用ひて忽ち魔を斬り、忽ち大光明を放ちしのみ。不愉快を感ずるは円満地に住せざるが故なり」。近代的自我の意識を我執とみてとり、これを「意魔」と指摘したところに、すでに露伴の煩惱魔を否定していく姿勢が明らかである。

さらに露伴は一步進めて、釈迦仏もまた内なる愛憎喜怒を有し「意魔」を断ちきつて解脱した点を示すことによつて魔性を折伏し仏性の光明を輝かせる大真如界即ち仏教的悟達を根底とする円満地の解脱世界に参入し、そこから真風流真恋慕を具象する真小説をうみだそうとした、と思われる。

次の一文は、こうした露伴の心境を吐露したものと考えられる。

汝は是れ当成仏、我は是れ已成仏と菩薩戒經に説かれたり。露伴は是当成仏、瞿曇是已成仏、露伴は是当成聖人、孔子は是已成聖人、露伴は是れ当成詩人、沙翁顛悦は是已成詩人、嗚呼快なる哉。唯明人忍慧強く能持如是法にして初めて仏ともなるべく聖人ともなるべし。恨むらくは我が忍慧弱く不持如是法、羊は是已成畜生、露伴は是当成畜生、炎口は是已成餓鬼、露伴は是当成餓鬼なることを。大丈夫満腔の血、順流逆流、半順半逆流、乃至爵不流潰裂迸飛すべきところは此快恨二字打成丸裏にあり。⁽³⁹⁾

この言葉は、「靄護精舎雜筆」として明治二十九年十二月発行の『ひげ男』に収められ、のちに『露伴叢書』（明治三十五年六月）に「折々草」と改題した中に載せられたものである。ここには、愉快と不愉快、不円満と円満の間に引き裂かれつつ心意の動搖に格闘した露伴が、「快恨二字打成丸」の自在の心境に到達しえたとする確信が表明されている。「頼ましからぬ肉身とは云ひかね」泣いたり怒ったり憎しみ憤る「妄念煩惱」のかたまりである凡夫のあさましさに慙愧の思いを深めたとき、露伴は羊や炎口餓鬼のごとくまさに畜生道と餓鬼道に墮ちてゆく自己を凝視

せざるをえなかったのである。それは偏よりたる意魔に使われ妄想煩惱に執着する不円満の姿でもあった。「恨」の意識は、「不愉快を感ずるは円満地に住せざるが故なり」といった心境と同義であろう。この「恨」の意識は、妄想煩惱に執着する意魔を圧伏してゆく困難な精神の格闘にたえ忍びえる仏の智慧を充分に持ちえない自己の弱さにもとづいている。だが、この不完全不円満の悪物としての妄想煩惱を見つめることによって、「速かに般若の宝剣を揮つて、一度は此肉団身を粉微塵に斬つて捨てよ、然る後には大活眼も自ら開け」てゆく円満の境界に覚醒することが可能になるのである。強き円満地に住する仏の智慧を体現することによって、忍慧弱き不円満の心を強め、「恨」|| 不愉快を「快」|| 愉快に転身させることができるというのである。

この「大悟」の境界に心身をおく「正見の眼」で見なおしたとき、釈尊はすでに成仏した存在、露伴はまさに仏ともなるべきもの、孔子は聖人、露伴はまさに聖人になるべきもの、シエクスピア・ゲータは詩人、露伴はまさに詩人となるべきものという快哉の念が叫ばれたのである。これは、自分一個に抱かれた妄想煩惱の垢を脱し、妄念による小人の悲しみを仏、菩薩の金剛不壞にして廣大無辺の慈悲に転換させることを意味した。しかも、この解脱の境地にたつとき、恨の裏に快のあることを、また快の裏に恨のあることが見えてきたのであり、恋をしたり捨てようとも色身のままに偏愛したり恨むこともない自在の円満地に到達できると述べるのである。

露伴は、仏となり聖人・詩人ともならんとして精神を飛翔させると同時に、妄想煩惱に執着しそれと格闘する鬱積した精神が飛沫のごとく逆流しあっている自己の内なる心的世界を見つめながら、「快」と「恨」の表裏性と一体性をとらえ快恨の意識を自在に調御する仏菩薩の忍慧を仰ぎ求めた、といえるであろう。

露伴はこのように妄想煩惱の凝視を通して円満の境界を探求し、仏の解脱世界に参入し包容されることによって妄

想を制御し、しかも快恨の意識をも包みこみながら大悟することができ生のあるようを確信したのである。

仏教の精神と小説―『毒朱唇』『五重塔』について

ところで、露伴の文学作品のうち小説の世界において仏教精神はどのように表象されているのであろうか。ここでは、露伴の初期代表作ともいうべき『毒朱唇』（明治二十三年一月）と『五重塔』（明治二十四年十一月～二十五年三月）に結晶されている仏教精神のありようを一瞥してみよう。

『毒朱唇』⁽⁴⁰⁾は、釈迦にふれた作品として注目されるが、赤城山中に住む美女が釈迦に対する恋慕の念を語る筋立てになっており、深山の静寂に響くかのごとく、山女は釈迦が物の哀れをうたう大歌人であると述べるのである。

「我は自然と仏一代の御所行聞きおぼえて、扱も世界の大歌人、天晴美しい方様、たのもしい男、粹なお人、実のあるお方、今若しござらば少し甘えても見たく、可愛がられても見たい殿御と思ひそめたが無理でござんすか」。

これが、釈迦に恋い焦られる山女の「心意気」である。この釈迦に対する見方は、普通観念から立てる仏の定義を根底的に批判し宗教家や哲学者のめくら信心へば理屈を否定したもので、「仏法を情解の眼鏡で覗く」露伴の仏教に対する姿勢を投映したものである。

これは、「釈迦様を理屈屋の大將と見なしたるこそ片腹痛けれ」「哲學家といふものは妄わたしの考へではお釈迦様とは玉と金ほどの違ひ」といった言葉にもみられる。また、釈迦が悲しくはかなく情ないと思う心から大千世界を覗き見て妄想の大長刀をふるった末に一切経という長歌短歌を説き出した歌人だから惚れたというのも、その冷い教理ではなく釈迦の満身にあふれる「大きな愛情の熱涙」に対する感動を重視したからである。

それ故露伴は、肉慾などの小さな愛を捨て、しかも野暮ではなく大きな人情をたたえた「醍醐の味がする大人情」を歌いあげ、「御愛憐の切なるお心」の一念を歌いくらしたのが釈迦の深い慈愛であると語る。その釈迦の慈愛こそ、「驚の山暗く、教へ指さす人もなき、天下に妄一人の果敢なき恋」に彷徨し無明煩惱におち入った山女をして慄然としてありがたき涙をおとさせるものであった。

それは、釈迦の愛憐の心にふれた山女の片恋が、大きな愛に感応しえたことをも意味している。

この点は、釈迦に執着がなかったのではない、妄想による小執着ではなく大業と平和と美徳を生ずる貴い大執着心があった、という釈迦仏への見方にも通じるものである。

露伴の『五重塔』⁽⁴⁾は、大工としての生きがいを求め死んでも立派に名を残したいと念願したの、つそり、十兵衛が、我慾を離れ自己の全生命をかけた「我」を貫き通し一心の誠を献げて谷中感応寺の五重塔を建立した物語として知られている。

のつそり十兵衛は、自己の存在のあかしをたてることによって永遠不朽につながるとうとする脱俗的自我意識をもつ芸術への一向専念者である。『五重塔』は、その十兵衛に仕事を奪われながら慾得ずくでない職人の本望に苦惱しつつ「塔さへ能く成れば」と思いかえて十兵衛に塔を二人で建てよう、知恵思案を貸そうという川越の源太の持つ俠氣と十兵衛との入心の争闘の物語を軸として展開されてゆく。やがて、塔をつくるなら独力でと思念する「のつそり十兵衛が辛苦経営むなしからで、感応寺生雲塔いよく物の見事に出来上」るのである。

しかし、その喜びも束の間、暴風雨が「闇に採まる松柏の梢に天魔の号びものすごく」吹き荒れる。この暴風雨は浮世の栄華に誇る「愚物」「偽物」の眠りを乱し、こざかしい自負心・名誉心といった天を軽んずる人間の我執とお

ごりを打砕く飛天夜叉王の意志から発せられた怒号である。夜叉とは、空を飛行する鬼神のひとつである。

夜叉は、仏教を信ずる者を惑乱する悪鬼であるが、仏に帰依することによって仏の説法の座に列なり仏教を守護する神として存在している。たとえば、法華經の序品には、「会えの中の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷と天・竜・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦との人、非人と及び諸の小王・轉輪聖王との、この諸の大衆は未曾有なることを得て、歡喜し合掌して一心に仏を觀たてまつる」と示されている。夜叉もまた天の世界に住む大衆のひとつとして、仏の会座に参列していることがわかる。鬼子母神・十羅刹女などの神はいずれも「法華經を持する者を惱乱する者あらば直ちに其頭を七ツに引裂き捨てんと誓へる」ものである。これらの守護神は、仏教の行者を護り助け、その信念を試み、迫害者を罰する働きを有している。⁽⁴²⁾

『五重塔』において飛天夜叉王が、「人の心の平和を奪へ平和を奪へ、浮世の榮華を誇れる奴等の胆を破れや睡りを攪せや、愚物の胸に血の濤打たせよ、偽物の面の紅き色奪れ」という怒号もまた、仏教に背く人間の無智・卑劣や我慾を治罰し、あわせて仏教の象徴となる五重塔の建立に対する試練を与えようとしたものである。暴風雨が偽善と私慾によって建てられた家々を倒壊させたのに、遂に五重塔が倒れなかったのは、それが我執によってではなく一心の誠マコトにもとづいて建立されたものであったからである。

しかも、この△一心の誠マコトが十兵衛の抱く小我に安住するものである限り飛天夜叉によって信念の強弱を試めされねばならなかった。

この試練を通りぬけたときに、夜叉をはじめとする仏神に護念されるものとして、五重塔は不朽の命をもって天に向ってそびえ立つのである。

十兵衛が、小我による夢想の空しさを痛感し、「彼塔倒れたら生きては居ぬ覚悟」を抱いた心が天に感応したのである。「風雨を睨んで彼程の大揉の中に泰然と構へて居たといふが、其一念でも破壊るまい」。しかも、この十兵衛における生命を献げた一心の誠が、露伴の分身である朗円上人の有限の生命を無限の生命へと導いてゆく教示によって初めて実現される点はきわめて重要である。

濟度の法音を響かせる朗円上人は、「壊空の理を体して意欲の火炎を胸に掲げらることもなく、涅槃の真に会して執着の彩色に心を染まざる」解脱の世界に住む老和尚である。

朗円上人は、十兵衛と源太に向つて、長者が争う兄弟に蓮華の形をした石と金色の光を放つ砂を与え「兄弟ともく歡喜び樂しみ、互に得たる幸福を互に深く讚歎し」あうようにさせた後、懷中より「真実の璧の蓮華を取り出し」て兄に与え、弟には「真実の砂金」を袖より出して与えたという仏説を語つて聞かせて譬喩方便の中にある真実をさし示している。

この方便より真実の道をさし示した上人のさとしによつて、十兵衛は苦惱しつ一つ一心の誠につき進んでゆくのである。「一心の誠を委ね生命を懸けて、慾も大概は忘れ卑劣き念も起さず、唯只鑿をもつては能く穿らんことを思ひ、鉋を持つては好く削らんことを思ふ心の尊さ」は、この上人による真実の教説によつて保証されてゆくことになる。だが、上人は、この「心の尊さ」を認めつつも十兵衛の一心の誠が自分一個の小我に止まることを見ぬき我執の徹底的な純化の彼方にある捨身によつて不朽の五重塔が完成する道をさし示してやまない。

十兵衛が暴風雨の試練を経た中で「一度はどうせ捨る身の捨処よし捨時よし、仏寺を汚す恐れあれど我が建てしもの壊れしならば其場を一步立去り得べきや、諸仏菩薩も御許しあれ、生雲塔の頂上より直ちに飛んで身を捨てむ」と

の覚悟を抱くことによつて、十兵衛の有限の命は無限の命と感応し、生雲塔は不朽の「宝塔」になるのである。

「江都の住人十兵衛之を造り、川越源太之を成す。年月日とぞ筆太に記し了られ、満面に笑を湛へて振り顧り玉へば、兩人ともに言葉なくたゞ平伏して拝謝けるが、それより宝塔長へに天に聳えて、西より瞻れば飛檐或時素月を吐き、東より望めば勾欄夕に紅白を呑んで、百有余年の今に至るまで、譚に生きて遣れる」―それは、十兵衛の誠と源太の俠気を包容した中で実現する永遠不朽の無我の世界を意味し、捨身即解脱を身証したことによつて「宝塔」が建立しえたことをもの語っている。

五重塔は、救いようもなく暗く屈折した挫折感を真に救済する露伴の祈念を示している。同時にこの宝塔は、試練を与えた飛天夜叉王にも護念され天にそびえる真実の一念の誠に結実された精神の高みを象徴したものである。こうした宝塔とその建立への魂の足跡こそ、仏教精神を表象したものにはかならない。この作品は、宝塔を建てるものとしての露伴における精神の核心が、仏教精神の身証にあつたことを明らかにしている。

註

- (1) 「蝸牛庵聯話」(『露伴全集』第三十一卷・二三七頁)。以下『露伴全集』は『全集』とする。
- (2) 『連環記』(『全集』第六卷・五〇一頁)
- (3) 『全集』別卷上・四四二―四頁
- (4) 同右・四四二頁。
- (5) 同右・四四三頁。
- (6) 「道教に就いて」(『全集』第十八卷・二六三頁)

- (7) 「仙書參同契」(『全集』第十八卷・四八九・四九一頁)。
- (8) 同右・四九一頁。
- (9) 「道教思想」(『全集』第十六卷・三一二頁)。
- (10) 同右・三一三頁。
- (11) 同右・三一三頁。
- (12) 「造化と文学」(『全集』第三十九卷・書簡一七頁)。
- (13) 拙稿「幸田露伴の文学と法華經および日蓮聖人観」(『日蓮教団の諸問題』所収・九三二―九五八頁)。
- (14) 『全集』第十五卷・三二―三六頁。
- (15) 塩谷贊著『幸田露伴』(中公文庫)上・一七四―一七五頁。
- (16) 『全集』第十一卷・四七―一一頁。
- (17) 『全集』第十卷・二九〇―二九七頁。
- (18) 『全集』第六卷・二三―二六頁。
- (19) 同右・四七―五〇頁。
- (20) 『全集』第十九卷・一〇五―一一九頁。
- (21) 『全集』別卷上・一二二―一二七頁。
- (22) 『全集』第十五卷・五一―五八頁。
- (23) 『全集』第二十四卷・一四二―一七九頁。
- (24) 『全集』第十八卷・『圈外の歌』二三―二頁。
- (25) 『全集』別卷上・六二六―六二八頁。
- (26) 『全集』第三十一卷・二二頁。『折々草』所収「病中讀書」。
- (27) 『全集』第四十卷・三一頁。「幽玄洞雜筆」所収。
- (28) 同右・二八、三〇頁。
- (29) 『全集』第十四卷・三頁。「突貫紀行」。

- (30) 塩谷贊 前掲書上・一二三頁。
- (31) 『全集』第四十卷・七九—一〇三頁。
- (32) 塩谷贊 前掲書上・四一頁。また、同書二二五頁には「般若心経第二義注」が昭和二十二年に「文学」十月号「露伴追悼号」に発表された時、長与善郎が「露伴文学の基調と行き方とを最初から表明した文学」と評したことを記している。
- (33) 『全集』第三十二卷・三〇六—三〇七頁。
- (34) 『全集』第三十九卷・書簡一七頁。
- (35) 竹盛竹雄「露伴における魔の表現」(『国文学』三月号・六九頁)
- (36) 『全集』第一卷・二五—七八頁。
- (37) 『全集』第五卷・四四七—四七三頁。
- (38) 『全集』第十卷・三一—四七頁。
- (39) 『全集』第三十一卷・一四頁。
- (40) 『全集』第一卷・一九—三四頁。
- (41) 『全集』第五卷・一八五—二七二頁。
- (42) この点については、宮崎英修著『日蓮宗の守護神』(昭和三十三年・平楽寺書店刊)に詳述されている。
- (43) 水谷昭夫「五重塔」(『国文学』三月号・一四七頁)。

キリシタンの神話的世界(一)

—「天地始之事」における天狗の意義—

紙 谷 威 廣

I キリシタンの神話

〔天地始之事〕は、長崎県西彼杵郡と五島列島の隠れキリシタンによって継承され、彼等の信仰と日常生活を体系化させた神話である。隠れキリシタンは、教会に宣教師達と切離されたために、ごく僅かの材料だけで、彼等自身で立つ基盤を説明しなければならなかった。したがって、この神話の中には、彼等の主要な祭儀とそれにとまらうオラショ（祈禱文）が随処に配置され、その成立が説明され、位置づけられている。また、仏教的知識やキリスト教的知識、俗信といったあらゆる信仰的要素、そしてまた、伝説や民謡などの伝承が重要な構成部分となっている。

神話的思考を一種の知的な器用仕事（ブリコラージュ）であるという、レヴィ・ストロースの指摘は、未開社会の一見稚拙な神話や、断片的な伝説さえも、重要な科学的研究の対象であることを人々に再認識させ、理解させるもの

であった。さらに、レヴィイラストロースは、「神話的思考の本性は、雑多な要素からなり、かつたくさんあるとはいってもやはり限度のある材料を用いて自分の考えを表現することである」とも言っている。キリシタンにとって、種々雑多な材料で創りあげた△天地始之事√こそ、江戸幕府支配下の過酷な弾圧のもとでなされた知的営為であった。そして、さらに付け加えるとすれば、そこにとりあげられた雑多な要素こそが、彼等の体系化し、位置づけておかねばならなかった、日常性そのものであった。神話は雑多な日常的部分を体系化し、意義づけるものであり、人間の全存在を説明するためのものなのである。

知的な営みを開始した幼児のように、人は常に何故かという問を提出する。解答は必ずしも与えられない。しかし、この問に應ずる努力はなされてきた。断片的な祭儀生活を守らねばならなかったキリシタン達にとって、繰り返すし、この「何故か」という問が迫って来たと言えよう。△天地始之事√は、彼等がキリシタン信仰を、秘密裡に守らねばならなかった意味、何故、周囲の仏教徒と異なる祭儀を執行し、異なる経文を呪するのかという疑問に應えるために存在したのである。

禁制下の潜伏キリシタンにとって、現実がどれ程過酷であったかは言うまでもないことである。信仰を明らかにすれば、確実な死を意味した。信仰を秘していることは、それ自体、教会側からは罪とされ、死後の救済からの拒絶を意味した。△後世のたすかり√、△アニマ(靈魂)のたすかり√を知らされた人々にとって、信仰を否認して神Ⅱ教会に拒まれることは、生きることの目的を失なうことに他ならなかったのである。しかし教会とその荷ない手としての宣教師達から切離された人々は、信仰の表明を棄て去り、表面上は仏教徒としての生活を送らざるを得なかった。踏絵をすませて、自己の信仰を否定した者にとっては、後悔の中で、コンチリサン(完全なる痛悔)の祈りを献げた

としても、神に叛いた痛みは消えさることもなく、アニマのたすかりを得られないことへの怖れも増していったと考
えざるを得ない。

歴史的存在（現実と対応した）としてのキリシタンは、鎖国以後は、表面的には神を否定せざるを得なかった。そ
れだけに、内的には自己の信仰の正統性を主張して譲らなかつた。そのためにも、彼等の生活が苦悩と後悔に満ちた
ものであるのかを説明する神話を必要としていたのである。

本稿では、楽園追放と後悔の生活といった主題がどのようにキリシタンに受けとめられたのかをとりあげ、その中
で、天狗（悪魔）の概念を検討することで、キリシタン信仰に果たした∧天地始之事∨の役割を見てみたい。

II 下界に後悔の生活を送るものと中天の天狗

キリシタンにとっては、この世界は、三つの部分から構成されていた。すなわち、パライソ（天）⁽²⁾と中天⁽³⁾と下界
（地上の世界）である。下界にあって人々は、罪に苦しむ存在であり、パライソに生まれ代わるための後悔の生活を
送るものであった。

エワの子どもは、これよりしたの下界にすみ、畜生を食し、月星を拝み、後悔^{くをくわ}して、まいるべし。一度は天の道
をしらすべし。（後略）⁽⁴⁾

下界、つまり地上の世界は、アダン（アダム）とエワがマサンの木の實（りんご、知恵の木の實）を食べた結果として、その子ども達が与えられた場なのであった。デウス（天帝）の命にそむいたために、救済を得られず、救済を得るための方法も知らされなままに生きる場であった。畜生を食すること、つまり肉食をすることは、近世の庶民にとつては穢れた行為に他ならなかった。また、神ならぬ月や星を拝することは、キリシタンにとつては罪にあたる行為である。このような救済を拒まれた地上での生活がまず与えられたのである。

この世界に最初に出現した人間は、アダン（アダム）であった。

そもそも、デウスと敬まい奉るは、天地の御主、人間万物の御親にて、まします也。式百相の御位、四十式相の御装い、もと御一体の御光を、分けさせたもふ所、すなわち日天也。

デウス（神）は天地の主であり、人間をはじめ全ての親であつて、二百相の位と四十二相の姿をしていて、自らの光を分けられたのが太陽だったのである。ここには、仏教的な用語を使用しながらも、絶対者としての神が描き出されている。そして、デウスは地獄から天国に至る十二天を創造する。

それより十二天をつくらせたもふ。其名ベンボウ此所地獄也、マンボウ・オリベテン・シダイ・ゴダイ・パッパ・オロハ・コンスタンチ・ホラ・コロテル・十まんのパライソ此所則ごくらく世界也。

難解な仏教用語をさえ、日常使用する語として消化してきた中世日本人にとっては、これらの複雑な語をとりこむことは、さして困難なことではなかった。これらの中で、ベンボウ（地獄）とバライソ（ごくらく世界）だけが本来のキリシタンの用語であり、それ以外は出典も意味も明らかにできないが、キリシタン用語と仏教的な十二天という概念が渾然となつて、一つの宇宙が示されている。さしあつて、この文脈の中では、バライソとコロテル(8)とベンボウだけが重要なのである。

それより日月ほしを御つくり、数万のアンジョ(6)思召すままに、めしよせたもふ也。

七人のアンジョがしらジュスヘル(6)、百相の位、二十式相の形。又天帝万物を御つくり、土・水・火・風・塩・油、御自身の御骨肉を御入、シクダ・テルシャ・クワルタ・キンタ・セスタ・サバタ(7)都合一七日めに連続して、これ則人間の五体也。天帝より四ふんの息を御入ありて、ドメイゴスのアダンと名づけ、三十三の相也。よつてまわりの七日めは(4)大一の祝日也。

アンジョ(6)（天使）は神によつて創造されたものではないのかも知れない。すでに存在するもののように文脈の中では読みとることもできる。神に叛くのも、このアンジョがしらジュスヘルである。これに続いて、最初の間であるアダンの創造がなされる。旧約聖書の記載によれば、天地創造が七日間を要したのであるが、天地始之事では人間を創造するのに、七日間を費しているのである。そこから、ドメイゴスつまり日曜日が重要な祝日とされ、ドメイゴスのアダンと冠せられることになつてゐる。

又女一人御つくり、ドメイゴスのエワと名づけ、夫婦となし、コロテルという界を得て、チコロウ・タンホウとて男子女子或人出生し、それよりエワ・アダン、デウスを礼拝いたさんため、日々バライソにおもむきける。

アダンとエワ（イブ）は樂園追放以前に男子と女子を得ている。子を生むことは、罪の結果ではなく、人間創造に伴う必然的なものとされていたのである。コロテルにおかれたアダンとエワは神の世界、バライソに毎日おもむく。神とのつながりは親密なものであった。しかし、これを阻むのがアンジョがしらジュスヘルである。

デウス御留守間をみすまし、数万のアンジョをたばかりていわく、「此ジュスヘル天帝も同然也。よつて、いらわれを拝みめされ」といふ。これをきよてアンジョがたあら／＼礼拝いたすなり。

かかる所にエワ・アダン「デウス様はおわしたまわずや」いふければ、ジュスヘルきよもあゑず、「御主は御天也。我デウス同然たるがゆへに、数万のアンジョも、われを尊敬ある。よりてエワ・アダンも此ジュスヘルをおがみめされ」といふ。

エワ・アダンきよて、「われわれはデウス様を拝むべし」とたがいに論もやまざる所に、デウス只今下天也と、御幸有ば、ジュスヘルを拝みのこりし、アンジョがた、エワもアダンもはつと計はかりに手を合せてぞふしおがみ、則其時あやまりの理りことわ、後悔コンチリサン也。

かくてデウスのたまうは、「ジュスヘルは拝むとも、マサンの木の実、かならずくう事なかれ。さて、エワ・ア

ダン、子どもをつれてきたりなば、よく名をさつけ得させん⁽⁸⁾」となさけもふかき御ことばに、みな一同にかへりけり。

「ジュスヘルは拝むとも」、表面上仏教寺院の檀家として生きねばならなかったキリシタンにとつては、仏像の前に謁つぐことは、ジュスヘルの誘惑に屈服することであつた。屈辱的な仏教への表面的入信とその痛恨の思いが、そしてそれを許容する神への願ひこそがここに示されねばならなかつた。教会から切離され、弾圧の恐怖にさらされたキリシタンにとつて、表面上仏教徒として生きざるを得なかつたのであり、そのことを理解してくれる寛容の神への希求の強かつたことは言うまでもない。しかし、現実との妥協を避けられなかつたキリシタンにとつても、最後の守るべき部分に残さねばならなかつた。マサンの木の實の禁忌こそ、神とのつながりを認める唯一の象徴なのである。しかし、その神への希望である禁忌を破らせるべく、アンジョがしらジュスヘルは、マサンの木の實をエワとアダンに勧める。

又ジュスヘル、「われデウスの使い也。其方子ども、よく名をさづけ得さすべしとの御上意はやく子どもをつかわし申せ」といふければ、エワきいて、真とおもひ、「これは遠方御苦勞様也。又其元の御服用せらるゝは、何しなるや」と尋^{たずね}ば、ジュスヘル、「これはマサンの木の實」といふ。エワきいてをどろき、「それは法度^{はつと}の物なると、きゝたるが、たべてもよろしく候や」といふ。……(中略)……「此マサンの木の實は、デウスや此ジュスヘルがものなり。これをたべ候得ば、みなデウス同然の位になるがゆへに、法度也」といふ。……(中略)……エワ

よろこび、おしいたゞきてぞ、しょじにけり。

またジュスヘル、「これはアダンゑくわすべし。子どもいそぎつれまいるべし」と、帰る体にてジュスヘルは、小かげにかくれ、うかゞいる。

かくてアダンはたちかへれば、エワ右のしだいをものがたり、のこしおきたるマサンの木の実手にわたせば、うたがいながら、アダン手にとり、これをたべる。

かかる所に、ふしぎやデウスはいづくともなく御幸にて、「いかにアダン、それは悪の実なるに」と仰有。アダンはつと仰天して、はきいだとさんとすれども、のどにかゝり、そのかいなく、あらかなしや、エワもアダンも、たちまちに天の快樂たぐをうしない、其ざますぐにひきかわり、其時サルベ―ヒシナのオラッシヲをつとめ、天にさけび地にふして、血のなみだをながし、千悔せんかいすれども其かいなく、科のオラッシヲ⁽¹⁰⁾の始り此時也。

こうして、神と人間の断絶がもたらされたのである。キリシタンにとって、下界つまり地上の世界は、神との交渉が断たれた場、神による新しい救済の約束がなされるまでは、後悔の生活を送らねばならない試煉の場であった。樂園追放の物語は比較的忠実に伝承されてきた。というよりも、過酷な歴史的現実の中で、より生き生きとした形で伝えられ、まるで琵琶の調べで語られたかと思われる程、緊張した韻律を伴っている。潜伏キリシタン達は、この物語の中に、此界に生きることの由来を語り継ぎ、彼等自身の存在意義、苦難の信仰生活の因果を求めてきたと考えられよう。

ジュスヘルの誘惑の手にとらえられた、アダンとエワは、天の快楽を失ない、神との結びつきをも断たれてしまふ。天にさげび、地にふして、血の涙を流して後悔しても既に遅かった。悲痛な祈りの結果、四百余年の後悔をすれ⁽¹¹⁾ばとの条件で、アダンはバライソの人数となることが約束される。しかし、ジュスヘルの誘いによって、マサンの木の実を食べ、さらにはアダンにそれを勧めた、エワには何らの救いも認められなかった。エワは「中天の犬となれ」と、蹴さげられ、行衛もしれずなりにける」と却けられてしまった。ジュスヘルもエワと同様の運命をたどる。

以前にかくれいたるジュスヘルは鼻ながく、口ひろく、手足は鱗・角⁽¹²⁾をふりたて、すさまじく有様にて、天帝の御前にかしこまり、「わが悪心ゆへに此さまに相成、行先とてもおそろしく、何とぞ^(ママ)バライソの快楽をうけさせたまへ」とねがいける。天帝仰せけるは、「悪性なる汝、天にわ、かつてかなわぬ、下界は、エワの子ども後悔ゆけば、これ又かなわぬ。よって、雷の神となれ」と十相の位をゑ、中天をぞゆるされける。

さて、ジュスヘル拜みしアンジョ方、かなしいかなや、みなことごとく天狗となり、中天にぞ下りけり。

神に叛き、エワとアダンに禁忌を侵犯させたジュスヘルは、龍の姿を思わせる醜悪な有様に変じた。鼻ながく、口ひろく、手足に鱗が生じ、角が生えた。この恐しい姿のジュスヘルは、雷^(いかづち)の神となり、ジュスヘルに加担したアンジョ達は天狗となる。天狗達は、天にも下界にも「仇もの」となったマサンの木の実を与えられて、中天を支配することとなったのである。天と下界との間にあって、人間の^(人)後悔の生活をおびやかすのが天狗なのである。

それより、悪心欲心の、世の中となり、うんよく、貪欲、我慾といふもの三人生じて、善人の食物を、おのれがほしいままにぬすみ取、かるがゆゑに、デウスこれをにくませたもふに付、三悪人老体に、とち付三めん角は⁽¹³⁾ゑ、そのさまざまさまじく、田畠にみのりたるもの、己が自儘に盗取。これによって、天帝あま下らせたまいて、あまへしやくまとなれと海の底え、けこませたもふ。此三人の悪党も、皆これジュスヘルの業也。

ジュスヘルの支配は中天から下界へも広がり、常に下界の人間がおびやかされていた。さらに人間自身の中からも悪心欲心が生じてきたのであった。天への道は遠くへと追いやられ、終末の時にも、ジュスヘルや天狗の力が及ぶことをキリシタン達は否定してはいない。

三—ミギリ(聖ミカエル)は、天秤の御役をかふむり、ジュリシャレン堂にて、科の次第を御たよしありて、善人はバライトへ通し、悪人はインヘルノに落し又科の次第へにて恥づかしく、科をいましめたもふ事也。たとゑ善あるものといふとも、天狗これをとらんとする。三—ミギリこれをくれじと、ばんのしう剣をもつて、天狗をさくる。

サンミギリ(聖ミカエル)と天狗との斗争が、死後の世界でも繰り広げられると考えられていた。また、世界の滅却(終末)のときにおいてさえ、「天狗きたりて、マサン木の実をさまへんに変じさせ、これをくわせ、わか手につけん巧む。これを食したる人は天狗の手したとなりて、みな、イヌヘリノに落るといふ」のである。

これらの天狗達の支配する中天とは、如何なる世界であつたのだろうか。大正一五年に、松尾久市によって筆録せられたものによれば、次のように変化している。⁽¹⁵⁾

天帝^{デウス}仰けるは、悪性なるなんぢは、天に置けば数万のアンジョに、じゃまをする。地に置けば、チヨロタンボウ（二人の子をさす―筆者）に、あたをするによりて、イヌヘルノにやる筈なれど、百そうの位を九十そう引いて十そうになすに依り、雷の神となりて地より八丁中の村雲に住家を致せ、けずめを食へとおくつのしりで、けさげられ、行衛も知れずなりにける。さて、ジュスヘル拌みのアンジョも共に天狗となり、大天狗中天狗小天狗、四万八天狗となり天ばいなづまわたたくま雷なりこうつきして、地より八丁中の村雲に移る事であります。

下界と天を隔てる存在としてのジュスヘルは、地より八丁の虚空にとどまり、雷の神として、大天狗中天狗小天狗を従えて、人々の前に姿を現わすものとなつた。天狗は、キリシタンにとっては、人間に災厄をもたらす悪なる神でもあつた。キリスト教的な絶対者としての神の前の悪魔ではない。怖るべきマサンの木の実をもち、人々に災厄の種をまく、神と人との間を遮る悪神・雷の神とされたのである。

III キリシタンの布教と天狗伝承

キリシタン用語としての天狗は、二種類の文脈の中からとらえねばなるまい。すなわち、一方ではキリシタンの宣

教師達がデウスに敵対する悪魔を翻訳しようとした(天狗)があり、また一方では、日本人の民間信仰の中で形成され、宣教師達の(天狗)概念を受けとめたところのものである。とりあえず、前者の問題から見てみよう。キリシタン文化の異質性は、その用語の使用法に示されている。これまでも多く論ぜられてきたように、宣教師達は仏教用語を使用したことで、種々の誤解を招いたことから、キリシタン独自の概念を明らかにするために、デウス等のラテン語やポルトガル語をそのまま使用した。キリシタンはこれらの外来語をまじえた混成語を共用していたのである。では、キリシタン宣教師が悪魔を天狗と訳したところの理由は何であったのだろうか。

ルイス・フロイスは『日欧文化比較』⁽¹⁶⁾の中で、僧侶の活動に言及している。日本の僧侶達は「悪魔を尊敬し、崇拝し、悪魔のために寺院を建て、多くの供物を捧げる。」と述べ、また、キリスト教の聖像は美しく、敬虔の念を誘うが、日本の寺院に祀られるものは「火中に焼かれる悪魔の形状をしていて、醜悪で恐怖の念を起こさせる」とも述べている。これは火炎の光背を有する明王像のことをさしているであろう。あるいは、「妖術者はわれわれの間では、罰せられ、制裁を受ける。一向宗の坊主と山伏とは自分たちが妖術者であるために、それに喜びを感じている」とも述べている。ここに表現されているのは、仏教僧侶が(悪魔)に仕え、その力をもって妖術を行なったという批難に他ならないのである。キリシタン宣教師にとっては、唯一絶対の神以外の存在を崇拜し、礼拝することは、悪魔に仕えることであり、悪魔の手先となることを意味していたのであるから、恐しい形相の明王や天部の神像に祈念し、その力に頼ることなどは、妖術師の所行としてしか受けとることができなかったに相違ない。キリシタン布教の時代は、ヨーロッパでは異端審問制度が「魔女狩り」の狂気へと転換していった頃であったことを忘れてはなるまい⁽¹⁷⁾。悪魔に仕える者を批難することによって、換言すれば民間信仰や民衆の宗教的活動を否定することで、宗教的組

織の体系化を求めていた時代の布教なのである。

そして、当面する日本での布教では、仏教僧侶の活動こそ、悪魔に仕える妖術と判断されていたのであろう。こういった妖術の中でも、 \wedge 天法 \vee つまり天狗の法を駆使する山伏は、最も悪魔的なものとして見えたと思われる⁽¹⁸⁾。したがって、悪魔を表現するのには、 \wedge 天狗 \vee の語が適していることは、彼等宣教師や初期の信徒達の共通の理解となつたと言えよう。日葡辞書の中⁽¹⁹⁾でも、天狗の用語例は、比較的豊かである。天狗が荒るる (Tenguga aruru)・天狗の崇り (Tengugo tataru)・天狗が人に憑く (Tenguga fitoni tcugu)・天狗が人にとり憑く (Tenguga fitoni toricugu)・天狗を責め出だす (Tenguo Xemidasu) といったのが見られる。神・仏・天狗といった崇拜対象の中で、人間に禍をなし、あるいは害を加える存在として、天狗を悪魔の訳語として選出したのであった。天狗を悪魔にあてはめることは、当時の民衆の間に、絶大な影響力を誇っていた、密教系の宗派や寺院、さらには山伏などの修行者を論難し、また一方では、キリスト教的な絶対神の信仰を惹起するものと判断していたのであろう。

もちろん、このような翻訳には、幾多の曲折があったと思われる。ちなみに、日本イエズス会版のキリシタン要理『どちりいな・きりしたん』(一五九一年版国字本)⁽²⁰⁾では、天魔・天狗・狗賓といった語が混用されている。例えば、第二章きりしたんのしるしとなる貴きくるすの事では、天魔と天狗とが使われ、第六章けれど、ならびにひいですのあるちいごの事では、次のような部分がある。

五には、天狗は善悪の知恵の木の実をもて、我等が先祖をたばかりすまし、又一人の科を以て一切人間を我が進退になしたるごとく、今御一人くるすの木に掛り玉ふをもて天魔は利を失い、其上又でうすーひいりよ十うまな

「つらを御身にまとひ玉ふを以て、一切衆生を彼くひん狗兄の手よりむばひとり給ひ、自由解脱の身となし給わん爲に、御身かくなり玉ふ事もつとも相応の道也。

使徒信經と信仰箇条についての章であるが、この部分はキリストによる救済についての説明を加えている。つまり、ルシフェルが人祖アダムとエバを誘惑したことで、全ての人間が天狗に自由に支配されるようになったことと同様に、キリストが十字架にかけられたことで天魔の力を削ぎ、人間としてキリストが現われたために、全ての人間に救済がもたらされた(狗兄から奪い返した)というのである。これだけの文章の中で、天狗・天魔・狗兄が混用されている。

ハビアンの『妙貞問答』には、樂園追放をもたらしした誘惑者を天魔と呼び、神に叛いた天使達を天狗としている。⁽²¹⁾
さらに、

インヘルノト云悪人後世ニ苦を受ベキ所ハ、此地大ノ真中ニ有事ニテ侍。……(中略)……彼安如ト申セシ天人ヲ……(中略)飛行自在、融通無碍ノ徳を先キトシテ、……(中略)……即ごうす不御罰ヲ与ヘ玉イテ、ルシヘルヲ初メ、クミセシ安如をば悉ク天上ヨリ追下シ玉イ、此地中ニ獄所ヲ定メサセラレ、……(中略)……天狗トハ申也。⁽²²⁾

ハビアンの理解では、ルシフェルを天魔とし、それに従った墮天使達を天狗としていたのであろう。当時のキリシタン信徒の間では、ハビアン程の語学に長じた者も少なくはなかったとも思われる。したがって、天魔・天狗・狗

といった用語も相当に浸透していたと判断できる。しかしながら、長い潜伏期間の後に記録された、天地始之事の文中には、天狗だけが残されていた。ここで、キリシタンの布教者側の論理を離れて、民間信仰の側から、つまり、潜伏キリシタンの信仰的基盤から、天狗という用語のもつ意義をとらえ直してみよう。そうすることで、雷の神となつて中天を支配する醜悪な神が、キリシタンの神話的世界の中で果たしている役割を理解することができるのである。さらには、アンジョがしらジュスヘルが、神に許しを求めめる場面のこっけいさも理解できるのではないだろうか。⁽²³⁾

天狗についての説話は少なくない。『今昔物語集』⁽²⁴⁾の本朝仏法部卷二十の第一話から第十二話までは、天狗もしくは天狗と思われるものを主題としている説話である。この一連の説話に共通しているのは、天狗が仏法修行者によつて、その験力の弱さを知らされるといふ筋になつてゐることである。第二「震旦天狗智羅永寿渡此朝語」では、震旦の天狗が仏僧に悪戯しようとするが散々な目に合わされ、けがをするといふ話である。輿に乗つてゐる僧が火災の如く見えたり、僧に駆使される童子が天狗には恐しく見えるのである。また、第四「祭天狗僧参内裏現被追語」では、物の氣に悩む天皇を治した修行僧は、実は天狗を駆使する僧で、高僧等の加持によつて、この真相が暴露される。こういった説話の中では、仏教修行者と天狗の外法邪術者との区別がなされている。言うまでもなく仏教の側になつて、今昔物語は編纂されているのであるから、邪術としての天狗の外法は卑下されているのは当然である。しかし、第十二「伊吹山三修禅師得天狗迎語」では、念仏しか唱えない僧侶が、壮嚴な迎えを受けて浄土へ往生したかの如く見えたが、数日後天狗によつて木の上に縛りつけられているのが発見されたといふのである。智慧の無い仏僧は天狗の謀りごとにかかると言つてゐる。したがつて、仏法と外道の論理だけでは理解できない。

今昔物語に登場する天狗は、やはり虚空を飛行する姿で描かれている。第十一「龍王為_二天狗_一被_レ捕語」では、天狗が龍王や僧侶を空中から捕らえるものとしている。後に、龍王がこの天狗を蹴殺すと、翼の折れた屎瑠の姿になったという。また、第三「天狗現_レ仏坐_三木末_一語」では、実のならない柿の木に仏が現われ、微妙な光を放ち、花を降らせながら、仏法に智_とり深い者の力で見破られ、屎瑠の姿となって地上に落ちたというのである。天狗は姿を変じ、飛行し、人々を欺くことができるものとされていたことが理解できる。しかし、これらの天狗の外法は、幻影であった。この幻影に欺かれるのは、仏法修行の不足を示すのである。

しかし、平安末期以降、天狗ははるかに畏怖すべきものと思われるようになる。和歌森太郎氏は『修驗道史研究』⁽²⁵⁾の中で、天狗地狗が世の中を不可測の方向へ転変させ人々を混乱に陥れる原因と見るようになったのが、平安末から鎌倉時代であると述べ、貴族社会が下層社会との隔たりを増し、現実の変化を王法即仏法の論理で割りきれなくなつたところに由来すると考えている。すなわち、九条兼実は、『玉葉』治承四年三月十七日の条で、三井寺園城寺の衆徒らによって法皇・上皇がつれ去られたことを此「事偏天狗之所為也 仏法王法滅尽了」(これは偏えに天狗の仕業で、仏法も王法も滅んでしまったのだ)となげいている。⁽²⁶⁾天狗は、ここでは幻影でなく、現実のものとなつてしまつたのである。こういつた、△天狗の現実化√は、説話類にも影響を及ぼしている。

『神道集』巻第十ノ五十「諏訪縁起事」⁽²⁷⁾は、甲賀三郎譚として知られている。この中で、甲賀三郎が地下の世界を遍歴する原因となつたのが、妻春日姫の失踪であり、これは三郎には「此偏此山天狗共仕態」であると見えた。後日譚では、伊吹山の難杖房という天狗の仕業であつたとしている。つまり、人をさらいつれ去る、怖るべき存在として描き出されているのである。

あるいは『太平記』巻第五の「相模入道田楽をもてあそぶ并びに闘犬の事」⁽²⁸⁾では、やはり天狗のためにひきおこされたものとして、入道の狂気が描かれる。相模入道が酔って舞を舞っていると、そこに田楽法師十余人が現われた。楽しそうに聞えたので、ある官女がのぞき見ると、「鬚勾テ鴉カラスノ如クナルモノアリ。異類異形ノ媚者メシヤ共が姿ヲ人ニ変ジタルニテゾ有ケル」という有様で、あわてて城の入道に知らせると、天狗が踏荒したらしく、汚れた畳の上には鳥や獣の足跡があったというのである。これは世の乱れをも示していた。こういった天狗の所行は、またこれを駆使する山伏修験者達の勢力の変化をも意味していた。したがって、仏教修行に対立する存在としての天狗は、次第に仏教に接近したものとされるのである。『源平盛衰記』巻八には、驕慢無道の仏徒が天狗になるとの考えが見られる。

「死すれば必ず天魔と申鬼に成候也。其形頭は天狗、身は人に左右の羽生たり、前後百歳の事を語て通力あり、虚空を飛事如隼ハヤブサ仏法者なるが故に地獄には不墮、無道心なるが故に往生もせず」⁽²⁹⁾

と述べている。羽が生えて虚空を隼の様に飛び、地獄に墮ちないが往生もしない仏徒であるという。『沙石集』巻第七の二十「天狗ノ人ニ真言教タル事」⁽³⁰⁾では、真言師が天狗の住むという堂に泊り、夜中そこに出現した「白クキヨゲニ太リタル法師」から、印の結び方を教えられたというのである。真実の智慧がなくて、執心偏執・我相憍慢・有相ノ行徳（虚妄の修行による徳）ある者が天狗道に入る。また、善天狗と悪天狗とあり、善行を妨げるのが悪天狗、悪天狗から仏法修行者を守るのが善天狗であると付け加えている。このように、仏法を守護する護法であるかの如く、転化してしまっているのである。近世に至れば、天狗の畏怖すべき能力も薄れて行く。

『熊野の御本地のさうし』⁽³¹⁾には、天地始之事の天狗達に酷似する存在が描かれている。すなわち、天竺の摩訶陀国の善財王には千人の后があったが、一人の王子もいなかった。後の一人五衰殿が観音像に祈念して、王の来訪を受け

て、子どもをみごもった。他の后達は五衰殿を陥れて、王に殺させる。死の直前、生まれた男子は虎・狼に養育され、高僧の手で父王の下にもどされた。事実を知った王は全てを捨てて、天竺を去り、王子・高僧と共に熊野に落ちて、熊野権現として祀られた。この説話中、次の部分がある。

さてあとにおはします九百九十九人の后はなるかみとならせ給ふ。三月より七月十五日までは赤虫となりて権現へ参れども寄せさせ給はず。

この物語は、熊野権現の御本地なり、一度読み参らせ候へば一度参りたるうちなり。この本地を用い参らせざる物は現世にては天狗の法を受け、後生にては悪道におち無間の底に沈むべし⁽³²⁾

つまり人の幸福をねたんで殺害させた后達は、なるかみ（雷神）となり、この本地の物語を聞かない者は天狗の法を受け、往生できないというのである。天狗の法を受けるとは災厄をもたらす者に支配されるとでも理解できるであろう。『神道集』⁽³³⁾では、この部分はない。したがって、近世の御伽草子の作製過程でとり入れられたのであろう。中世末期の民間信仰の世界では、天狗と雷の間に密接な関連が成立していたのであり、それが人間に災厄をもたらす存在となっていたことが理解できる。

山伏によって、あるいは密教修行者によって喧伝された天狗の姿は、民間に種々の伝承を残している。また、上述の天狗説話の中には、民間信仰の反映も当然表現されていよう。その意味で歴史的に堆積されてきたものとしての天狗の伝承を見てみよう⁽³⁴⁾。文献資料の中では、当然のことであるが故に、行間に追いやられてしまっはいるが、山中

の怪異としての天狗が民間信仰の中では大きな意味を持っていた。天狗松などの名称や天狗の宿り木など、伐採を忌む樹木がある。形が変わっていたり、他を庄する大木で、伐ると祟りがあるなどと言われる。天狗は近寄り難い神的存在なのである。天狗にさらわれた僧侶の説話から想起されるのは、天狗隠しの伝承である。子どもの姿が見えなかったと思ったら、山中で歩いているところを見付かり、しばらく正気を失っていたなどの話は、かつてはどこでも聞かれたものであった。天狗礫などといって、どこからともなく石が飛んでくることがあって、人を傷つけるわけではないが、恐れられた場所があったり、あるいは天狗倒しなどと称して、大木を伐採し、倒れる音が聞えるのに、翌朝行つて見れば、倒れた木など見当たらないといった話がある。また、天狗笑いと呼ばれる、人気の無い場所から聞える大笑いとか、小屋が揺さぶられるように感じる天狗ゆすりなどの怪異が山中ではよく語り伝えられてきた。山間や山麓の村里では、山中の怪や異人を天狗と称してきたのである。

当然、天狗は畏怖すべき対象である。しかし、このような悪戯に合うと、人々は二、三日仕事を休んだり、小屋の向きを変えたり、餅を供えたりすることで、天狗の機嫌をとる。言わば、天狗によつてもうけられた禁忌を侵犯しないようにすればよかつたのである。

また、普通では考えられない状況を天狗の仕業とも考えていた。天狗の踊り場とか、天狗の相撲場といった場所である。超人的な力が働いたものと見たのであろう。天狗の所行は怖るべきものであったが、その怒りを買わねば、さして問題にすべきものではなかつた。

昔話に語られる天狗は、⁽³⁵⁾人にだまされる間抜けな存在である。隠れ糞や鼻の高くなる扇を奪われる天狗は、笑話の中に登場する重要な役柄である。畏怖され、近づき難い神格・精霊からは転落してしまつていて、妖怪としての権威

さえも見られない。民間伝承や説話中の天狗の観念は、両義性をもった存在であった。飛行自在で、姿を変えて出現し、怪異を働き、災厄をもたらす。しかし一方では、その醜悪な姿にもかかわらず、失敗を繰り返し、欺かれながらも、人々の間に出現するトリックスターの存在でもあった。

IV 天狗伝承とキリシタン信仰

キリシタンの天狗観は、中世から近世にかけて展開した天狗の意識にもとづいて成立した、宗教的修行の妨げをなす存在としてのそれであった。すなわち、中天にあって自由に虚空を支配し、天帝（デウス）と下界の人間を隔てるものであった。また、雷の神として、自然を統御し、マサンの木の実を駆使して天への道をとぎそうとする怖るべき存在である。ここには「熊野の御本地のさうし」の中の悪逆な振舞をした后達の如く、後生に至っても人々に災厄をもたらす \wedge なるかみ \vee となつていった姿と重ね合わせて考えることもできよう。しかし、その行間には、悪の根源としての性格と同時に、トリックスターの間の抜けたこっけいさをも感じられるのである。神によって、中天に蹴落されながらも、雷の神となって生き続けるジュスヘルや人々に災厄をもたらすべく暗躍する天狗達は、キリシタン達の意識の中では、憎悪の対象ではあるが、また一方では憎みきれないものさえ感じさせる。キリシタンは、罪を犯したエワの子孫であり、後悔の生活を送ることで天の道を求めるのである。それを妨げようとする \wedge 天狗 \vee もまた、 \wedge 天地始之事 \vee という神話の中では欠くことのできない存在である。 \wedge 天狗 \vee は、キリシタンの生きる意義を明らかにしてくれるものであつて、神話を構成する重要な要素となっている。しかしながら、日本人の多神教的な民間信仰の

基盤を考慮しないまま、 \wedge 天狗 \vee という両義的な概念を、悪魔にあてはめたことよって、旧約聖書とは異質な雰囲気を持たせようとした。キリシタンは宣教によってもたらされた神話を、忠実に伝えながらも、民間信仰的要素を付加しつつ、キリシタンとしての \wedge 神話 \vee を再構成していったと言えよう。⁽³⁶⁾

註

- (1) レヴィイストロース「神話の構造」(同『構造人類学』みすず書房、一九七二年)
- (2) キリシタン用語はラテン語、ポルトガル語等の原語が直接使用されることが多かった。これらの単語は、転訛しつつもキリシタン農民によって伝承されてきた。
- (3) 本文中で後述するが、キリシタン独特の用語で、キリスト教本来の概念ではないと考えられる。
- (4) 「天地始之事」は原則として、田北耕也校註(『キリシタン書排耶書』岩波書店、一九七〇年 三八一ページ)と四〇九ページ)によった。田北によれば、文政年間の筆録によるものとされる。また、必要に応じて、田北『昭和時代の潜伏キリシタン』(日本学術振興会、一九五四年)を参照した。また片岡弥吉校註(『日本庶民生活史料集成』第十八巻 三一書房 一九七二年)も対照した。引用にあたっては、キリシタン用語は片仮名書きとした。原版では平仮名(傍線)であったが、民俗語彙同様に扱った。
- (5) コロテルは原語不明、パライソーテリアル(地上の楽園)の変化したものと見ることもできる。そうすれば、神が下天したという後述の部分も明らかになる。
- (6) アンジヨは天使、ジュスヘルはルシフェル(Lucifer)
- (7) シクダ……サバタ(月……土)ドメイゴスはドミンゴ(日曜日)、キリシタンの洗礼名には、この名がよく見られる。日曜日に生まれた者の名である(女はドメイガスとなる)。
- (8) 田北によれば、洗礼を授ける意。幼児洗礼が原則であって、七日目のナツケの祝いとも習合している。
- (9) サルペーレジナで始まる祈禱文、このような由来の説明が随処にある。

- (10) オラッショ (Oratio) ラテン語から、科のオラッショは潜伏中、正月に踏絵をしたあとも唱えたとされる。
- (11) 田北によれば、黒船の来航と禁令の解除が予言されていたとされる。四百余年は、徳川幕府の支配期間に相当する。それが、救済の時期と考えられていたとすれば、幕末から明治初期の一連のキリシタンの発覚とも重要な関連があると言える。
- (12) 角は天狗には普通見られないが、キリシタンの場合、洗礼を角欠ぎと呼び、子が生まれてくると角をとってやり、バライソに行くことができるようにするものとされている。
- (13) この三悪人にも角がある。阿修羅の像を思わせる姿である。
- (14) あまへしやくまはアマンジャク(天邪鬼)である。
- (15) 田北『昭和時代の潜伏キリシタン』一〇〇ページ。
- (16) ルイスⅡフロイス『日欧文化比較』(岩波書店 大航海時代叢書XI 一九六五年)
- (17) 森島恒雄『魔女狩り』(岩波書店 一九七〇年)、ミシュレ『魔女』(篠田浩一郎訳 岩波書店 一九八三年)等参照
- (18) 海老沢有道『耶穌会士と修験道との交渉』(『増訂切支丹史の研究』新人物往来社一九七一年)
- (19) 土井他編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店 一九八〇年)
- (20) 前掲『キリシタン書排耶書』所収 二一ページ、四三ページ
- (21) 前掲『キリシタン書排耶書』所収 一六八ページ
- (22) 同右 一六七ページ
- (23) 本文中前掲「わが悪心ゆへに……」
- (24) 新訂増補国史大系第十七巻 吉川弘文館 五三〇―五五三ページ
- (25) 和歌森太郎『修験道史研究』(平凡社 東洋文庫 一九七二年) 一五七ページ
- (26) 和歌森『修験道史研究』所引 一五八ページ
- (27) 近藤喜博編『神道集 東洋文庫本』(角川書店 一九七八年) 二九五―三三五ページ
- (28) 『太平記一』(岩波書店 日本古典文学大系34 一九六九年) 一六二ページ
- (29) 和歌森『修験道史研究』所引 一六一ページ
- (30) 『沙石集』(岩波書店 一九六九年) 三一七―一九九ページ

- 31) 『御伽草子』(岩波書店 一九七二年)
- 32) 同右 四三三ページ
- 33) 近藤編前掲書「熊野権現事」四五―五七ページ
- 34) 柳田国男『山の人生』(定本柳田国男集第四卷所収 筑摩書房 一九六八年)、岩科一郎「天狗ノート」(同『山の民俗』岩崎美術社 一九六八年所収)等参照
- 35) 関敬吾編『日本昔話大成九』(角川書店 一九七九年) 五五―七四ページ等参照
- 36) 本論をなすにあたっては、本学の諸先生をはじめとして、多くの方々の御教示があった。記して感謝したい。また、天地始之事については、谷川健一『わたしの「天地始之事」』(筑摩書房 一九八二年)より啓発されることが多かった。また、論ずべき多くの問題を残している資料であり、今後ともとり組んでいきたい。

後	編
記	集

▼「紀要」第十二号をお手もとにお届けします。今号は、英米語・歴史・民俗・体育学・仏教・文学の各分野に関連する論考を所収いたしました。これは英米語学を中核としつつ多面的で幅広い視野にたつて all-round の研究教育を進める本学の特色を象徴的に表わしたものともいえます。

▼最近、六十七年度をピークとする十八歳人口の急増急減に対応するため、私大・学科の新増設と定員増に関する「新高等教育七カ年計画中間報告案」がまとめられましたが、短大の国際化・開放化・個性化という三本柱を充実させる上で、今号に所収されているような国際的で个性的な研究内容が何ほどの寄与をもたらすことができれば幸いです。こうした研究成果の積み重ねは、学科の新増設と定員増に対応しえる展望をきり開く土台となるものではないかと思われれます。

▼「紀要」は、論文・エッセイ・書評と図書紹介を中心に編集していく方針です。今号には研究・調査・翻訳についての論文とエッセイを掲載しました。エッセイは約一年間ロンドン大学において自費留学生生活をおくり、その間にソ連の英語教育の現状を見聞した内容をまとめていただいたものです。前号でも、O Aと英語教育および女子英語教育の歴史に関する論考を収めました。このエッセイもそれらと関連するものであり、英米語の研究教育の推進にとって今何をなすべきかを考えるための課題が提示されていると思われれます。英米語・英文学研究をはじめとする国際性と開放性をそなえた個性的な論文・エッセイを発表していく場として、この「紀要」を大いに活用されることを切望してやみません。

東京立正女子短期大学紀要 第12号

昭和59年2月20日 印刷

昭和59年2月28日 発行

編集 東京立正女子短期大学紀要編集委員会
印刷所 株式会社 三 協 社

〒164 東京都 中野区 中央4-8-9

T E L 03 (383) 7 2 8 1 (代)

発行所 東京立正女子短期大学

〒166 東京都杉並区堀ノ内2-41-15

T E L 03 (313) 5 1 0 1 ~ 3

**THE JOURNAL
OF
TOKYO RISSHO JUNIOR COLLEGE
FOR WOMEN**

No. 12

February 1984

CONTENTS

A Few Words about the Current Teacher-Training in Japan —from a Glimpse of English Teaching in the U.S.S.R.—Fumie Tajima	1
Nichiren's <i>Opening the Eyes</i>Translated by Kyotsu Hori	21
The Deep Structure of <i>Begin</i> + toJunko Shimizu	46
A Study on Infants' and School Children's Safety Ability (2)Tsuma Sugie	64
Literature and Buddhism in Rohan Kohda.....Kyocho Ishikawa	121
The Meaning of <i>Tengu</i> in <i>Tenchi hajimari no koto</i> — <i>Kirishitan's</i> Mythological World (1)—Takehiro Kamiya	144

**Published by
Tokyo Rishsho Junior College For Women**

TOKYO JAPAN

ISSN 0386-7161